富士宮市文化財調査報告書　第13集

渋　沢　遺　跡

富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書　第13集

渋　沢　遺　跡

富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

富士宮市教育委員会

序

富士宮市は富士山より南西、および西方にかけて緩やかな裾野の傾斜地にひろがる地であり、恵まれた気候、風土は遠く原始の時代より人々の生活が営まれ、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財につきましては文化財保護法に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めておりますが、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからず影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっており、開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施して、記録保存の措置をとっております。

今回、調査報告書が刊行されます富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う渋沢遺跡埋蔵文化財発掘調査につきましても、関係諸機関との慎重な協議が重ねられ、昭和57年10月から58年12月までの間、延べ日数にしまして50日余を費やしたものであります。そして、その成果は別記に報告のとおり、単に富士宮市の歴史を探る手がかりだけでなく、広く周辺地域の原始、古代史解明への貴重な幾多の新資料を提供してくれました。

人類文明の曙についての経過は今だ定かでなく、この問題の解明には発掘調査という地味な成果を徐々に積み重ねる以外に方法はありません。こうして遅々ではありますが明らかにされつつある郷土の歴史は単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として大切に生かされて行くべきであろうことに大きな意義を持たなければならないと思います。

ここに富士宮市文化財調査報告書第13集、渋沢遺跡を刊行して、多くの方々のご批判とご指導を承るとともに、最後になりましたが、本書の刊行にあたり、埋蔵文化財の意義を理解され、格段のご配慮を賜りました地元関係者の皆様、また調査の完遂にご指導いただきました静岡県教育委員会のご尽力に対しまして深く感謝の意を表します。

平成元年３月

富士宮市教育長　田　口　哲

例　　言

1．　本書は富士宮市立富丘小学校の運動場拡張事業に伴い発掘調査を実施した、静岡県富士宮市淀師字渋沢501－1番地外に所在する渋沢遺跡の調査報告書である。

2．　発掘調査は富士宮市教育委員会が実施したものである。

3．　発掘調査は昭和57年10月～12月に第1次調査、昭和58年7月に第2次調査、同年11･12月に第3次調査をそれぞれ実施した。

4．　発掘調査は富士宮市教育委員会社会教育課主査・渡井一信、同学芸員・伊藤昌光があたり同主査・馬飼野行雄が補佐した。

5．　発掘調査資料の整理は渡井と、富士宮市教育委員会嘱託・山上英誉が主体として実施し、馬飼野及び、整理作業員の協力を得た。

6．　本書の執筆は渡井と山上があたった。その分担は、各文末に記す。

7．　遺構関係の図は主に渡井が作成した。土器の実測・清書は山上があたり、土器拓影、断面実測は山上が整理作業員の協力を得て実施した。石器の実測・清書は整理作業員の協力を得て渡井があたった。

8．　遺構の写真撮影には、渡井・伊藤があたり、出土遺物の写真撮影については、土器を山上、石器を馬飼野があたった。なお、航空写真は富士宮市弓沢町397番地・望月晟敏氏及び、富士宮市市民部市民生活係長・後藤章氏より提供されたものである。

9．　地形図・遺構図に記す高度は全て海抜高度をもって示している。

10．　第1、4、7図に用いた地形図は、第1図が昭和60年1月、第4図が昭和45年2月、第7図が昭和51年10月に、それぞれ建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。

11．　土器実測図は縮尺4分の1、土器拓影図は縮尺3分の1で掲載されており、図中に縮尺が示される。石器もその法量が多岐にわたるため、3分の2、4分の1、8分の1と、それぞれの図中に縮尺を示している。

12．　土器観察表に記される胎土の略語は以下のとおりである。
粗…粗粒　細…細粒　多…多量　少…少量　微…微量　砂…角閃石・輝石・かんらん石等を混えるもの　砂礫…粒度が粗くなる。

13．　土器観察表に記される色調は、破片面積の最も広い範囲を専有する色合いである。新版標準土色帖　農林水産省農林水産技術会議事務局鑑修で補って判断している。

14．　印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。

15．　発掘調査に関する全ての資料は富士宮市教育委員会で保管している。

16.　調査及び、報告書の作成にあたって、次の方々から協力をいただいた、記して感謝する次第である。〈敬称略〉

荻精吾、植松章八、野村昭光、中野国雄、加納俊介、平野吾郎、小野真一、稲垣甲子男、若月正己、石黒立人、佐藤由起男、滝沢　亮、林原利明

17.　発掘調査現場作業員、整理作業員は以下のとおりである。

望月秀雄、杉沢正敏、佐野秋男、勝亦英雄、小林七造、友野勝、塩川浩正、依田孝郷、佐野　一、高木　均、土井満里子、渡辺房子、渡辺直美、大原初江、望月あき子、望月安子、芦川美智子、　勝又麻里、　北川みゆき、赤池由香子、佐野知穂、川合美枝子、渡井啓子

※本調査の現場作業に従事され、多大なるご労苦、ご協力をいただいた、今は亡き小林、大原両氏のご冥福を心よりお祈り申しあげます。

目　　次

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過……1
　1　経　緯……1
　2　経　過……3
　3　荻氏表採資料について……5
Ⅱ　環　境……7
　1　遺跡の位置と環境……7
　2　土　層……8
　3　周辺の遺跡……10
Ⅲ　遺　構……11
　1　A地区……11
　2　B地区……12
　3　C地区……12
　4　B地区調査区域外……15
　5　富士宮市史掲載資料について……18
Ⅳ　遺　物……22
　1　土　器……22
　2　石　器……50
　3　その他……58
Ⅴ　調査総括……59
　1　渋沢遺跡の土器について……59
　2　土器棺墓について……60
　3　石器について……62
　4　おわりに……64
　付　編……65
　1　荻氏表採資料について……65
　2　別所遺跡の資料について……65
　3　押出遺跡の資料について……66

挿　図　目　次

第１図　位置図
第２図　発掘調査区域図
第３図　Ａ地区全体図
第４図　周辺地形図
第５図　地形断面図
第６図　土層図
第７図　周辺の遺跡
第８図　調査区全体図
第９図　遺構実測図
第10図　土器棺墓実測図
第11図　Ｃ12号遺物集中区遺物出土状況図①
第12図　Ｃ12号遺物集中区遺物出土状況図②
第13図　Ｃ７号土器棺墓出土土器
第14図　Ｃ８号土器棺墓出土土器
第15図　Ｚ－７グリッド調査区域外出土土器
第16図　富士宮市史掲載資料①
第17図　富士宮市史掲載資料②
第18図　器種分類図
第19図　富士川町山王遺跡出土土器
第20図　波状文の分類図
第21図　土壙出土土器
第22図　Ｃ12号遺物集中区出土土器①
第23図　Ｃ12号遺物集中区出土土器②
第24図　Ｃ12号遺物集中区出土土器③
第25図　Ｃ12号遺物集中区出土土器④
第26図　Ａ地区出土土器①
第27図　Ａ地区出土土器②
第28図　Ａ地区出土土器③
第29図　Ａ地区・Ｂ地区出土土器
第30図　Ｃ地区出土土器
第31図　石器実測図①
第32図　石器実測図②
第33図　石器実測図③
第34図　石器実測図④
第35図　その他の遺物
第36図　渋沢遺跡周辺の土器棺墓
第37図　荻氏表採土器①
第38図　荻氏表採土器②
第39図　荻氏表採土器③
第40図　別所遺跡表採土器
第41図　押出遺跡表採土器

挿　表　目　次

第１表　発掘調査経過表
第２表　遺構計測表
第３表　土壙出土土器観察表
第４表　Ｃ12号遺物集中区出土土器観察表
第５表　Ａ地区出土土器観察表
第６表　Ｂ地区出土土器観察表
第７表　Ｃ地区出土土器観察表
第８表　石器組成表
第９表　石器計測表①
第10表　石器計測表②
第11表　荻氏表採資料土器観察表
第12表　別所遺跡・押出遺跡表採土器観察表

図 版 目 次

図版 1 航空写真
図版 2 調査概要①
図版 3 調査概要②
図版 4 調査概要③
図版 5 調査概要④
図版 6 出土土器・富士宮市史掲載資料①
図版 7 富士宮市史掲載資料②
図版 8 土壙出土土器①
図版 9 土壙出土土器②
図版 10 C12号遺物集中区出土土器①
図版 11 C12号遺物集中区出土土器②
図版 12 C12号遺物集中区出土土器③
図版 13 C12号遺物集中区出土土器④
図版 14 C12号遺物集中区出土土器⑤
図版 15 A地区出土土器①
図版 16 A地区出土土器②
図版 17 A地区出土土器③
図版 18 A地区出土土器④
図版 19 A地区・B地区出土土器
図版 20 B地区出土土器
図版 21 B地区・C地区出土土器
図版 22 出土遺物
図版 23 出土石器①
図版 24 出土石器②
図版 25 出土石器③
図版 26 荻氏表採土器①
図版 27 荻氏表採土器②
図版 28 荻氏表採土器③
図版 29 荻氏表採土器④
図版 30 表採土器

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過

1　経　緯

渋沢遺跡は富士宮市淀師、市立富丘小学校南側及び、東側に位置する農業・荻精吾氏の宅地並びにその周辺の畑地で東西90～100ｍ、南北60～90ｍが包蔵範囲と認められる。

同地においては、戦前より耕作中に多数の遺物を出土し、壺がたくさん並んで出土した状況もみられたが、破壊されたという。戦後も、壺や甕がいくつかかたまって出土し、荻氏によって保存されたという（植松1971）から、地元ではかなりはやくから遺跡として捉えられていたと考えられる。しかし、昭和初期の『静岡県史第１巻』（静岡県1930）や、本地域を対象にした「吉原周辺の原始時代（第２報）」『吉原市史研究資料第２号』（中野1954）、『静岡県東部古代文化総覧』（小野1957）等の文献にその名はなく、文献に最初に現れるのは、『静岡県遺跡地名表』（静岡県教育委員会1961）からで、弥生時代後期（飯田式）の遺跡として把握されている。

それを改めて弥生時代中期初頭の遺跡として紹介したのが『駿豆考古第６号』（小野他1962）の「富士宮市渋沢遺跡出土の弥生土器」－丸子式土器の新資料－であり、丸子式土器に相当する壺形土器６点や甕形土器１点などとともに打製石包丁、環状石斧を含む石器類等が報告されている。その後、『弥生式土器集成本編２』（小林・杉原1968）において、前述の壺形土器の６点、甕形土器１点を再実測して掲載している。さらに、『富士宮市史上巻』（植松1971）においてその後の発見となった磨製石包丁や大型の砥石等を加えた紹介がなされ、本遺跡出土の遺物は、いよいよ丸子式期の最優秀資料としての評価を受けるに至ったのである。

さてそうした中、昭和57年度になり富士宮市教育委員会庶務課より市立富丘小学校の運動場拡張計画が提示された。学校敷地南端に沿って通じる県道白糸・富士宮線を南側に移動して運動場を拡張しようというもので、昭和57年度に付け替え道路建設工事、58年度に運動場造成工事を実施するという計画であった。埋蔵文化財の取扱いについては、記録保存の措置を講ずる方向で調整が進み、昭和57年10月より調査を開始し、昭和58年12月までに終了することで合意をみた。ここに渋沢遺跡における初の発掘調査が実施される運びとなった。

第１表　発掘調査経過表

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
第１次調査（昭和57年）	試掘調査	10月																															
	本調査	11月																															
		12月																															
第２次調査（昭和58年）	本調査	７月																															
第３次調査（昭和58年）	本調査	11月																															
		12月																															

静岡県行政図
上九一色村
①山王遺跡
（富士川町）
②別所遺跡
（富士宮市）
③渋沢遺跡
（富士宮市）
④押出遺跡
（富士宮市）
⑤南二条遺跡
（山梨県
上九一色村）
0
4000

第1図　位置図

2　経　過

発掘調査は、第１表の発掘調査経過表に示すとおり、第１次調査から第３次調査までの延べ53日間で実施された。以下各次の調査経過についての詳細を記すことにするが、まず各次における調査区の範囲を簡単に記しておく。

第１次調査区……　付け替えのため新たに道路敷となる部分及び、現況の道路敷とに挟まれた部分で、調査区中央やや東寄りを南下する道路を境に東側をＡ地区、西側をＤ地区と呼称した。対象地の面積はＡ地区が約150 ㎡、Ｄ地区が約2,200 ㎡である。

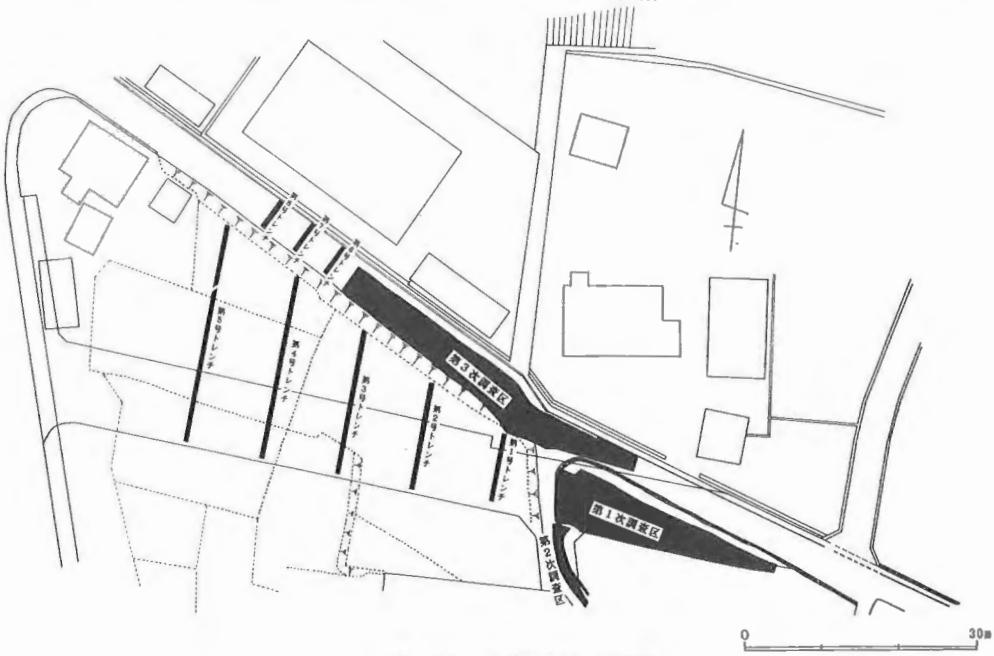
第２次調査区……　付け替え道路の進入路整備に伴うもので、前述の調査区中央やや東寄りを南下する道路の拡幅部分で、面積は約50㎡である。Ｂ地区と呼称した。

第３次調査区……　現況の道路敷部分で、面積は約800 ㎡である。Ｃ地区と呼称した。

①　第１次調査区発掘調査経過

Ｄ地区（昭和57年10月21･22日）

本地区はその大部分が畑地であるが、Ａ・Ｂ・Ｃ地区に比して１ｍ程、段をなして低くなっている状況であった。荻氏によれば、過去において畑地→水田→畑地という土地利用があり、転地返し（マサヌキ）や、土砂の移動が何度か行われたという指摘を受け、包含層の有無を確認するため、トレンチによる試掘調査を実施した。トレンチは付け替え道路に対し直角方向に巾１ｍで10ｍ置きに５箇所を設定した。その結果、区域西寄りの第４・５号トレンチにおいて



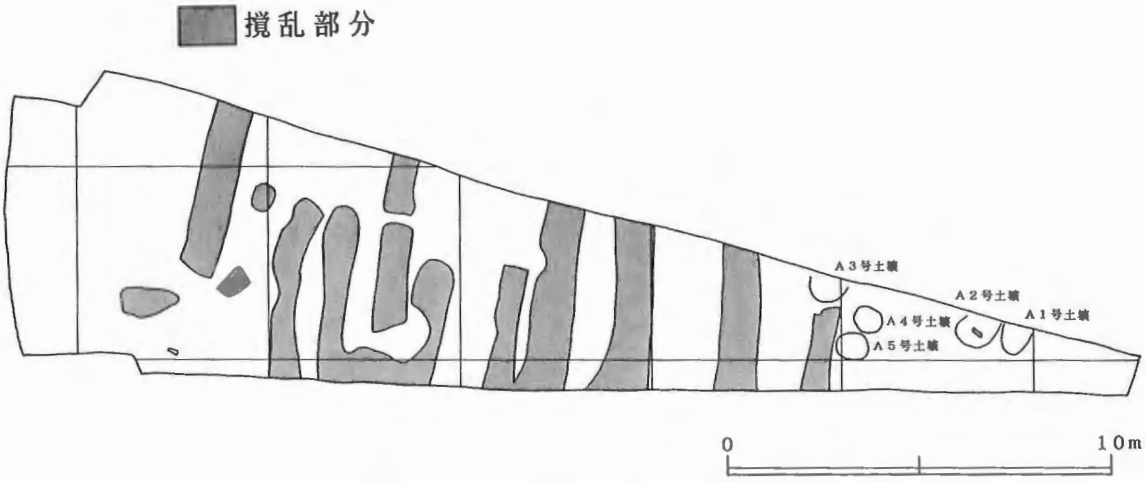
第２図　発掘調査区域図

は、表土層（約30cm）直下に砂礫層がひろがり、以下粘土層が幾重にも堆積し、沖積砂礫層特有の堆積状況を持つもので、包含層は確認されなかった。また、第１～３号トレンチにおいても、前述の指摘どおり包含層が消滅若しくは攪乱されており、トレンチ内での遺物の検出は皆無に等しい状況であった。

Ａ地区（昭和57年11月８日～12月15日）

本地区も畑地であるが、付け替え道路の起点にあたる部分で二等辺三角形状の区画が調査区となった。初めに調査区南辺を基軸として５ｍのグリッドを設定して（第８図）調査を進めることとし、その呼称は南から北へ Ａ・Ｂ・Ｃのアルファベット、東から西へ１・２・３の数字列とした。したがって、具体的にはＡ－１、Ａ－２グリッドと呼称し、それはＢ・Ｃ地区にも踏襲することとした。

調査は表土・耕作土（第Ⅰ層）の除去作業より開始し、地表面より１ｍ程の深さにまで及ぶことが確認された。さらに、第Ⅱ～Ⅴ層中においては、ほぼ１ｍ置きに地表面よりの攪乱が確認された（第３図）。これは、篤農家である荻氏が生姜の貯蔵穴として掘られたもので地表面より２ｍにも及ぶものであった。結果的に遺物包含層は第Ⅲ・Ⅳ層、遺構確認面は第Ⅴ層であったことから調査区の約1/3 は攪乱をうけていることが判明した。したがって、発見された遺構と遺物は攪乱を免れた部分からのもので、遺構としてはＡ－１・２・３グリッドより土壙５基を検出した。遺物としては土器、石器などの破片資料に混じって、大型の打製石斧（石鍬）２点を検出した。



第３図　Ａ地区全体図

② 第２次調査区発掘調査経過

Ｂ地区（昭和58年7月18日～22日）

本地区はＡ地区とＤ地区の間を南下する道路を付け替え道路の進入路として拡幅するのに伴うもので、Ｚ－６・７、Ｙ－６グリッド内に位置する。Ａ地区と同様地表面より１ｍ程の表土下より第Ⅱ層以下本遺跡の基本層序が確認された。

調査はまず、区域南半のＹ－６グリッド内の第Ⅱ層上面より掘り込まれた、近代（明治～昭和）の溝を確認した。地元古老等によれば、本地区北側を流れる風祭川の水を、当所より南東方向の淀師地区に運んでいた用水路跡で、上新堀（うわしんぼり）と呼ばれていたものであるという。弥生時代の遺構として土壙１基を確認した。遺物としてはＢ６号土壙上部出土の磨石以外は破片資料であったが、調査終了後に区域外において、水道管移設工事に際し、頸部以上を欠く壺形土器１個体を採集した。発見時の状況は曖昧であるが土器棺墓と捉えるのが妥当であろう。

③ 第３次調査区発掘調査経過

Ｃ地区（昭和58年11月15日～12月16日）

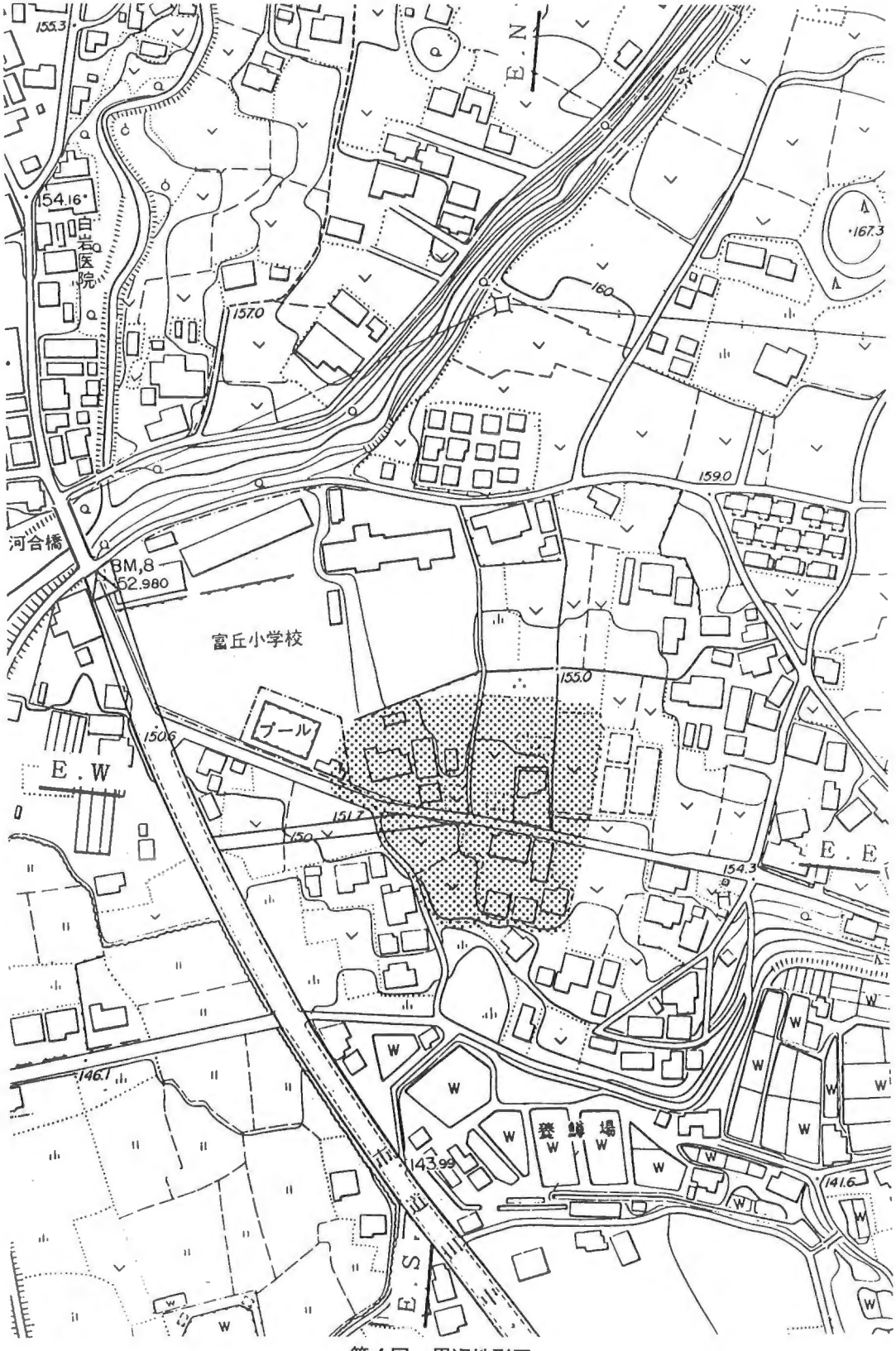
本地区は県道白糸・富士宮線が付け替えられた後の道路敷部分にあたり、東西約90ｍの範囲に及ぶ。その西側部分では、Ｄ地区での経験からトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、調査区東端より50ｍ程でＤ地区同様の沖積砂礫層を確認した。したがって、調査はＢ－５グリッドからＦ－13グリッドの範囲で実施された。

本地区においても最初に確認されたのは上新堀跡であった。Ｃ－８グリッド中央でほぼ南北方向に巾、深さとも約１ｍを測った。弥生時代の遺構としては、土壙５基と遺物集中区１箇所が確認された。このうち、Ｃ７号とＣ８号は土器棺墓と認められた。また、Ｂ－５・６、Ｃ－５・６グリッドで検出されたＣ12号遺物集中区については遺物が確認された他、掘り込み等は確認できなかった。遺物としては、Ｃ７号土器棺墓から壺形土器と甕形土器のセット、Ｃ８号土器棺墓の甕形土器やＣ12号遺物集中区からは、数個体の土器が出土した。

3　荻氏表採資料について

富士宮市教育委員会では、本調査終了後、荻精吾氏と協議の結果、氏のご厚意により耕作中に表採された土器・石器類全資料を預かり保管することになった。土器は整理用コンテナ５箱分、石器は220 点余りであった。いずれも発掘調査による出土数に匹敵するものである。これらのうちには、『駿豆考古第６号』（小野他1962）や、『弥生式土器集成本編２』（小林・杉原1968）あるいは、『富士宮市史上巻』（植松1971）等に掲載された資料も含まれているが、それ以外は未発表資料であることから、土器の一部分については付編で、石器については本編において扱うこととした。

（渡井）


155.3
154.16
白岩医院
157.0
160
167.3
159.0
河合橋
BM,8
152.980
富丘小学校
155.0
プール
150.6
E.W
151.7
150
154.3
E.E
146.1
養鱒場
143.99
141.6
E.S

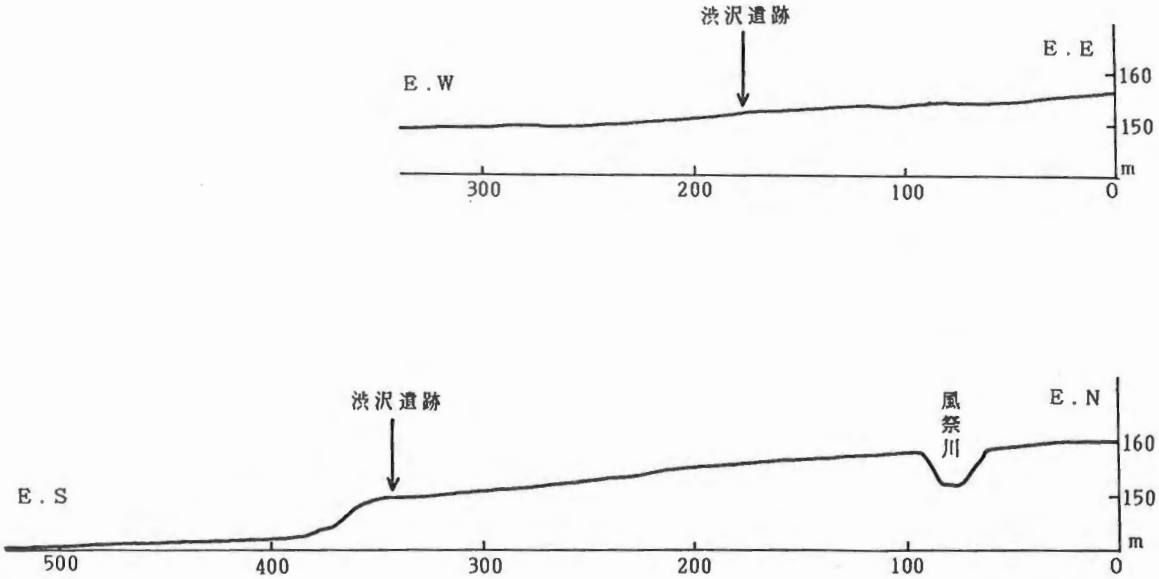
第4図　周辺地形図

Ⅱ　環　境

1　遺跡の位置と環境

渋沢遺跡は、富士宮市淀師字渋沢501-1番地外に所在する。ＪＲ身延線富士宮駅より、北北西へ直線距離にして約３Ｋｍの地点である。遺跡のすぐ前方には、豊富な湧水を利用した養鱒場や、水田がひろがるが、のどかな田園地帯であったこの辺りにも近年、急激な市街化の波が押し寄せている。

本遺跡を地形的にみると、山梨県境の富士宮市根原より天守山地、羽鮒丘陵に対峙する北高南低の富士山西麓緩斜面（富士裾野）の末端部にあり、すぐ南の低段地とは約５ｍの比高をもつ、所謂舌状台地の先端部分である。基盤的にも古富士集塊質泥流の上にのる大宮熔岩、万野風穴熔岩等の新富士火山噴出物層の末端部にあたる。このことは、不透水層である古富士泥流上を流れる地下水脈（豊玉川）が露出する結果となり、豊富な湧水の因となっている。また、遺跡の西側約200ｍの地点で潤井川と風祭川が合流しており、富士山の放射谷である風祭川がつくり出す扇状地と潤井川沖積地の接点となっている。潤井川沖積地は１～1.5 kmのひろがりをもち、真南に流路をとり、大中里付近で東に転じ大宮断層崖下に通じ、富士裾野の末端部を区割する。この辺りから潤井川の右岸側には黒田・星山地区の、左岸側には富士根地区の富士宮市内有数の埋蔵文化財包蔵地が密集する地域となっている。



第５図　地形断面図

2　土　層

本遺跡の発掘調査対象地内における、基本的な土層堆積の様相はつぎのとおりである。

Ⅰ　黒色土層……　黒色有機質土からなる表土層で耕作土である。

Ⅱ　黒褐色土層……　黒色を呈するスコリア質土層で、Ⅲ・Ⅳ層が流失してⅠ層と混じたものとみなし得る。軟質で細かなスコリア粒子を若干含む。

Ⅲ　褐色土層……　本遺跡における遺物包含層である。スコリア粒子含有の密、粗でⅣ層とは、あえて細分したが、明確な相違は看取され得なかった。若干しまって、細かなスコリア粒子を多量に含む。

Ⅳ　暗褐色土層……　Ⅲ層とともに遺物包含層である。Ⅲ層に比べ若干スコリア粒子の含有が少ない。本層以上での遺構検出は極めて困難であった。細かなスコリア粒子をかなり多く含む。

Ⅴ　暗茶褐色土層…　比較的よくしまり、大粒のスコリア粒子をかなり多く含む。本層の上面が遺構検出面となった。

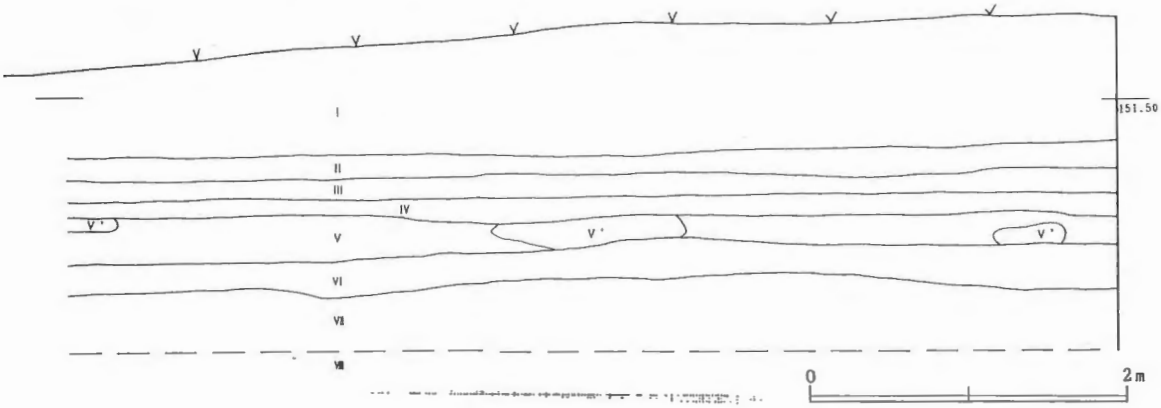
Ⅴ′　暗黄褐色土層…　粘性が強く黄褐色土を混入する。風倒木痕的様相を呈し、Ⅴ層内において、対象地内各所でみられた。

Ⅵ　茶褐色土層……　大、小、不揃いのスコリア粒子を多量に含む。地元でアリマサ、あるいはアリンドマサとよばれているもので、サラサラでしまりがない。遺構の中で本層にまで及ぶものもあった。

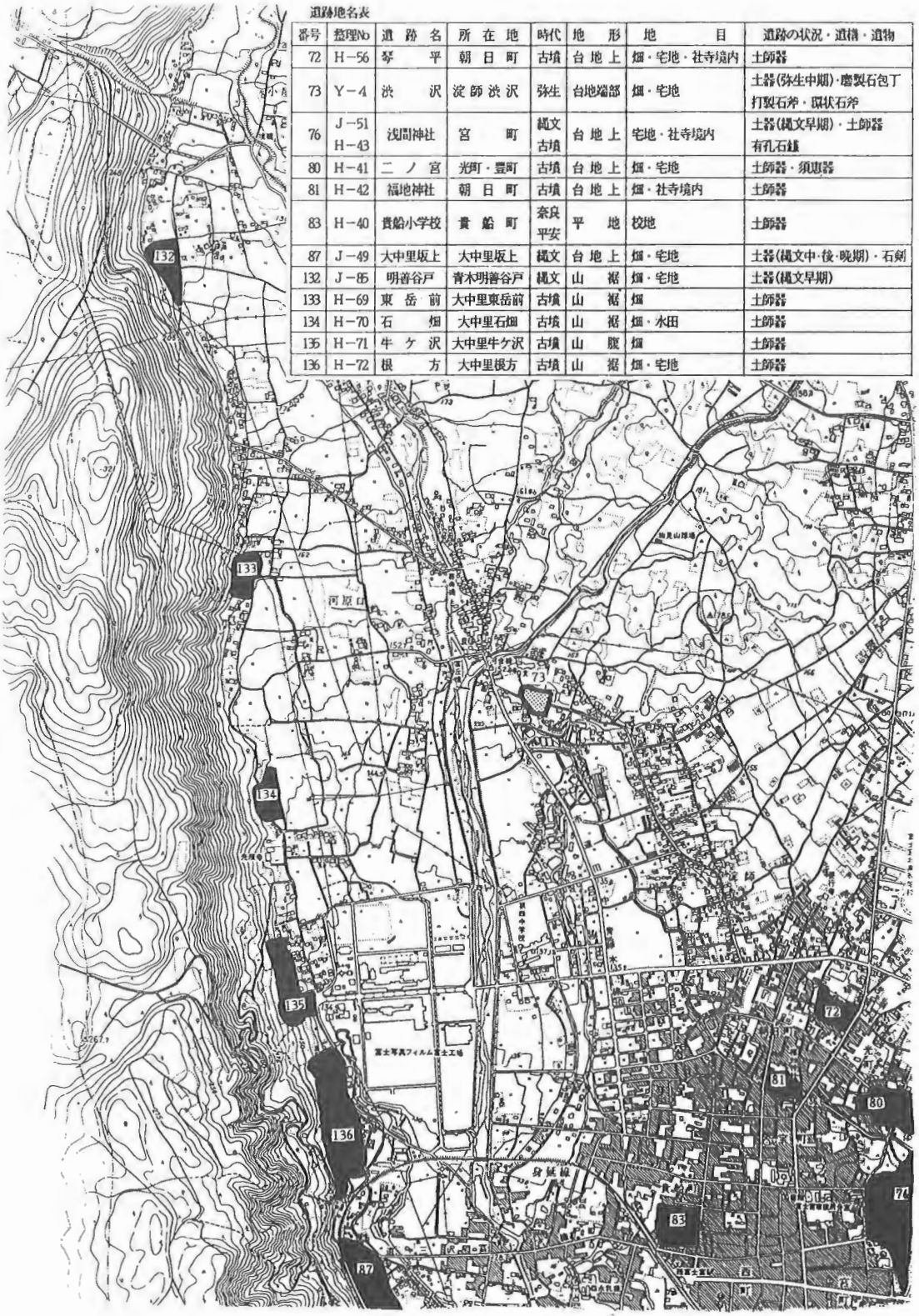
Ⅶ　青灰色土層……　砂質で若干の粘性をおびる。

Ⅷ　暗黄褐色砂礫層…　火山性砂礫層である。

以上が本遺跡における基本的層序であるが、本地域（富士山西南麓）に普遍的な、表土層→大沢ラピリ層→黒褐色土層→栗色土層→富士黒土層→黄色ローム層という層序は全くみられず富士山裾野の末端部の潤井川と風祭川の合流する扇状沖積地の様相を強く示す。第６図はＣ地区東端南壁の土層堆積状況である。



第６図　土　層　図（Ｃ地区）



遺跡地名表

番号	整理No	遺跡名	所在地	時代	地形	地目	遺跡の状況・遺構・遺物
72	H−56	琴平	朝日町	古墳	台地上	畑・宅地・社寺境内	土師器
73	Y−4	渋沢	淀師渋沢	弥生	台地端部	畑・宅地	土器(弥生中期)・磨製石包丁 打製石斧・環状石斧
76	J−51 H−43	浅間神社	宮町	縄文 古墳	台地上	宅地・社寺境内	土器(縄文早期)・土師器 有孔石鏃
80	H−41	二ノ宮	光町・豊町	古墳	台地上	畑・宅地	土師器・須恵器
81	H−42	福地神社	朝日町	古墳	台地上	畑・社寺境内	土師器
83	H−40	貴船小学校	貴船町	奈良 平安	平地	校地	土師器
87	J−49	大中里坂上	大中里坂上	縄文	台地上	畑・宅地	土器(縄文中・後・晩期)・石剣
132	J−85	明善谷戸	青木明善谷戸	縄文	山裾	畑・宅地	土器(縄文早期)
133	H−69	東岳前	大中里東岳前	古墳	山裾	畑	土師器
134	H−70	石畑	大中里石畑	古墳	山裾	畑・水田	土師器
135	H−71	牛ケ沢	大中里牛ケ沢	古墳	山腹	畑	土師器
136	H−72	根方	大中里根方	古墳	山裾	畑・宅地	土師器

第7図　周辺の遺跡

3　周辺の遺跡

①近接の遺跡　（第７図）

富士宮市の遺跡分布を大観すると、潤井川中流域と弓沢川流域に遺跡は集中している。前者は、主として星山丘陵上に位置し、後者は富士山麓末端部の湧水地点に一致している。渋沢遺跡は、潤井川中流域の上端にあたり、南から東南に向かってひろがる潤井川沖積地をのぞむ位置にある。この沖積地は右岸を羽鮒丘陵、星山丘陵に、左岸を富士山扇状地末端地形によってせりだされている。このため細長い構造をとらざるを得ず、一種の溺れ谷的性格を形成し、現在にいたるまで何度も洪水が繰り返えされている。こうした要因からか沖積地内部の低湿地においては未だ遺跡が確認されず、その周囲の微高地にかぎられている。このことは本遺跡に近接する地域内にも言えて、琴平、浅間大社、二ノ宮、福地神社、貴船小学校の各遺跡、羽鮒丘陵裾部に大中里坂上、明善谷戸、東岳前、石畑、牛ケ沢、根方の各遺跡が存在する（富士宮市教育委員会1979、補足1986）。※各遺跡の詳細は第７図内遺跡地名表参照

②近似の遺跡　（第１図）

渋沢遺跡周辺において、条痕文系土器が確認される遺跡としては、富士川町山王遺跡、富士宮市別所遺跡、押出遺跡、山梨県上九一色村南二条遺跡がある。以下に概観を示す。

山王遺跡　（富士川町岩淵字南吉野）

渋沢遺跡の南方約９㎞に位置し、現東名高速道路富士川サービスエリアにあたる。平野部をのぞむ低丘陵の先端に立地する。縄文早・前・晩、弥生後期、古墳時代等の遺構、遺物が検出されている。縄文晩期末の土器群は氷Ⅰ式系が主体であるが、条痕文系土器（水神平式）もかなりの量出土する他、遠賀川式土器の壺と甕の破片が各１片ずつ出土する。石器の出土は、打製石斧、石錘、石匙、磨製石斧、石棒、石剣、石鏃等である。(稲垣他1975)

別所遺跡　（富士宮市安居山字別所）

渋沢遺跡の南方約２㎞、潤井川右岸の羽鮒丘陵裾部の標高約180ｍ程の低丘陵上に立地する。二十片余りの土器が採集されており、このうちの十数片が条痕文系土器である。他に氷Ⅰ式系土器２点が含まれる。(付編２参照)

押出遺跡　（富士宮市外神字押出）

昭和63年に発見された遺跡で、渋沢遺跡の北方約３㎞、風祭川右岸の国指定天然記念物、万野風穴の入り口周辺である。標高245～250ｍ程の富士山麓緩斜面に位置する。数十片の土器片が採集されており、その殆どが条痕文系土器である。(付編３参照)

南二条遺跡（山梨県上九一色村富士ケ嶺南二条）

渋沢遺跡の北方約18㎞の標高 960ｍの尾根の緩斜面に位置し、遺跡の南方には谷が東西に走る。弥生時代後期後半の壺型土器が畑の耕作中に出土したとされるとともに、同尾根からは弥生時代中期初頭の条痕文土器の散布が認められている(中山1985)。　（渡井）

Ⅲ　遺　　構

1　A地区

本地区からは、土壙５基が調査区東端に集中して検出された。中央部にひろがる耕作の攪乱により影響が考えられる。

Ａ１号土壙　（第９図　図版２）

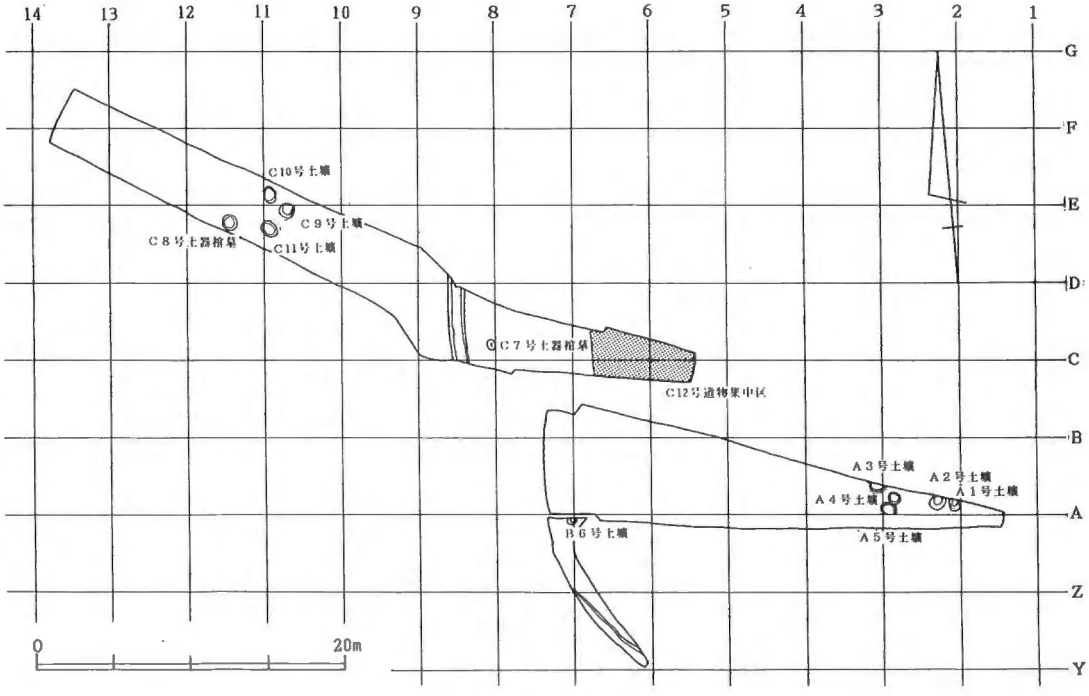
Ａ－１、Ａ－２グリッドにまたがり検出された。北半部は道路下に入り、調査不可能であった。長軸約１ｍの長楕円形の土壙と思われる。底面は起伏をもち、断面は袋状を呈する。基本層序の第Ⅴ層上面より掘り込まれ、第Ⅵ層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片25点と石器（石鏃１、礫剝片４）５点が出土した。

Ａ２号土壙　（第９図、図版２・３）

Ａ－２グリッドで検出された。北側の一部が道路下に入り、調査不可能であった。不整楕円形で、底面はほぼ平坦で、断面は袋状を呈する。基本層序の第Ⅴ層上面より掘り込まれ、第Ⅵ層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片22点、石器（礫剝片）９点の他、直上の第Ⅳ層中より大型の打製石斧（石鍬）が出土したが、本土壙との共伴関係はつかめなかった。

Ａ３号土壙　（第９図、図版２）

Ａ－２、Ａ－３グリッドにまたがり検出された。北半部は道路下に入り、調査不可能であった。直径約75cmの円形の土壙と思われる。底面はほぼ平坦で、断面は袋状を呈する。基本層序



第８図　調査区全体図

第２表　遺構計測表

遺構名	出土区（グリッド）	形状	長軸方位	規模（cm）			出土遺物（点）		特徴・備考
				長軸長	短軸長	深さ	土器	石器	
Ａ１号土壙	Ａ－１～Ａ－２	長楕円形？	Ｎ－34°10′－Ｅ	（５９）	６２	３３	２５	５	袋状を呈す、北半部は区域外
Ａ２号土壙	Ａ－２	不整楕円形	Ｎ－27°19′－Ｗ	９１	７２	４３	２２	９	袋状を呈す、北一部は区域外
Ａ３号土壙	Ａ－２～Ａ－３	円形？	――	７５	（？）	３６	１７	４	袋状を呈す、北半部は区域外
Ａ４号土壙	Ａ－２	円形	Ｎ－16°50′－Ｗ	７０	６５	１３	１８	――	
Ａ５号土壙	Ａ－２～Ａ－３	楕円形	Ｎ－30°00′－Ｗ	８２	６５	２８	１６	２	袋状を呈す
Ｂ６号土壙	Ｚ－７	円形	Ｎ－65°00′－Ｗ	７０	（６０）	２６	――	３	
Ｃ７号土器棺墓	Ｃ－８	円形	Ｎ－40°80′－Ｗ	４５	３９	２６	２	４	甕（上）・壺（下）の組合せ
Ｃ８号土器棺墓	Ｄ－11	円形	Ｎ－30°70′－Ｅ	４２	４０	２５	１	２	甕単独
Ｃ９号土壙	Ｄ－10～Ｅ－10	円形	Ｎ－76°60′－Ｗ	１１８	１０９	４１	９	――	袋状を呈す
Ｃ10号土壙	Ｅ－11	長楕円形	Ｎ－10°50′－Ｅ	１００	５９	２１	７	１	袋状を呈す
Ｃ11号土壙	Ｄ－10～11	長楕円形	Ｎ－54°50′－Ｗ	１０４	５８	５７	４	――	袋状を呈す
Ｃ12号遺物集中区	Ｂ－５・６，Ｃ－５・６	――	――	――	――	――	８２	２７	

の第Ⅴ層上面より掘り込まれ、第Ⅵ層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片17点、石器（礫剝片）４点が出土した。

Ａ４号土壙　（第９図、図版２）

Ａ－２グリッドで検出された。直径約70cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁面はなだらかな立ち上がりをもち、基本層序の第Ⅴ層上面で確認された。壙内遺物として土器破片18点が出土した。

Ａ５号土壙　（第９図、図版２・３）

Ａ－２、Ａ－３グリッドにまたがり検出された。楕円形で、底面はやや起伏をもち、断面は袋状を呈する。基本層序の第Ⅴ層上面より掘り込まれている。壙内遺物として土器破片16点、石器（石斧１、礫剝片１）２点が出土した。

２　Ｂ地区

本地区からは、土壙１基が検出された。

Ｂ６号土壙　（第９図、図版３）

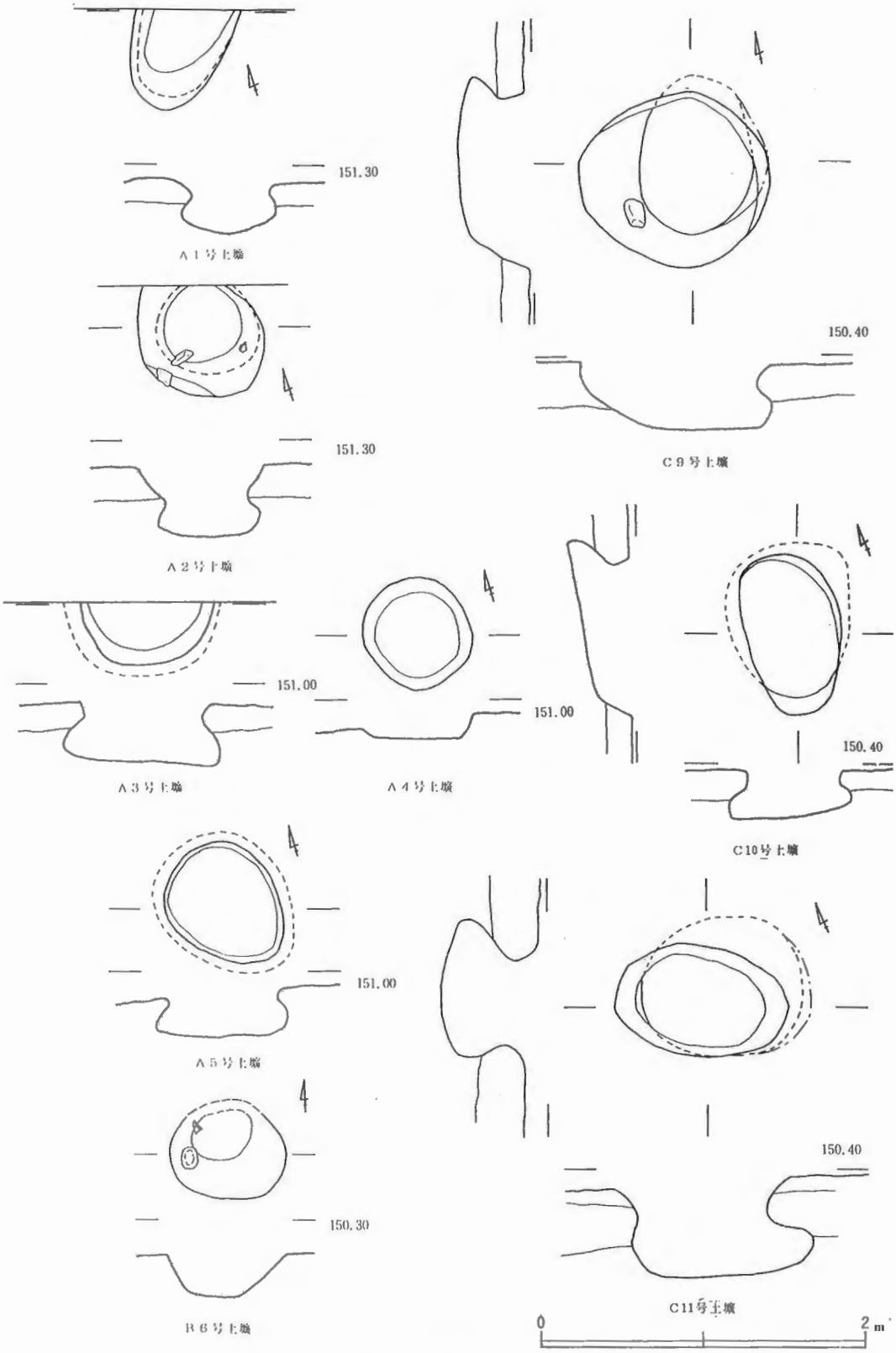
Ｚ－７グリッドで検出された、北側の一部を撹乱により欠くもので、直径約70cmの円形土壙と思われる。底面はほぼ平坦で、壁面はなだらかに立ち上がる。基本層序第Ⅴ層上面より掘り込まれている。壙内遺物として、第Ⅴ層直上で磨石、覆土内より石器（礫剝片）２点が出土した。

３　Ｃ地区

本地区からは、土器棺墓２基、土壙３基、遺物集中区１箇所が検出された。

Ｃ７号土器棺墓　（第10・13図、図版４・６）

Ｃ－８グリッドで検出された。上半部を欠損した壺形土器の（第13図－１）を身とし、甕形


151.30
A 1 号土壙
151.30
A 2 号土壙
151.00
A 3 号土壙
151.00
A 4 号土壙
151.00
A 5 号土壙
150.30
B 6 号土壙
150.40
C 9 号土壙
150.40
C10号土壙
150.40
C11号土壙
0
2 m

第 9 図　遺構実測図

土器（第13図－２）を破砕して蓋としている。

１は球形の胴部を呈する壺形土器の下半部で、底径6.3 ㎝、残存高20.3㎝、残存部における胴部最大径28.1㎝を計る。内面の器肌の荒れが目立つが、外面は上位を横位の条痕で整形し、下位～底部をヨコナデによって整形している。色調は黄橙色～橙色を呈し、胎土には石英、長石の混入が顕著で、少量の金雲母の混入がみられる。

２は小さめの平底の底部から内彎気味に広がり、屈曲の弱い頸部を形成しながら大きな口縁を作る器形を呈する。外面は横位と斜位の条痕によって整形され、内面はヨコ方向を主体としたナデによって整形されている。また口唇部には貝殻腹縁による押圧文（押引文）が施され、底部には木葉痕が施されている。外面の胴部より上部にはススの付着が全体に亘ってみられ、元々煮沸に使われていたものが二次的に棺として転用されたものであることが看取できる。色調は外面が赤褐色～黄橙色（黒褐色）、内面が赤褐色～黒褐色を呈し、胎土は若干粗めで長石の混入が目立つもので、少量の金雲母を包含し、焼成は普通である。法量は、口径36.0㎝、器高36.6㎝、底径 7.3㎝を計る。他に石器（礫剝片を含む）４点を出土した。

Ｃ８号土器棺墓　（第10・14図、図版４・６）

Ｄ－11グリッドで、口縁部を下にし、拳大の石と共に検出された。土器は甕形土器で下半部を人為的に欠損させたもので、口径30.2㎝、胴部最大径30.2㎝、残存高19.6㎝を計る。外面は口縁部、頸部に部分的に乱れの見られる縦位羽状文を施し、その後に、胴部に横位の条痕を施している。また内面は、上位をヨコ、下位を不定方向のナデによって整形している。内外面ともススの付着がみられ、煮沸機能から転用して使用されたものである。口唇部は指頭によるヨコナデし尖らせる。ヨコナデは全周せず意識的に肥厚する箇所を等間隔に残すもので、本資料においては15、その箇所がみられる。色調は黄橙色～暗褐色、胎土は長石、金雲母の混入が目立ち、きめが細かく、焼成良好である。他に石器（礫剝片）２点を出土した。

Ｃ９号土壙　（第９図、図版５）

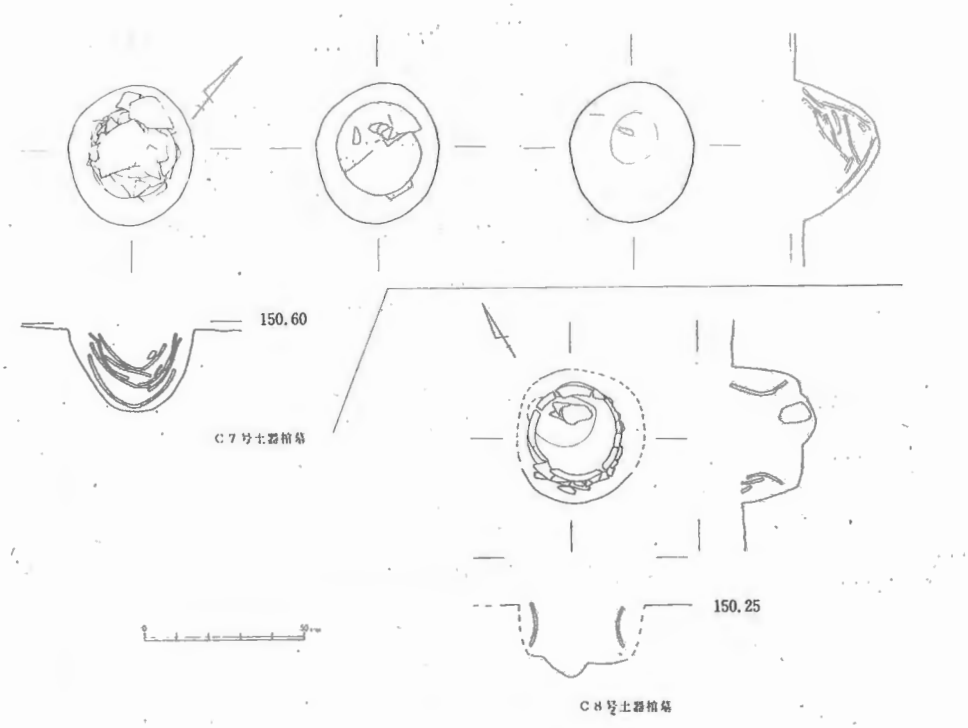
Ｄ－10、Ｅ－10グリッドで検出された。直径110～120㎝の円形で、底部はほぼ平坦で、壁面は南側で、なだらかに立ち上がり、北側は内彎して袋状となる。基本層序第Ⅴ層上面より掘り込まれ、第Ⅵ層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片９点を出土した。

Ｃ10号土壙　（第9 図、図版５）

Ｅ－11グリッドで検出された。長楕円形で、底面は西側に傾斜しており、断面は袋状を呈する。基本層序の第Ⅴ層上面より掘り込まれ、第Ⅵ層にまで及ぶ。壙内遺物として、土器破片７点、石器（礫剝片）１点を出土した。

Ｃ11号土壙　（第９図、図版５）

Ｄ－10 、11 グリッドで検出された。長楕円形で、底面はほぼ平坦で、壁面は東側でつよく、西側で緩やかな袋状を呈する。第Ⅳ層中より掘り込まれ、第Ⅵ層にまで及ぶ。壙内遺物として土器破片４点を出土した。



第10図　土器棺墓実測図

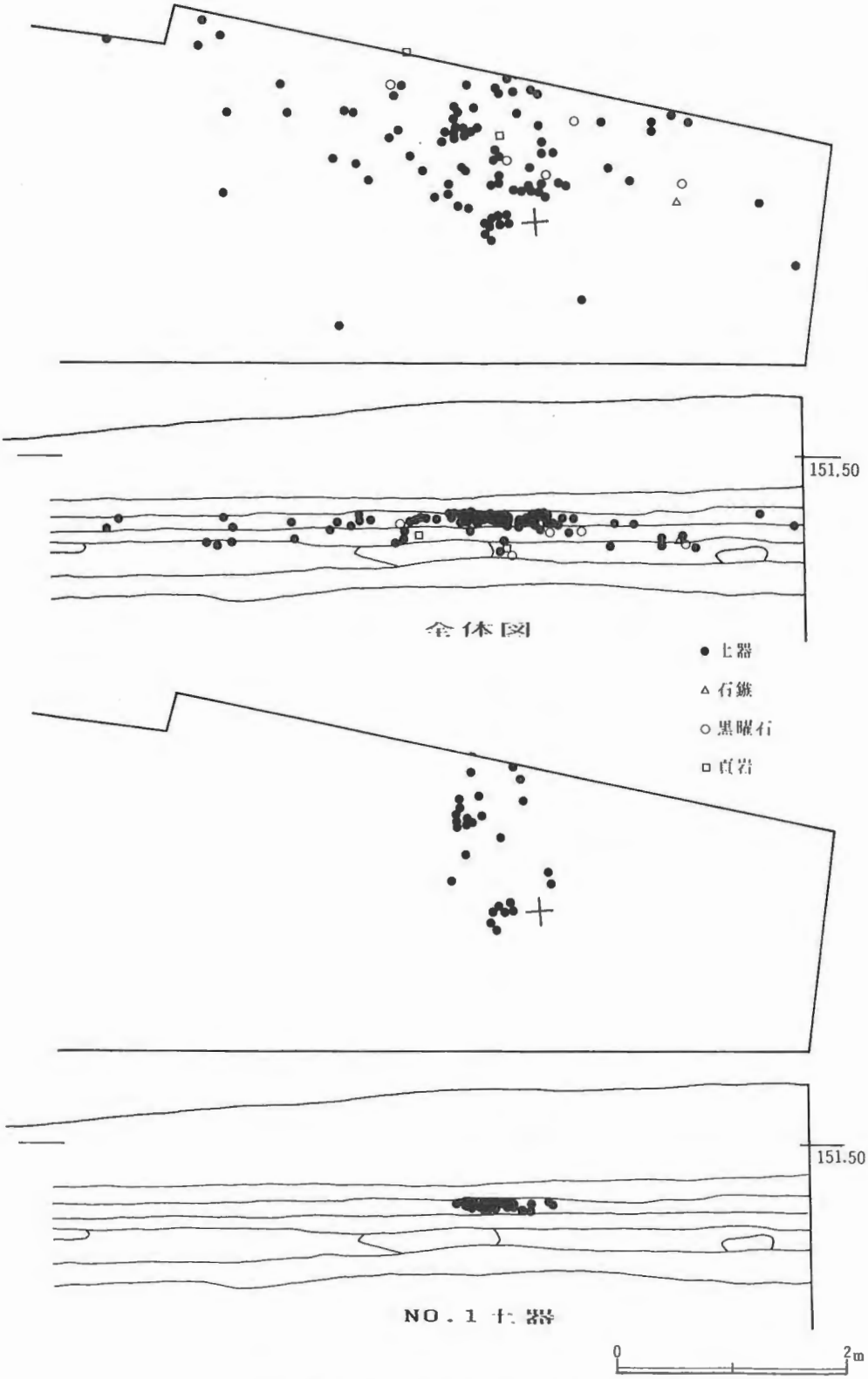
C12号遺物集中区　（第11・12・22～24図、図版10～14）

Ｂ－５・６、Ｃ－５・６グリッドで検出された。第11・12図に示すとおり、基本層序第Ⅲ・Ⅳ層中において遺物が集中的に出土した。土器は82点、石器（礫剝片を含む）27点を数える。比較的にまとまった資料として３個体がある。No１の土器（第22図）は、甕形土器の口縁部～底部にかけての1/4 程になる。推定口径34.7cm、推定器高36.3cm、底径 7.7cmを計る。外面は横位の条痕の後、頸部に縦位の条痕を施す。色調は外面が赤褐色、内面が褐色、胎土は石英、長石の混入が目立ち、焼成は普通である。No２の土器（第23図）は、甕形土器の胴部である。外面は横位の条痕の後、縦位羽状文を粗く施す。色調は外面がにぶい黄褐色、内面は褐色、胎土は石英、長石の混入が目立ち、焼成は普通である。No３の土器（第24図）は、壺形土器の胴部である。外面には磨消縄文（ＬＲ）を伴う変形エ字文がみられ、文様帯以外は横位の条痕を施す。色調は外面が明褐色、内面が褐色、胎土は石英の混入が顕著で、少量の金雲母を包含し、焼成はやや悪い。

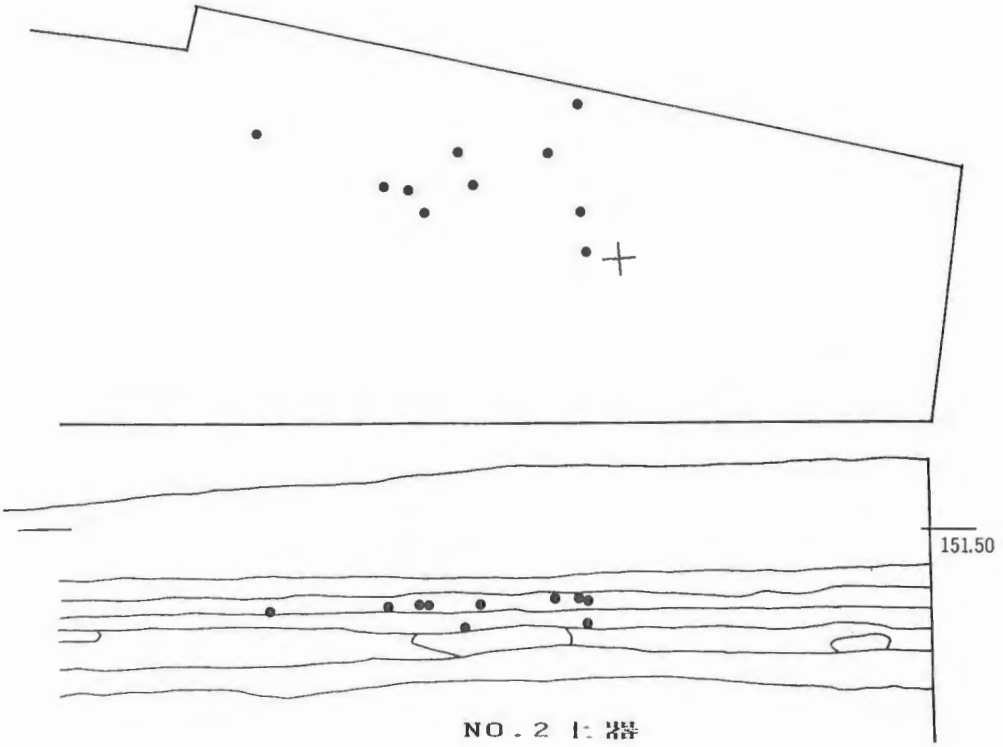
（渡井）

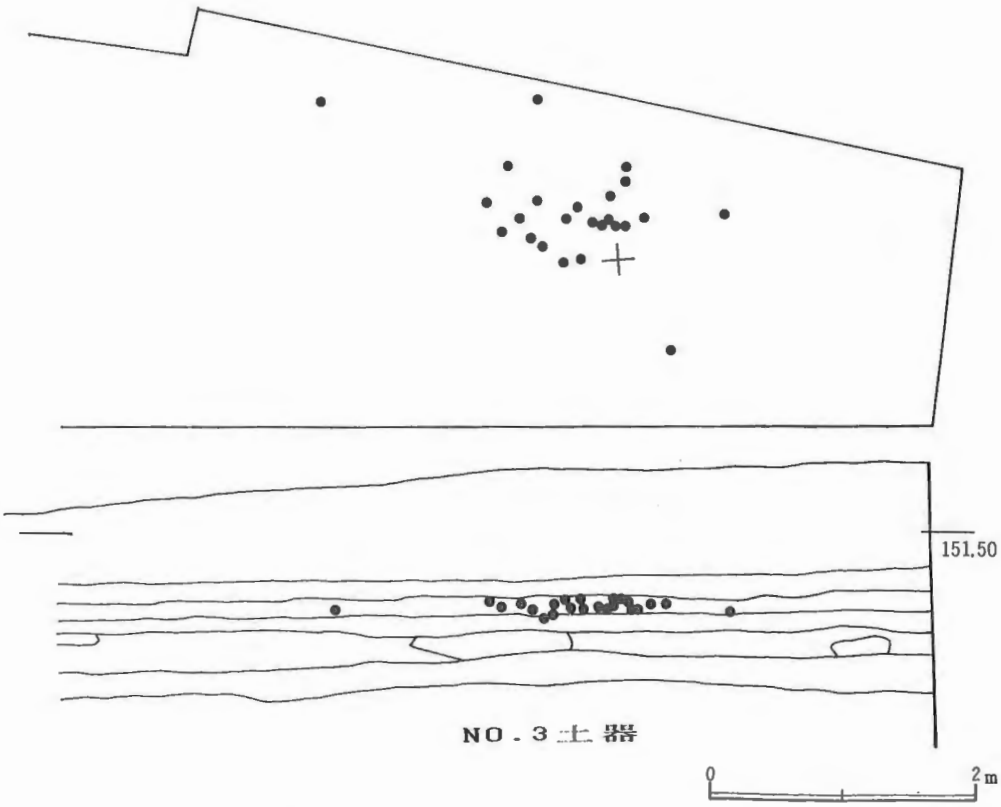
4　Ｂ地区調査区域外

Ｚ－７グリッド調査区域外出土土器（第15図、図版６）



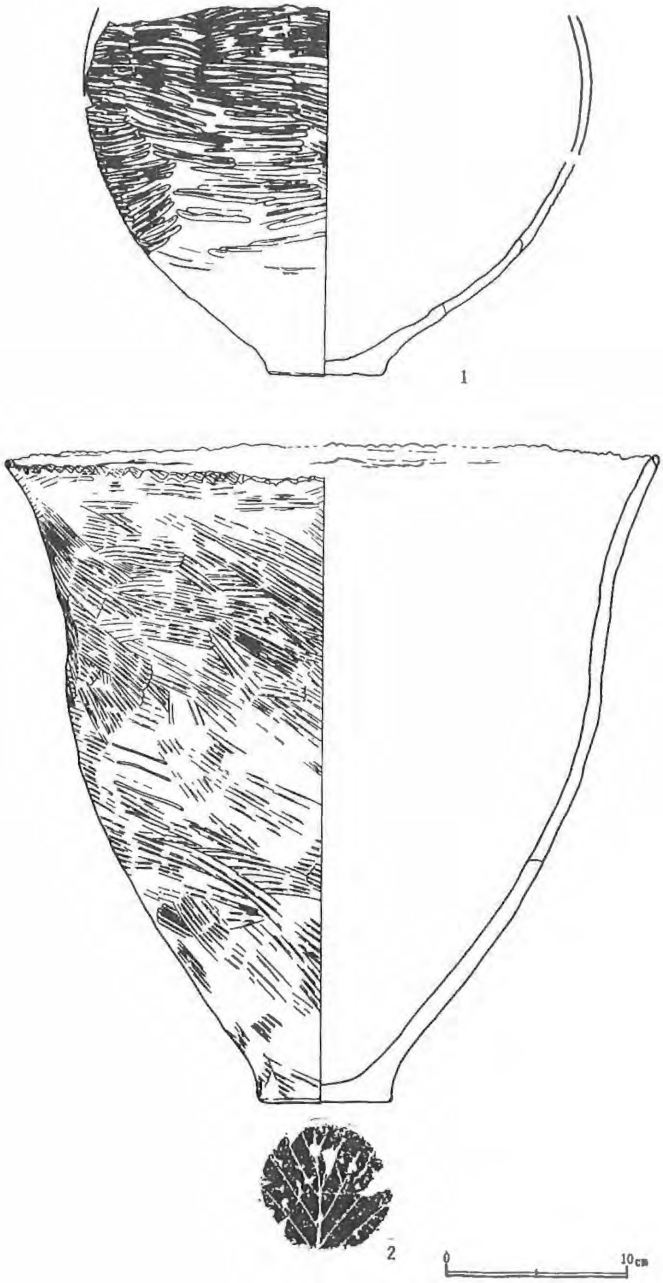
第11図　C12号遺物集中区遺物出土状況図①





第12図　C12号遺物集中区遺物出土状況図②

本資料は、底径 6.8cm 残存高 28.6cm、 胴部最大径 27.6cmで、 頸部以上を欠いている。長胴形の壺形土器で器高の割に胴径の小さな形態を示すものである。文様帯は胴部下位まで及んでおり、縦線文とそれを区画する横線文の組合わせで構成されている。文様帯以外は、横位→斜位の条痕により調整されている。底部は表面の摩耗が著しく調整方法は不明であるが安定の悪い小さな平底を呈する。内面は全体的にヨコナデにより仕上げられ、上部を中心に巻き上げ痕を残す。頸部以上は人為的に破壊され、転用された様相を示している。色調は外面が黄橙色、内面が灰オリーブ色を呈し、胎土はきめが細かく、石英の混入が目立ち、焼成はややあまい。



第13図　C－7号土器棺墓出土土器

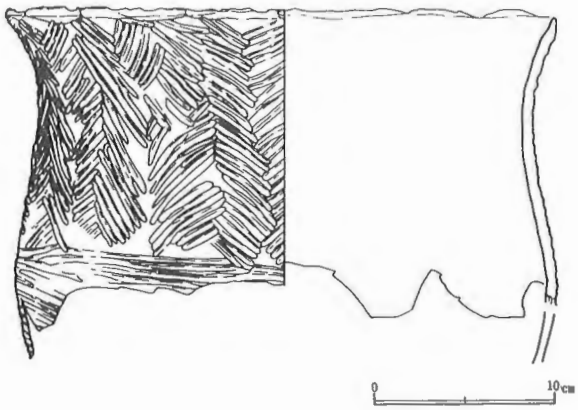
5　富士宮市史掲載資料について　(第16. 17図、図版7)

この富士宮市史(植松1971)掲載資料は、荻精吾氏により耕作中に出土したもので、駿豆考古第6号（小野他1962）において発表された後、水田耕作に絡む歴史的な位置づけが考察され、弥生時代中期前葉の標識的な資料として捉えられる端緒となったものである。

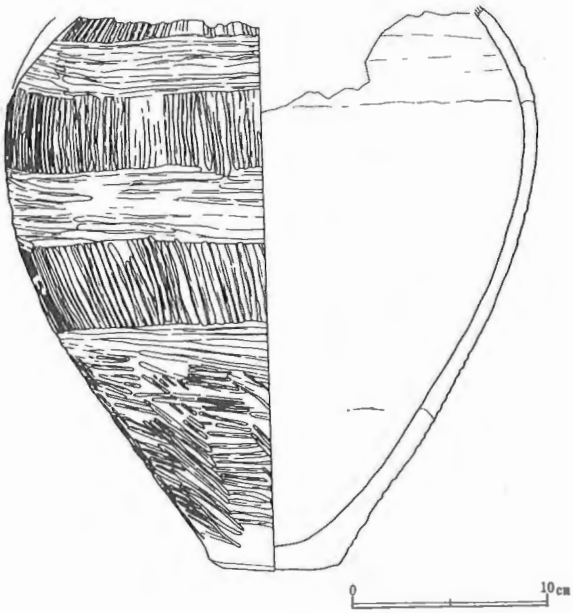
今回、発掘調査で検出された資料は、器形を知り得るものが少なく、全体の器種構成を考え

る上で、再度この発表資料を掲載することにした。各個々の詳細や観察データは過去の文献を参照することにし、簡単に紹介すると以下のようになる。なお、文章中で器種分類、口縁形態にふれているのでⅣ章１を参照されたい。

１は壺Ａ[1]で意図的に頸部以上を破壊している。２、３は壺Ａ[2]で、２も意図的に頸部～胴部にかけてを破壊している。３は、頸部以上及び胴部の1/3 あまりを欠損している。５は壺Ｂで、頸部～胴部を意図的に破壊しているもので、頸部から胴部にかけての粗い横位の条痕が施され、簡略化した形態を示すものである。表面の摩耗が著しく残存状況は悪い。４は壺Ｃ[1]で長胴気味の胴部を呈する。これも意図的に頸部以上を破壊しているようであり、また胴部の2/5 あまりを欠損している。６は壺Ｄで縄文系の壺形土器である。底部及び胴部の2/3 あまり、口縁部を欠損している。文様はＬＲの磨消縄文を沈線区画しているものである。８は甕Ｄ[1]、富士宮市史掲載資料の中で唯一全体の器形が看取できるものである。口縁の形態は甕口縁Ｉ－２を示す。７は甕Ｄ[2]で、1/5 程度の破片資料である。口縁の形態は甕口縁Ｉ－２を示す。



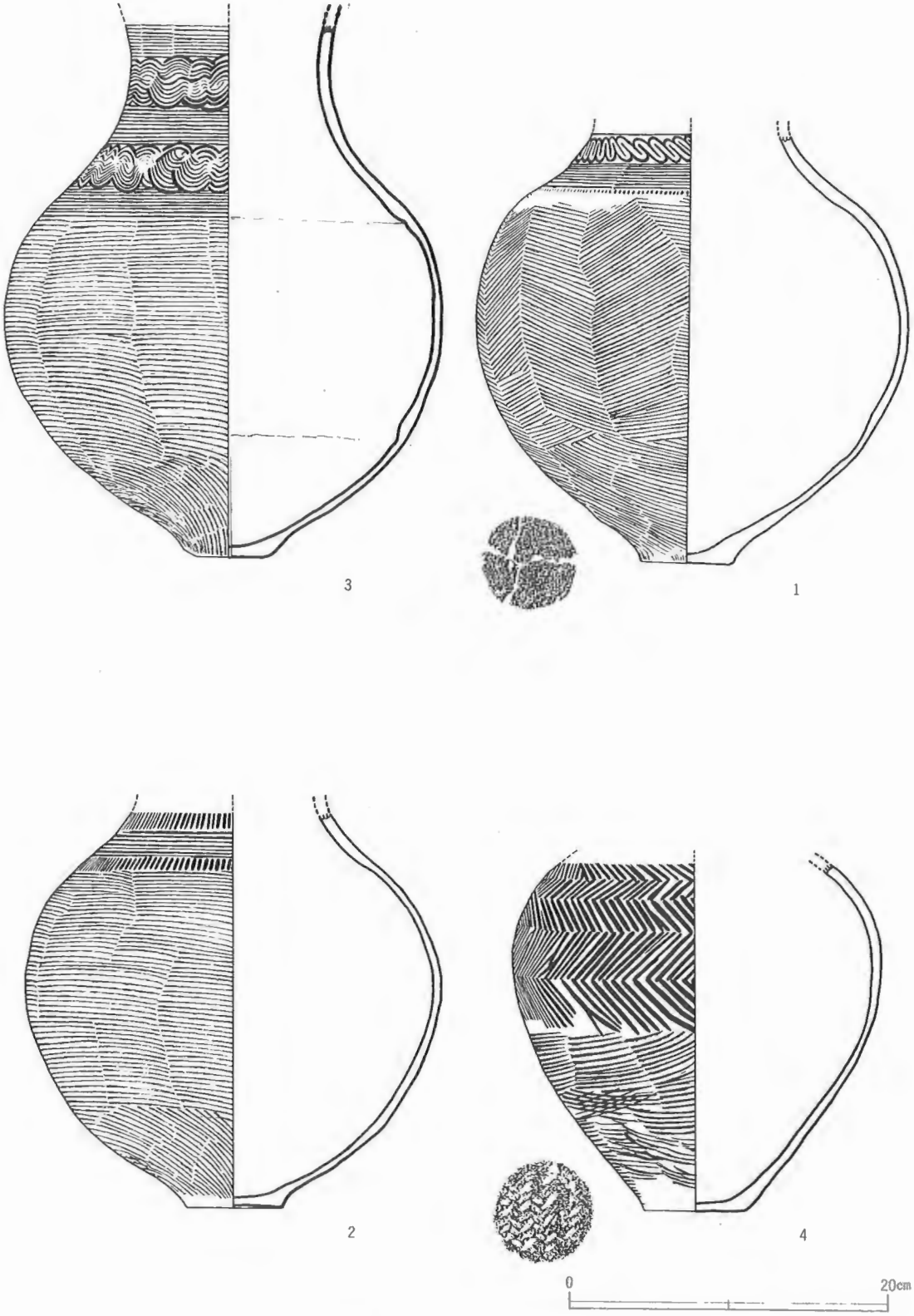
第14図　Ｃ－８号土器棺墓出土土器



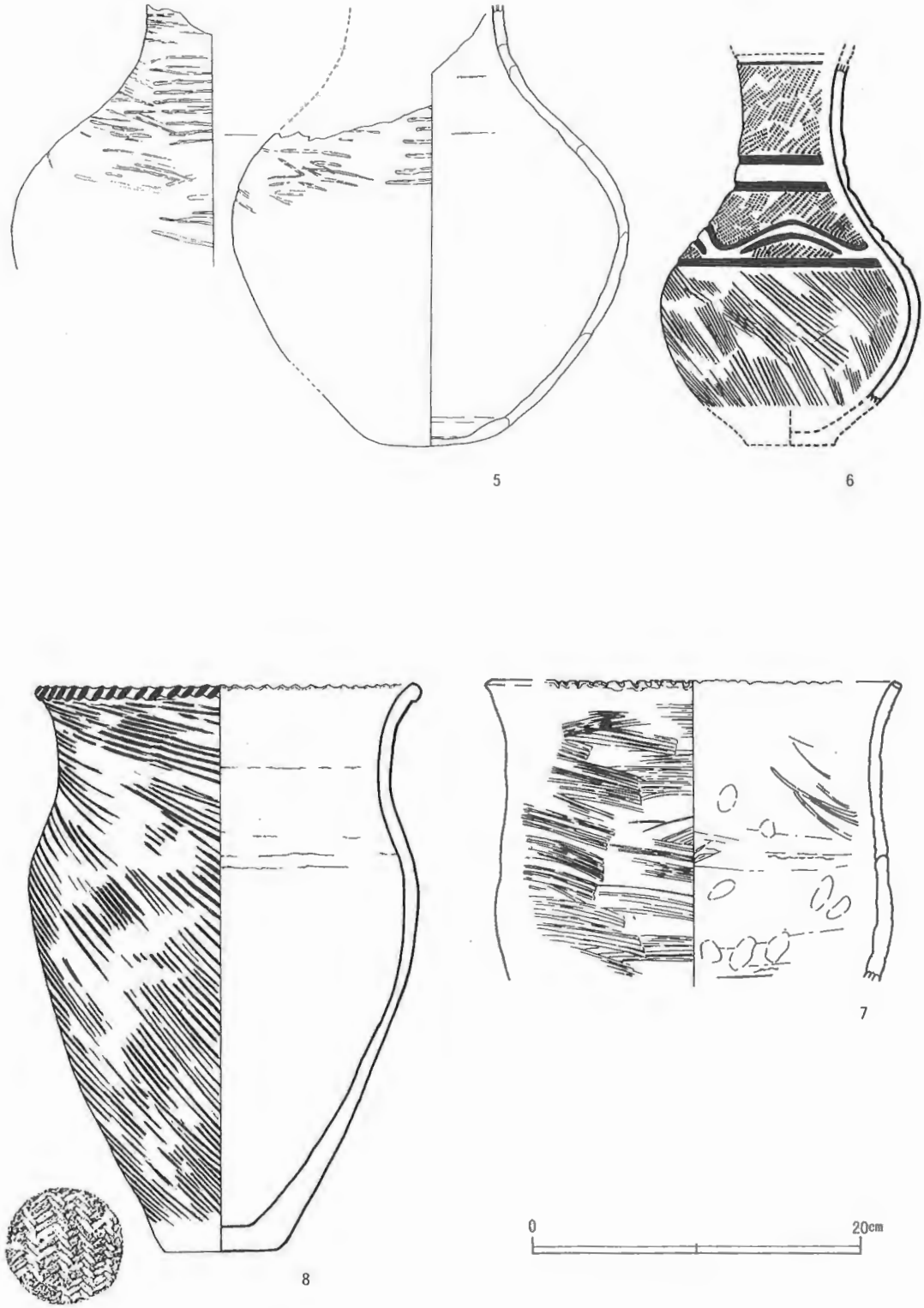
第15図　Ｚ－７グリット調査区域外出土土器

富士宮市史掲載資料は器形に多くのバラエティーが認められ、また壺形土器は全て頸部（胴部）以上の意図的な破壊が看取されるもので、何らかの機能の転用がおこなわれた様相を示している。

（山上）



第16図　富士宮市史掲載資料①



第17図　富士宮市史掲載資料②

Ⅳ 遺　　物

1 土　器

① 分類の方法

渋沢遺跡出土の土器は、総数1630点を数え、遠賀川式系土器、条痕文土器、縄文土器が認められる。ほとんどが破片資料のため第13～15図の資料以外は、口縁の形態と頸部～胴部の文様の関係、全体の器形など把握できない。

第Ⅰ群　遠賀川系土器（第21図－１・第26図－１、図版８・15）

同一個体と思われる壺の頸部破片が２点出土している。縦位のハケメを施した後横位のヘラ描き沈線文を施文するもので、胎土にかんらん石の混入が目立ち特異な様子を示している。

第Ⅱ群　条痕文土器１

本遺跡の出土資料の中では最も数量が多く全体の約98％を占める。それぞれの資料を各部位によって、口縁部形態、頸部文様、胴部文様でそれぞれ分類を行う。壺の口縁部は、押圧文を施した凸帯をもつ壺口縁Ⅰ、凸帯をもたない壺口縁Ⅱに分けられる。

壺口縁Ⅰａ　口唇部外面に凸帯を付し、棒状工具による押圧文を施す。口唇は丸みを帯びる。これは、更に凸帯の形態で口縁Ⅰａ－１と口縁Ⅰａ－２に細分される。

壺口縁Ⅰａ－１　凸帯の断面が三角形を呈する。

壺口縁Ⅰａ－２　凸帯の断面が丸みを帯びる。

壺口縁Ⅰｂ　口唇部外面下位に凸帯を付し、凸帯上に押圧文を施す。これは、更に凸帯などの形態で、口縁Ⅰｂ－１　口縁Ⅰｂ－２　に細分される。

壺口縁Ⅰｂ－１　凸帯上に棒状（板状）工具による押圧文を施す。凸帯の断面の形によって更に細分が可能であるが明確な差がでない。

壺口縁Ⅰｂ－２　凸帯上に指頭による押圧文を施す。口唇部は指頭によるヨコナデをし尖る。

壺口縁Ⅰｃ　口唇部外面下位に凸帯を付し、凸帯上と口唇部に押圧文を施す。これは、押圧文の施し方によって口縁Ⅰｃ－１と口縁Ⅰｃ－２に細分される。

壺口縁Ⅰｃ－１　凸帯上と口唇部に棒状（板状）工具による押圧を施す。また、これは口唇部を面取りし平坦面を作るものと丸く仕上げるものに細分される。

壺口縁Ⅰｃ－２　形態としてはⅠａ－２に類似し、口唇部外面に凸帯を付し、凸帯上に棒状（板状）工具による押圧文を施し、面取りした口唇上に押圧文を施す。

壺口縁Ⅱａ　単純口縁で口唇部を面取りする。

壺口縁Ⅱｂ　単純口縁で口唇部を肥厚させ、巾広の平坦面を作り押引の烈点文を施す。

壺口縁Ⅱｃ　単純口縁で口唇部を肥厚させ、巾広の平坦面を作り横位の条痕を施す。

壺口縁Ⅱｃ－１　面取りした口唇部に横位の条痕を施す。

壺口縁Ⅱｃ－２　面取りした口唇部に横位の条痕を施し、部分的に口唇部を指頭でつまみ上げる。

壺口縁Ⅱｃ－３　面取りした口唇部に横位の条痕を施し、口唇部外面に棒状（板状）工具

による押圧文を施す。

壺口縁Ⅱｄ　口唇部に横位の条痕が施されない単純口縁で口唇部外面に棒状（板状）工具による押圧文を施す。押圧文の施す方法によってさらに口縁Ⅱｄ－１、口縁Ⅱｄ－２に細分される。

壺口縁Ⅱｄ－１　面取りした口唇部に押圧文を施す。

壺口縁Ⅱｄ－２　口唇部外面に押圧文を施す。

甕は、頸部の外反するものをそれとして扱う。口縁部の形態は口唇部に押圧文を施す甕口縁Ⅰと施さない甕口縁Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに大きく分けられる。

甕口縁Ⅰ　口縁部外面に押圧文を施すもの。押圧文の施文具によって甕口縁Ⅰ－１、甕口縁Ⅰ－２、甕口縁Ⅰ－３に細分される。

甕口縁Ⅰ－１　口唇部に指頭による押圧文を施す。

甕口縁Ⅰ－２　口唇部、口唇部外面に棒状（板状）工具による押圧文を施す。面取りした口唇部に押圧文を施すものを甕口縁Ⅰ－２ａ、口唇部外面に押圧文を施すもの甕口縁Ⅰ－２ｂとする。

甕口縁Ⅰ－３　口唇部、口唇部外面に貝殻腹縁による押圧文を施す（押引文）。甕口縁Ⅰ－２と同様に、甕口縁Ⅰ－３ａ、甕口縁Ⅰ－３ｂに細分される。

甕口縁Ⅱ　口唇部を平縁に仕上げ、平坦面を作る。

甕口縁Ⅲ　ヘラ状工具による口唇部の削ぎ取りや指頭による口唇部のヨコナデで尖った口縁を作る。削ぎ取り、ヨコナデは全周せず意識的に肥厚する箇所を等間隔に残す。

甕口縁Ⅳ　口縁部に小突起を施し、小さな波状口縁を呈する甕形土器頸部が緩やかに外反するもので、口唇部に平坦面を作る。

第Ⅲ群　条痕文土器２（第27図－60・62・第30図173 、図版17・21）

第Ⅱ群に含まれない条痕文土器をここで一括する。

Ⅰ、口縁部に小突起を施し、小さな波状口縁を呈する鉢形土器。内傾すると思われる口縁で外面にタテ方向の条痕を施す。

Ⅱ　面取りした口唇部に棒状（板状）工具による押圧文を施し、口唇部内面に深い沈線を１条施すもの。

第Ⅳ群　氷Ⅰ式系土器（第27図－59、図版17）

平縁の口縁で口縁部外面に３条の沈線を施す鉢形土器の破片が１点出土している。

第Ⅴ群　縄文系土器（縄文を施す土器等）

第17図の資料以外は器形の把握ができる資料の出土はみていない。破片資料のため全体の文様構成が把握できる資料は少ない。縄文の見られるものⅠ、見られないものⅡに細分される。

Ⅰ　条痕で整形した土器に縄文を施す。文様帯は、磨消縄文を沈線区画する。

Ⅱ　幾何学的な沈線文で、三角文、菱形文等になるものと思われるもの。

② 文様について

文様は、第14～17図の１部資料を除き全体の器形との相互関係をつかめるものはほとんどないものの、壺、甕の両者に認められる。また、調整方法としての条痕か、文様としての条痕かを識別するのが困難な場合も多く存在する。文様として認められるものは以下の種類である。

１．条痕文土器

文様Ⅰ1 波状文

文様Ⅰ2 孤　文

文様Ⅱ　横線文

横位の条痕により構成される。

文様Ⅲ　縦線文

横線文などによって区画された箇所に縦位の条痕を充塡させる場合の縦位の条痕

文様Ⅳ　Ｔ字文

文様Ⅲの場合で縦位の条痕を充塡させず部分的に施す場合

文様Ⅴ　斜線文

文様Ⅲと同様に斜位の条痕を文様として施すもの

文様Ⅵ　烈点文

文様Ⅶ　縦位羽状文

縦位羽状の条痕文

文様Ⅷ　横位羽状文

横位羽状の条痕文

文様Ⅸ　疑似縄文

２．縄文土器

文様Ⅹ　縄文

文様Ⅺ　沈線文

文様Ⅺ1　平行直線文

文様Ⅺ2　三角文

文様Ⅺ3　菱形文

文様Ⅹと文様Ⅺは変型エ字文を構成する要素として捉えられるものであるが、小破片のため全体の構成を把握できるものは少ない。そのため、文様の構成要素としての最小単位の文様を上記の表現で表わしておく。

３．その他

文様Ⅻ　棒状浮文

本遺跡においては上記の文様が認められるが単独で用いられる場合がみられる文様Ⅶ、Ⅷ以外は２種類以上の組合せで構成される。

③．器種分類（第18図）

器種としては、壺、甕、鉢が認められるが、全体の器形が知りうる資料は甕に２点あるのみである。

壺

口縁部と胴部が揃っている資料はなく全体の器形をうかがい知ることができる資料は存在しない。大きく広口壺と長頸壺の２つの器種に分類できそうであるが明確さを欠くため、胴部の形態と文様の相違により分類を行う。壺は条痕文土器と縄文土器（縄文を施すもの）とに分れ、さらに条痕文土器は球胴のものと長胴のものに大別される。

壺A

胴部が球胴のもので、径の広い頸部に文様帯をもつ。成形、形状によって壺A$_1$と壺A$_2$に分けることができる。

壺A$_1$

胴部の最大径がやや胴部上位にあるもので、外面の整形が、縦位羽状の条痕と斜位の条痕によって行われている。

壺A$_2$

球形の胴部で最大径を胴部の中位にもつもので、外面を横位の条痕と斜位の条痕によって整形している。文様は頸部に認められる。

壺B

壺Aの退化したような形態を示すもので、底部は丸底に近く、胴部の最大径を胴位の中位にもつものである。表面の磨耗が著しく胴部上位から頸部にかけて粗い横位の条痕がみられる。

壺C

長胴の胴部で、胴部最大径を胴部の上位にもつものを壺Cとする。小ぶりのものをC$_1$、大ぶりのものをC$_2$とする。

壺C$_1$

文様が胴中位～上位まで認められ、また胴部下位を粗い横位の条痕で整形している。

壺C$_2$

胴部の張りが弱くなり長胴形が目立つ器形を呈している。文様は胴中位～上位に見られる。また、胴部下位は横位と斜位の組み合わせによる条痕により縦位羽状風に整形を行う。

壺D

縄文が施文されるものを壺Dとする。小型の長頸壺で球形の胴部を呈する。文様は胴部上位～頸部に見られる。また胴部中位～下位は、斜位の条痕により整形している。

鉢

全体の器形を知りうる資料の検出はみていない。口縁部破片の資料から鉢A、鉢B、鉢Cが確認されている。

鉢A

口縁部が直立する器形を呈すると思われる鉢形土器で、口縁部外面に横位の沈線が3条見られる。

鉢B

口縁部が内傾すると思われる鉢形土器で、口唇部に小突起を設け小さな波状口縁を呈するものである。外面に縦位または斜位方向の条痕を施す。

鉢C

口縁部が直立する器形を呈すると思われる鉢形土器で、面取りした口唇部に棒状（板状）工具による押圧文を施し、口唇部内面に深い沈線を1条施すもの。外面は横位の条痕により整形される。

甕

甕は口縁の形態により、波状口縁を呈する甕A、指頭による押し引きで口唇部を整形する甕B、甕C、口唇部に押圧文を施す甕Dに大別される。以上の4種のうちでは、甕Dが主体を占めて出土している。また、平縁で押圧文を施されないものも見られるが全て破片資料のため、器形が把握できるものは検出されていない。

甕A

小さな波状を呈する口縁部破片が確認されている。全体の器形は不明であるが頸部が緩やかに外反するものである。

甕B

胴部に最大径を有し、緩やかに外反する口縁を持つ。頸部から口縁部にかけて特徴的な縦位羽状文が施される。文様帯以外は、横位の条痕で整形される。

甕C

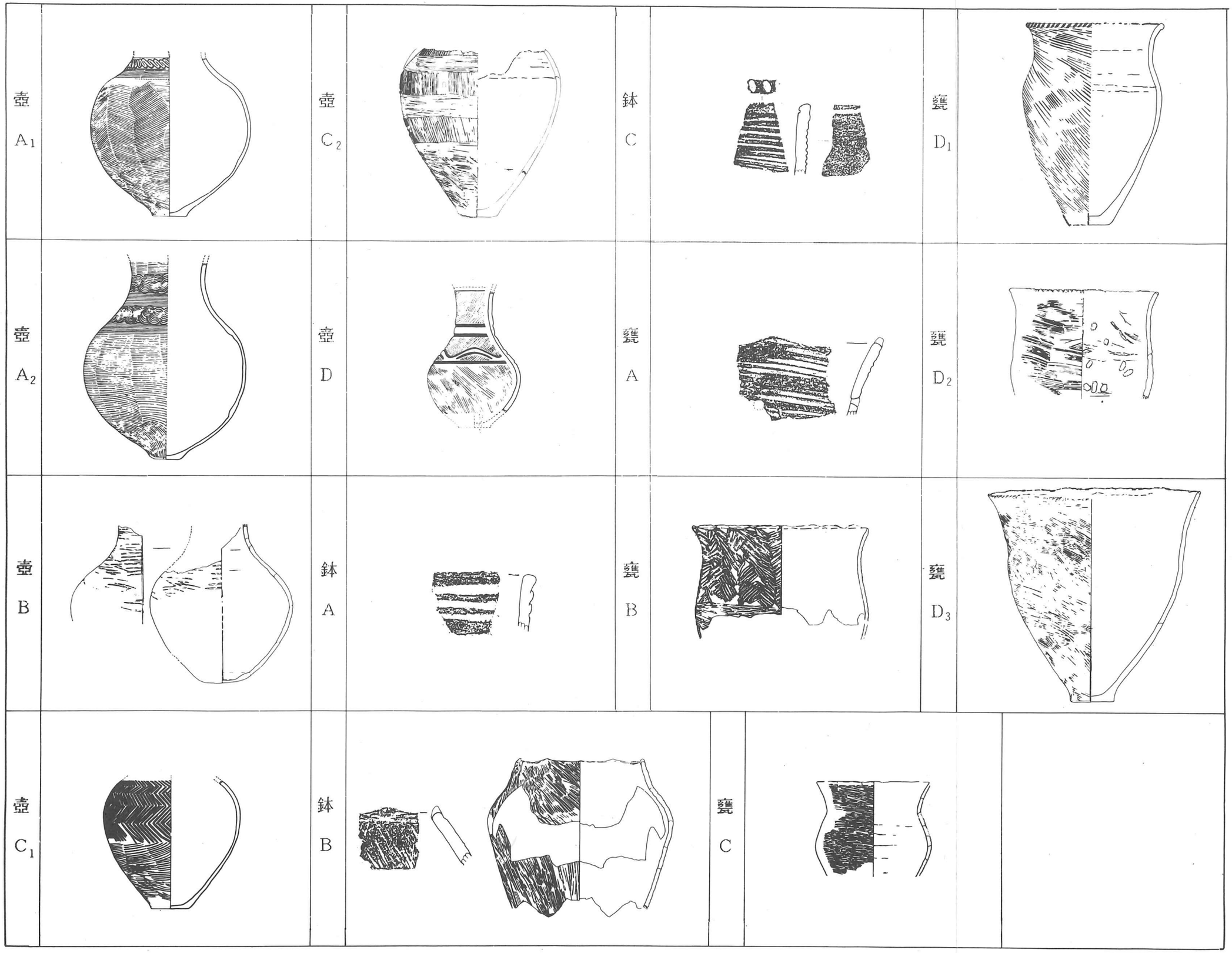
最大径を胴部に持ち、大きく「く」の字状に外反する口縁をつける。やや小ぶりの器形を呈し、外面を横位の条痕で整形する。

甕D

口唇部に押圧文を施すものを甕Dする。出土点数が多く、形態としては多様な姿相を示すが、全体の器形がほぼ把握できるものは以下の3種である。

甕D1

長胴の甕で、最大径を胴部の上位にもち明確な肩部を形成している。さらに肩部から緩やかに外反しながら口縁部に展開する頸部を作り、最大径よりやや小さい口径を計る口縁部を作る。口唇部は外側にやや肥厚させ押圧文を施す。



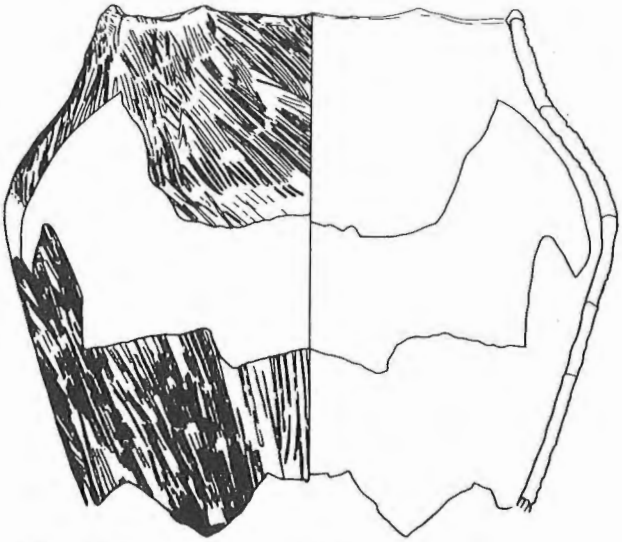
第18図　器種分類図

甕D2

最大径を口縁に持ち、口縁部が弱く外反する。肩部の張りが弱く、ずんどう形の形態を示す。口唇部は面取りし押圧文を施す。

甕D3

最大径を口縁に持ち、口縁部が外反する。底部から口縁部にかけての開きが大きく、ラッパ状を呈する。口唇部に押圧文を施す。



第19図　富士川町山王遺跡出土土器　0　10cm

④　各器種について

渋沢遺跡の土器は、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭（丸子式）に比定されるものであるが、前記のように器種に多くのバラエティーが認められる。ここでは、代表的な器種を採り上げその分布と性格について若干まとめてみたい。

鉢A

口縁部外面に数条の横位の沈線を巡らす鉢形土器は、中部高地の氷Ⅰ式（大洞A式）の中に普遍的に存在するものである。山王遺跡ではD地点第2類に分類され、平縁で口縁部外面に沈線を施すもの、口縁部内外面に沈線を施すもの、波状口縁を呈し外面に沈線の施されるものが認められている。他に県内では本川根町奥原、清水市天王山、沼津市葱川、伊豆長岡町珍野などの諸遺跡から出土している。

鉢B

山王遺跡に鉢Bの全体の器形を知り得る資料の出土を見ている（第19図、図版22)。それは明確な肩部を作りわずかに外反しながら内傾する口縁部を作るもので、口唇部に小突起を設け小さな波状口縁を作る。外面は縦位、斜位の条痕で整形され、内面はナデ整形されるものである。他に県内で出土している遺跡は、見られず非常に類例が少ない。ただ、遠く関東地方の八王子市神谷原遺跡（石川1982)、多摩ニュータウンNo724 遺跡で、類似した破片の検出が見られる。

鉢C

口唇部内面に沈線が施される鉢形土器は、山王遺跡にその類似品を見ないが、三ケ日町殿畑遺跡に類似するものがあり、殿畑遺跡の第Ⅵ群土器(樫王式)の中で捉えられている(佐藤1984)。本遺跡の資料とは口辺部の押圧文の有無による若干の相違がみられる。

鉢Aは中部高地の氷Ⅰ式のもので、鉢B、鉢Cは条痕文土器－樫王式期のものであろう。特に鉢Bの中心的な分布は東海地方東部に求められる。

壺Aと壺C

条痕文土器の壺形土器として２つのタイプが認められる。壺Ａは、頸部に波状文、孤文、横線文、列点文等が施され、文様帯も頸部に限られる。壺Ｃは、横線文、縦線文、横位羽状文等が見られ、文様帯も胴部から頸部まで占有している。壺Ａが曲線系の文様（波状文、孤文）が施されるのに対して壺Ｃは直線系の文様（横線文、縦線文、横位羽状文）が施されるという大きな相違点が見られる。器形も大きく違いを見せ、壺Ａが広口壺になるのに対して壺Ｃが細口壺になる可能性が強い。

壺Ａは、波状文、孤文、縦位羽状文など水神平式の影響が強く見られ、その系譜を東海地方西部に求められる。浜松市半田山Ⅰ遺跡第１号土器棺に使用された壺形土器は壺Ａの類例として捉えられる。

壺Ｃは、東海地方西部にその系譜を求め難いもので管見の資料には見られない。中部高地では駒ケ根市大城林遺跡、岡谷市庄の畑遺跡などにその類例がみられる。さらに北関東地方においては群馬県吾妻町岩櫃山遺跡、茨城県下館市女方遺跡などに類例がある。

甕口縁Ⅲ

口縁部を尖らせ、一定の間隔で肥厚させる甕口縁Ⅲは、河津町姫宮遺跡、神奈川県山北町堂山遺跡、長野県諏訪市十二ノ后遺跡、同塩尻市銭宮遺跡、山梨県河口町宝司塚遺跡などに類例がみられる。特に、諏訪市十二ノ后遺跡の例は甕Ｂの形態を示し甕口縁Ⅲと縦位羽状文の組み合わせをもつものである。甕口縁Ⅲは、中部高地の氷Ⅰ式の中でその祖形が見られ、氷Ⅰ式の鉢形土器の口縁部として普遍的に採用されている。

甕Ｂ、甕Ｃ

甕口縁Ⅲを採用する甕は、器形として甕Ｂ、甕Ｃが認められる。甕Ｃは、河津町姫宮遺跡の資料のように外反する割合が弱いものが存在するが、甕Ｃの時期差として捉えられよう。各遺跡でみられる甕Ｃは外面が全て横位の条痕で整形されている点が共通している。甕Ｂは、諏訪市十二ノ后遺跡の例しか管見の資料では見られないが、文様構成は、水神平式の影響下に成立した丸子式の中に普遍的に存在するものである。

甕Ｃ

甕口縁Ⅲを有する甕Ｃは、頸部が「く」字状を呈し、口縁部の外反が強くなるものである。外面は深い横位の条痕が施されている。神奈川県山北町堂山遺跡の資料が類似する可能性があるが、全体の器形を知り得る資料は知られていない。これは、河津町姫宮遺跡の甕口縁Ⅲを有する資料のように口縁部の外反が弱く、胴部の膨りが弱いものとは時間差の中で捉えられ、姫宮遺跡→渋沢遺跡という変遷が考えられる。同一系統の類似資料の出土は、渋沢遺跡、姫宮遺跡、堂山遺跡といった静岡県東部地方、神奈川県西部地方に限られるようで、その分布範囲は比較的限られているように思われる。

甕Ｄ

甕Ｄは甕Ｄ$_1$～Ｄ$_3$の３種に細分される。

甕D[1] のように長胴で肩部を明確に形成する例は、県内にその類例を見ない。網代痕が底部に施され明確な頸部を作る甕形土器は、その系譜が、水神平式土器の中に見られるが、器形的には、その類例が北関東地方の岩櫃山式土器の中に散見される。

甕D[1] は、水神平式土器から漸移的な型式変遷の中では捉え難く、器形が大洞A式土器、整形、文様等が水神平式土器としてその祖形が考えられるかもしれない。

甕D[2] 、甕D[3] は、本遺跡の主要器種として捉えられるもので、甕の破片のほとんどが甕D[2] 、甕D[3] のものである。甕D[2] と甕D[3] は、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前葉へ至る時間の中で甕D[2] から甕D[3] へ相対的な器形的変遷を示すもので、直立する器形からラッパ状に開く器形へと変化する。口縁の形態は甕Bが甕口縁Ⅰ－2、甕Cが甕口縁Ⅰ－3を示す。甕Cは、さらに弥生時代中期中葉の一般的な甕形土器の器形として盛行する。

⑤ 波状文の分類（第20図）

壺形土器の頸部を飾る文様の1つである波状文は、水神平式土器にその祖形が認められ、弥生時代の初源期を考える上で重要な文様の1つと考えられている。本遺跡においても壺Aの主要な文様として波状文が取り入れられている。波状文は若干のバラエティーが認められ5種類ほどに分類することができる。

A種　条痕を施した工具と同一のものか指頭あるいは棒状工具を使用して施文したと思われる波状文。この種類を基準とする。

B種　波の起状の小さい波状文で、櫛状工具により施文されたもの。

C種　波の起伏の大きな波状文で半截竹管状の工具で施文されたもの。

D種（孤文）　文様I2に属するもので、波線を施す中で明らかに工具の折り返しがみられるもの。施文工具は条痕を施したものと同一のものと考えられる。

E種　波状文自体はA種に属するが、波状文の中に横位の条痕が施される特異な様相を表わしている。施文工具は条痕を施したものと同一のものと考えられる。

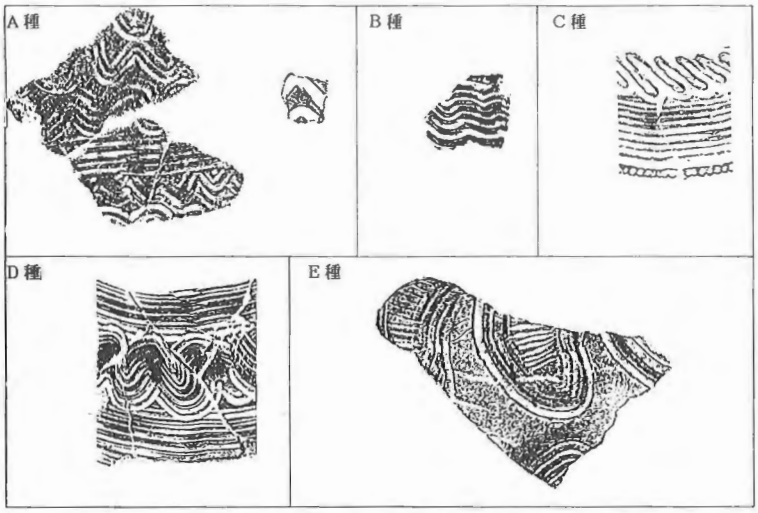
以上が本遺跡に見られる波状文の大きな分類である。

A種は水神平式土器の中に普遍的に見られるもので、三ケ日町殿畑遺跡、東京都新島本村田原遺跡などの諸遺跡で出土している。A種は文様構成や波状の状態にさらにバラエティーが認められ細分が可能である。

B種は丸子式土器の標式遺跡である静岡市丸子セイゾウ山遺跡、同佐渡遺跡や浜松市半田山遺跡などに認められ丸子式土器の中に散見される。

C種はB種同様丸子式土器の中に散見され、半田山遺跡、丸子セイゾウ山遺跡、清水市天神山下Ⅱ遺跡、田原遺跡などに認められる。また、北関東地方の茨城県下館市女方遺跡に見られる丸子式土器の壺形土器もC種の波状文を施している。

D種の出土例は非常に少なく、田原遺跡に類似資料が見られるのみである。D種の分布区域



第20図　波状文の分類図

が限られた範囲で本遺跡における特徴的な文様の１つと言える。

Ｅ種は大型壺の頸部破片である。本遺跡において１点のみ検出している。Ａ種との相関関係は考えられるが、その類例は知らない。

以上のように波状文の分類が考えられる。Ａ～Ｄ種のうちＡ．Ｄ種が古相を程し、Ｂ．Ｃ種が新相を表わしている。Ａ．Ｄ種が水神平式土器に併行し、Ｂ．Ｃ種が丸子式土器のメルクマーク的な文様と言える。また、本遺跡において岩滑式土器の特徴とされる跳上げ文の検出はみていない。

⑥　渋沢遺跡の編年的位置づけ

静岡県東部地方の縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の編年は東海地方西部の樫王式土器に併行する駿河山王式土器から丸子式土器までをそれに当てられている。駿河山王式土器と丸子式土器の間を埋める型式として笹原式土器、天王山最上層式土器などが考えられているが標式となる資料が包含層出土資料などといった一括性に欠けるものでその内容は貧弱でまだ混沌とした状況である。また、丸子式土器でさえ、その分布範囲や器種構成などの面で検討しなければならないことが多く残されているのが現状と言える。

本遺跡の資料は、包含層出土資料が主体であったが、それぞれの資料が各時期に分層できるような出土状況を示してはおらず、第Ⅲ層～第Ⅳ層にかけて遺物の出土が認められたものの明確な細分は不可能であった。しかし、鉢Ａや鉢Ｂのように明らかに駿河山王式土器に併行する部分が見られるように、駿河山王式期～丸子式期の時間巾の中で捉えることができる。駿河山王式土器に併行する部分を第Ⅰ期、丸子式土器に併行する部分を第Ⅲ期、駿河山王式期と丸子式期の間を第Ⅱ期としてそれぞれの本遺跡における様相を以下に若干考えてみたい。

第Ⅰ期

駿河山王式土器と併行する第Ⅰ期の資料としては、鉢A、鉢Bが上げられる。鉢Aは中部高地の氷Ⅰ式土器のものである。鉢Bは類例が少なく明確な判断はできないが、東海地方西部の馬見塚式土器に器形的な祖形が求められるもので、駿河山王式期に在地化して成立した器種かと思われる。ただ静岡県東部地方においてもその出土例はほとんど見られず分布範囲など不明な点が多い。

鉢Cは、駿河山王式土器の中には見られない。口唇部内面に沈線の施される例は、三ケ日町殿畑遺跡の樫王式段階の鉢形土器の中にみられ、駿河山王式期と併行関係にある段階として捉えられ、第Ⅰ期の中に含まれるものと考えられる。第Ⅰ期に属する資料は、鉢Aが1点、鉢Bが2点、鉢Cが1点と非常にその量は少ないが、渋沢遺跡の開始を考える上で重要なものと言える。このように本遺跡の開始時期は駿河山王式段階（樫王式併行）の中で捉えられるが、まだ主体的な時期とは考え難い状況を呈している。

第Ⅱ期

丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と共通しない器形の中で古相の様相を呈する壺口縁Ⅰb－2、壺口縁Ⅰc、壺口縁Ⅱb、甕口縁Ⅳを第Ⅱ期の所産と考える。壺口縁Ⅰb－2の凸帯の手法は樫王式にその祖形がみられ、丸子式の段階になると見られなくなるらしい。山梨県大泉村金生遺跡A区17号住居の資料のように明らかに氷Ⅰ式土器と共併しているものもある。また富士川町山王遺跡においてもその類例がみられ、駿河山王式期の中に散見される。さらに水神平式土器にもその技法は継承され、三ケ日町殿畑遺跡などその類例が認められる。壺口縁Ⅰb－2は第Ⅰ期～第Ⅱ期の中で捉えられる。壺口縁Ⅰcは水神平式土器の特徴をそなえているが、口辺部に押引文が施文される例はない。それが地域差か時期差であるかは不明であるが、第Ⅲ期に下る可能性は薄い。壺口縁Ⅱbは水神平式土器の特徴である押引の烈点文が明確に見られる。甕口縁Ⅳは、波状口縁を呈す甕形土器である。山梨県大泉村寺所遺跡2号土壙からは、壺口縁Ⅰcに共伴して甕口縁Ⅳが出土している。甕口縁Ⅳは中部高地の氷Ⅰ式土器の中にその祖形が認められ、中部高地～静岡県東部地方を中心に水神平式期の段階に分布する。また第26図－48の壺形土器の頸部の資料や第29図－138の壺形土器の肩部凸帯の資料は第Ⅱ期の所産であろう。

第Ⅱ期は、資料的にも貧弱で明確にその内容は把握できない。また第Ⅰ期との連続性が強く第Ⅰ期が第Ⅱ期の中に吸収される可能性も考えられる。第Ⅰ期と第Ⅱ期を山王遺跡の新しい部分及び清水市天王山遺跡最上層a類土器の段階といった、ある程度時間巾を持たせた中で捉えておく。

第Ⅲ期

丸子式土器に併行する段階を第Ⅲ期とする。静岡市丸子セイゾウ山遺跡、同佐渡遺跡出土土器を標式とする丸子式土器の内容を検討し、本遺跡との関連を考えてみたい。

凸帯を施す壺口縁Ⅰの内、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡では、壺口縁Ⅰa－1、壺口縁Ⅰa－2、

壺口縁Ⅰｂ－１が確認される　口唇部に凸帯を施す比率は樫王式、水神平式の段階で盛行するものの、以後弥生時代中期に入るとその比率が低くなる傾向にある。丸子式の段階では、壺口縁Ⅰａが主体的に残り、壺Ⅰｂ－１がわずかに見られるという状況が看取され、壺口縁Ⅰｂ－２、壺口縁Ⅰｃは見られなくなる。また、本遺跡において壺口縁Ⅰで口辺部に横位の条痕を施すものは存在しないがセイゾウ山遺跡ではその類例が見られる。

壺口縁Ⅱの内、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡では壺口縁Ⅱａ、壺口縁Ⅱｃ、壺口縁Ⅱｄ－１が認められる。壺口縁Ⅱに関して、ほぼ同一の様相を示しているが、セイゾウ山遺跡ではさらに、壺口縁Ⅱｃ－１の口辺部に棒状工具による押圧文が施される例が散見される。

口唇部に押圧文を施す甕口縁Ⅰはセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と共通して本遺跡でも主体的に見られる。また、甕口縁Ⅱも出土比率は低いが両遺跡とも共通して見られる。甕口縁Ⅲは、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡にその類例は見られない。神奈川県山北町堂山遺跡に甕口縁Ⅲの類例があることはすでに前記したが、丸子式とそれほど時期差の考えられない堂山遺跡で出土していることは、甕口縁Ⅲが、丸子式の時期巾の中で捉えられるものの地域色の強いものであることを表わしていると考えられる。甕口縁Ⅳは、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡では見られない。

文様に関しては、波状文（文様Ⅰ）の分類の項に表わしたようにＢ種、Ｃ種がセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡に見られ、壺形土器の頸部に施文されるＡ種、Ｄ種は見られない。また、文様Ⅱ、文様Ⅲ、文様Ⅳ、文様Ⅴ、文様Ⅶ、文様Ⅷはセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡に見られる。特に文様Ⅱと文様Ⅲ、文様Ⅳ、文様Ⅱと文様Ⅴは丸子式土器の特徴的な文様であると考えられる。文様Ⅵ、文様Ⅸ、はセイゾウ山遺跡、佐渡遺跡には見られない。しかし、文様Ⅵは本遺跡において文様Ⅰ[1]－Ｃ種と文様Ⅱと組み合わされて施文されている例があるため、丸子式土器の中でも使用される文様の一つであると考えられる。

丸子式土器の器種構成を考える場合、セイゾウ山遺跡の縄文が施文される鉢形土器と佐渡遺跡の壺形土器以外全体の器形が知り得る資料の出土が見られず、詳細な内容まで把握できないのが現状である。特に佐渡遺跡の壺形土器は器形的に後出の要素が強く本遺跡ではその類例が見られない。

以上が、丸子式土器の標式遺跡である丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と本遺跡の比較であるがまとめると、共通する器形は、壺口縁Ⅰａ－１、壺口縁Ⅰａ－２、壺口縁Ⅰｂ－１、壺口縁Ⅱａ、甕口縁Ⅱｃ、甕口縁Ⅱｄ－１、甕口縁Ⅰ、甕口縁Ⅱで、本遺跡に見られる器形は、壺口縁Ⅱｄ－２、甕口縁Ⅲ、セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡だけに見られる器形は、壺口縁Ⅰで口辺部に横位の条痕を施すもの、壺口縁Ⅱｃ－１で口辺部に押圧文が施されるものである。本遺跡の資料で丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡と共通する部分は丸子式遺跡の範中で捉えることができると考えられる。また、甕口縁Ⅲに関しても丸子式期の中で捉えられると思われる。

器形分類では壺Ａ[1]に当たる第16図－１、壺Ｃ、甕Ｃ、甕Ｄ[1]、甕Ｄ[3]が第Ⅲ期の中で捉えられる。壺Ａ[2]に当たる第16図－３、甕Ａ、甕Ｄ[2]が第Ⅱ期に相当する。また壺Ａ[2]に当たる

第16図－２、甕Ｂが第Ⅱ～Ⅲ期の中で捉えられる。

壺Ｃは、群馬県吾妻町岩櫃山遺跡の報文中でＡ類とされた壺形土器である(杉原1967)。岩櫃山遺跡の報文中で杉原氏は「Ａ類は丸子式土器あるいは庄ノ畑式土器の文様ときわめて類似していることは事実であるとしても、すでにそれらの土器自体ではなくなっている。まず、Ａ類の諸土器には長胴のものが多い。底部には網代あるいは木葉の圧痕を呈しているものが多い。－中略－　Ａ類土器が丸子式土器や庄ノ畑式土器と類似しているとしても、一方では充分にこの地方の土器として風土化しているわけである。」と述べられＡ類土器の地域性を強調されている。しかし本遺跡においてＡ類土器にあたる壺Ｃおよびその文様になると思われる第29図－137、第30図－168などが出土していることは、壺Ｃが時期的には丸子式土器の段階で捉えられること、また、その時期に北関東地方と本地域とになんらかの相関関係があったことが伺えるもので興味深い。どちらの地域が壺Ｃの母体となるかは中部高地の類例を含めて今後検討しなければならないことであるが、条痕文土器である点を強調すれば、本地域（静岡県東部地方～神奈川県西部地方）が壺Ｃの主体的な地域となる可能性は充分考えられる。　　（山上）

第３表　土壙出土土器観察表

号	器形	部　位	出土区	層位	整形・施文の特徴	焼　成	胎　土	色　調	備　考
1	壺	頸　部	A-1号	覆土	縦位のハケ目調整の後横位のヘラ描沈線を施す。	普	石英、長石、砂礫	黒褐色、器壁橙色	遠賀川系
2	壺	頸　部	A-1号	覆土	縦線文十横線	普	石英少	外　灰黄色 内　浅黄色	
3	壺	頸　部	A-1号	覆土	縦線文	普	石英、長石	外　黒褐色　内　黒色	
4	壺	胴　部	A-1号	覆土	縦位羽状文	やや悪い	石英少、長石、少砂、金雲母微	外　にぶい黄橙色 内黒褐色	
5	壺	肩　部	A-1号	覆土	横線文＋縦線文（三本を１組にした直線文）	やや悪い	石英少、長石、少砂、金雲母少	外　にぶい黄褐色 内　にぶい赤褐色	
6	－	胴　部	A-1号	覆土	外面は横位の条痕	普	石英少、長石、少砂、金雲母微	外　褐色 内　にぶい黄褐色	
7	壺	肩部～胴部	A-1号	覆土	横線文＋横位の条痕	やや悪い	石英、長石、砂金雲母微	外　橙色 内　にぶい赤褐色	
8	壺	肩部～胴部	A-1号	覆土	横線文＋横位の条痕	やや悪い	石英、長石、砂金雲母微	外　橙色 内　にぶい赤褐色	外面スス付着 ７と同一個体
9	甕	胴　部	A-1号	覆土	外面は横位の条痕、1部縦位の条痕がみられる。	普	石英少、長石	外　黒褐色 内　褐色	外面スス付着
10	甕	胴　部	A-1号	覆土	外面は横位の条痕	普	石英、長石 金雲母	外　黒褐色 内　暗灰褐色	外面スス付着 内面タール付着
11	甕？	胴　部	A-1号	覆土	横位羽状文	普	石英、長石、砂 金雲母	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	
12	壺	口縁部	A-2号	覆土	壺口縁Ｉｂ－１ 外面は横位の条痕	やや悪い	粗石英、長石 砂少	外　黄褐色 内　にぶい黄褐色	
13	壺	頸　部	A-2号	覆土	太目の波状文	普	石英、長石、金雲母少	褐色	
14	壺	胴　部	A-2号	覆土	横線文＋縦線文	やや悪い	石英、長石 金雲母少	外　浅黄色 内　暗灰黄色	
15	－	胴　部	A-2号	覆土	外面は横位の条痕	普	石英少、長石少、砂少	外　暗灰黄色 内　褐色	
16	－	胴　部	A-2号	覆土	外面は横位の条痕	普	石英、長石、砂少	明褐色	
17	－	胴部？	A-2号	覆土	外面は横位の太目の条痕	普	石英、長石 金雲母少	外　にぶい褐色 内　オリーブ褐色	外面スス付着
18	壺	頸　部	A-3号	覆土	外面波状文	普	石英、長石、砂少 金雲母少	外　にぶい黄褐色 内　褐色	
19	甕	口縁部	A-3号	覆土	甕口縁Ⅲ 外面は横位の条痕	普	石英、長石、砂 金雲母	外　にぶい黄褐色、赤褐色 内　黄褐色	
20	甕	口縁部	A-3号	覆土	甕口縁Ⅰ－2外面は横位の条痕	普	石英、長石、金雲母	赤褐色	
21	甕	口縁部	A-3号	覆土	甕口縁Ⅰ－２ 外面は横位の条痕	普	石英、長石、金雲母	外　黒褐色 内　にぶい黄褐色	
22	甕	頸　部	A-3号	覆土	外面は横位の条痕	普	石英少、長石、少 金雲母微	外　黒褐色 内　灰黄褐色	外面スス付着
23	甕	頸部～胴部	A-3号	覆土	外面は斜位の条痕	普	石英少、長石、金雲母微	外　にぶい黄褐色 内　暗赤褐色	外面スス付着
24	甕	頸　部	A-5号	覆土	外面は縦位の条痕	やや悪い	石英、長石、砂	外　明黄褐色 内　暗灰黄色	
25	壺	頸　部	C-9号	覆土	縦線文＋横線文	普	石英、長石、金雲母微	外　褐色 内　にぶい黄橙色	外面スス付着
26	－	胴部下位	C-9号	覆土	外面は斜位の粗い条痕	普	石英、砂少	外　にぶい黄橙色 内　暗褐色	
27	壺？	胴　部	C-9号	覆土	外面は横位の条痕	普	石英少、長石、砂礫、金雲母	外　明褐色 内　オリーブ黒色	
28	壺？	胴　部	C-9号	覆土	外面は条間の広い横位の条痕	普	石英、長石	外　黒褐色　内　褐色	
29	甕	胴　部	C-9号 C-11号	覆土	内外面　斜位の条痕	普	石英少、長石 金雲母微	黒褐色	外面スス付着
30	壺	頸部？	C-10号	覆土	外面　横位の条痕（横線文？）内面表面剥離	悪　い	石英、長石	暗赤褐色	
31	－	胴　部	C-10号	覆土	外面　横位の条痕 表面磨耗	やや悪い	石英、長石、砂	外　明赤褐色 内　にぶい黄褐色	

第４表　Ｃ－12号遺物集中区出土土器観察表

号	器形	部　位	出土区	層位	整形・施文の特徴	焼　成	胎　土	色　調	備　考
1	甕	口縁部 ～底部	Ｂ－６ Ｃ-5,6	Ⅲ	甕口縁Ｉ-３、－甕Ｄ３ 外面　横位の条痕の後頸部に縦位の条痕を施す	普	石英、長石、砂	外　赤褐色 外　褐色	1/4存
2	甕	胴　部	Ｃ－６	ⅢⅣ	外面　横位の条痕の後縦位羽状文を粗く施す	普	石英、長石	外　にぶい黄褐色 内　オリーブ黒色	
3	壺	胴　部	Ｂ－５ Ｃ-5,6	Ⅲ	磨消縄文を伴う変型エ（ＬＲ）字文 文様帯以外は横位の条痕	やや悪い	石英多、長石 砂少、金雲母少	外　明褐色 内　褐色	
4	壺	口縁部	Ｃ－６	Ⅳ	壺口縁Ｉａ－２ 外面孤状条痕の後横位の条痕内面孤文	普	石英、長石 金雲母	にぶい赤褐色	
5	壺	口縁部	Ｃ－５	Ⅲ	壺口縁Ⅱｂ　外面横位の条痕の後縦位の条痕	やや良い	石英、長石	外　褐色 内　黒褐色	
6	壺	頸　部	Ｃ－６	Ⅳ	横位の条痕（横線文）＋縦線文	やや良い	石英、長石、金雲母	にぶい赤褐色	
7	壺	胴部？	Ｃ－５	Ⅳ	孤状の条痕の後横位の条痕を施す内面表面剥離	普	石英、長石 金雲母微	外　黒褐色 内　褐色	文様？
8	－	胴　部	Ｃ－６	Ⅳ	縦位羽状文	やや悪い	石英、長石、少砂	外　にぶい黄橙色 内　にぶい橙色	
9	甕	口縁部	Ｃ－６	Ⅲ	甕口縁Ｉ－１内面ヨコナデ外面ヨコナデの後横方向のミガキを施す	普	石英、長石、砂	外　黒色 内　黒褐色	
10	壺	胴　部	Ｂ－５ Ｃ－６	Ⅲ	横線文＋縦線文	普	石英、長石、砂	外　にぶい黄橙色 内　にぶい黄褐色	
11	甕	口縁部 ～胴部	Ｃ－５	Ⅲ	甕口縁Ⅲ－甕Ｃ	やや悪い	石英、長石、砂 金雲母少	外　黄褐色、明褐色、明灰黄色 内　黒褐色、橙色	
12	－	縁部	Ｃ－６	Ⅲ	甕口縁Ⅱ　単口縁で口唇部を面取りする　外面は斜位の条痕を施す	普	石英、長石	外　にぶい赤褐色 内　暗赤褐色	
13	甕	口縁部	Ｃ－６	Ⅲ	甕口縁Ⅱ外面は横位の条痕	普	粗石英、長石	外　黒褐色　内　褐色	
14	甕	頸　部	Ｃ－６	Ⅲ	外面は横位の条痕	普	石英少、長石 金雲母	外　暗褐色 内　にぶい黄褐色	外面スス付着
15	壺？	胴　部	Ｃ－６	Ⅲ	外面は斜位の条痕	普	石英、長石、砂、金雲母少	にぶい黄褐色	
16	－	胴　部	Ｃ－６	Ⅳ	外面は横位の条痕	普	石英少、長石	外　灰褐色　内　褐色	
17	－		Ｃ－６	Ⅲ	外面は斜位の条痕	普	石英、長石少、金雲母微	褐色	
18	－		Ｃ－６	Ⅲ	外面は横位の条痕	普	石英、長石	外　褐色　内　暗褐色	
19	－	胴　部	Ｂ－６	Ⅲ	外面は横位の条痕	普	石英、長石	外にぶい黄褐色　内褐色	
20	－	胴　部	Ｃ－５	Ⅲ	外面は横位の条痕	普	粗石英、長石少 金雲母	外　にぶい褐色 内　にぶい黄褐色	
21	－		Ｃ－６	Ⅲ	外面斜位の条痕 内面横位の条痕	やや悪い	石英少、長石	にぶい橙色	
22	－	胴部下位	Ｃ－６	Ⅲ	外面は斜位の条痕	普	長石、金雲母少	外　灰オリーブ色 内　オリーブ黒色	
23	甕	頸部？	Ｃ－６	Ⅲ	外面横位の条痕　内面１部横位の条痕が残る	普	石英、長石少	黒褐色	
24	－	胴部下位	Ｃ－６	Ⅲ	外面斜位の条痕	普	石英、長石 金雲母微	外　にぶい赤褐色 内　赤黒色	
25	－	胴部下位	Ｃ－６	Ⅲ	外面は横位斜位の条痕	やや悪い	石英、長石、砂、金雲母	外 灰黄褐色　内　橙色	
26	－	胴部下位	Ｃ－６	Ⅲ	外面は横位の条痕	普	石英少、長石、少砂	外　黒褐色 内　暗灰黄色	外面スス付着
27	－	胴部下位	Ｂ－６	Ⅲ	外面は縦位の細かい条痕	やや悪い	石英、長石、砂、金雲母少	外　褐色　内　黒褐色	
28	壺	胴部下位	Ｃ－６	Ⅲ	外面は縦位の粗い条痕 内面に接合痕がみられる	普	石英、長石少、砂	外　黒色 内　にぶい黄褐色	
29	甕	頸部？	Ｃ－６	Ⅱ	外面は巾広の横位の条痕	普	石英、長石 金雲母	外　にぶい黄橙色 内　にぶい黄褐色	
30	甕	頸　部	Ｃ－５ Ｃ－６	Ⅲ	外面は横位の条痕	普	石英、長石、砂少 金雲母	黒褐色	
31	壺？	頸　部	Ｃ－６	Ⅲ	外面　縦位の条痕の後横位の条痕	普	長石、砂	外　暗赤褐色 内　にぶい褐色	文様？
32	－	胴　部	Ｃ－５	Ⅲ	外面は縦位の条痕	普	長石	黒褐色	
33	甕	頸　部	Ｃ－６	Ⅳ	外面　横位の条痕の後縦位の条痕を間隔を開けて施す	普	長石、砂	外　黒褐色 内　にぶい赤褐色	外面スス付着
34		胴　部	Ｃ－５ Ｃ－７	Ⅲ	器厚が厚く、外面に縦位の条痕を施す	普	石英少、長石少 砂少、金雲母微	にぶい褐色	外面スス付着
35		胴　部	Ｂ－５	Ⅲ	器厚が厚く、外面に縦位の条痕を施す	普	石英少、長石、砂少 金雲母少	暗赤褐色	
36			Ｃ－５	Ⅲ	外面は斜位の条痕	普	石英、長石	外　褐色 内　黒褐色	
37		胴　部	Ｃ－５	Ⅲ	磨消縄文（ＬＲ）＋？	普	石英多、長石、砂少	外　黒色　内　褐色	
38		胴　部	Ｃ－５	Ⅳ	２条の横線＋磨消縄文（ＬＲ？）	やや悪い	石英少、長石、砂 金雲母	外　暗オリーブ褐色 内　黒褐色	
39		胴　部	Ｃ－６	Ⅲ	三角連繋文？	普	石英、長石、金雲母少	暗赤褐色	

第５表　Ａ地区出土土器観察表

号	器形	部　位	出土区	層位	整形・施文の特徴	焼　成	胎　土	色　調	備　考
1	壺	頸　部	Ａ－１ Ａ－２	Ⅲ	縦位のハケ目調整の後横位のヘラ描沈線を施す	普	石英・長石・砂	黒褐色 器壁橙色	遠賀川系
2	壺	口縁部	Ａ－７	Ⅲ	壺口縁Ｉａ－１、凸帯以外は縦位の条痕が施される。	やや良い	石英・長石・金雲母少	外　にぶい褐色 内　黒褐色	
3	壺	口縁部		Ⅲ	壺口縁Ｉａ－２　内面に横位の条痕が施される 外面は縦位羽状の条痕？	普	石英・長石・金雲母少	外　にぶい褐色 内　にぶい黄橙色	
4	壺	口縁部	Ａ－６	Ⅲ	壺口縁Ｉｃ－２、棒状工具による条痕を外面に施す。	普	砂・長石	にぶい黄橙色	
5	壺	口縁部	Ｚ－１ Ｚ－２		壺口縁Ⅱａ 外面に縦位の条痕	普	石英・長石少・砂	にぶい黄褐色	

6	壺	口縁部	A－6	Ⅲ	壺口縁Ⅱa 外面に横位の条痕	普	石英・長石	にぶい褐色	
7	壺	口縁部	A－6	Ⅲ	壺口縁Ⅱc－1	普	石英少・長石少	にぶい赤褐色	
8	壺	口縁部	A－5	ⅢⅣ	壺口縁Ⅱc－2 外面　縦位 内面　横位の条痕	普	石英・長石・砂少	外　にぶい赤褐色 内　黒褐色	
9	壺	口縁部	A－6	Ⅲ	壺口縁Ⅱd－1 外面に斜位の条痕	やや悪い	石英少・長石少 金雲母少・砂	外　橙色 内　にぶい橙色	
10	壺	口縁部	A－6	Ⅲ	壺口縁Ⅱc－1又Ⅱd－1　外面斜位の条痕の後縦位の条痕口唇部内面肥厚	普	砂	外　褐色 内　暗褐色	
11	壺 小型壺	口縁部	A－3	Ⅲ	壺口縁Ⅱd－2　口唇部は尖る外面斜位の条痕の後横位の条痕	普	石英少・長石少 金雲母微	外　黒色 内　黒褐色	
12	壺	頸　部	A－5	Ⅳ	外面横線文＋波状文（孤文）面横位の条痕	普	石英・長石・砂少	外　明褐色 内　褐色	
13	壺	頸　部	A－6	Ⅲ	外面弧文＋横線文内面横位の条痕が下位に施される	普	石英・長石・砂少	明褐色	
14	壺	頸　部		Ⅲ	外面波状文(孤文)＋横線文内面横位の条痕	普	石英・長石・砂少	外　明褐色 内　明赤褐色	12～14 同一個体
15	壺	頸部～肩部	A－3	Ⅲ	孤文＋横線文	普	石英少・長石少 砂少	外　明褐色 内　にぶい黄褐色	
16	壺	頸部～肩部	A－3	Ⅲ	横位の条痕の後　波状文（孤文）を施す	普	石英・長石 金雲母少	外　暗褐色 内　にぶい赤褐色	
17	壺	頸　部	A－3	Ⅲ	孤文	普	石英・長石 金雲母・細砂	外　にぶい赤褐色 内　褐色	
18	壺	頸部～肩部	A－3	Ⅲ	孤文＋横線文	普	石英・長石・金雲母少・黒雲母微	外　にぶい橙色 内　褐色	
19	壺	頸　部	B－7		波状文(孤文)＋横線文	やや悪い	石英少・長石少 砂	外　黒色 内　灰黄褐色	
20	壺	頸　部	A－6	Ⅲ	波状文＋横線	普	石英・長石	にぶい黄橙色	
21	壺	頸　部	A－5	Ⅲ	波状文＋巾広の横位の条痕（横線文）	普	石英・長石少・砂	暗灰黄褐色	
22	壺	頸　部		Ⅲ	波状文＋巾広の横位条痕（横線文）	普	石英・長石少・砂	外　暗灰黄色 内　にぶい黄色	
23	壺	頸　部	A－5	Ⅲ	巾広の波状文	普	石英・長石	外　にぶい橙色 内　褐色	
24	壺	頸　部	A－2 A－3	Ⅲ	細かい波状文＋横線	普	石英少・長石少 砂	にぶい黄橙色	
25			A－1 A－2	Ⅲ	縦位の波状文＋縦線文？	普	石英・長石 金雲母多	外　暗赤褐色 内　黒褐色	
26	壺	胴　部	A－2	Ⅲ	横線文＋縦線文又Ｔ字文	やや悪い	石英・長石少 砂少	外　にぶい褐色 内　褐色	
27	壺	頸　部	A－2	Ⅲ	Ｔ字文	普	石英少・砂少	黒褐色	
28	壺	頸　部	A－6	Ⅲ	横線文・縦線文	普	石英・長石 砂・金雲母微	浅黄色	
29	壺	頸　部	A－6	Ⅲ	縦線文＋横線文	普	石英・長石	浅黄色	
30	壺	頸　部	A－2	Ⅲ	横線文+縦線文(縦位の条痕)	普	石英・長石・砂少	暗赤褐色	
31	壺	頸部~肩部	A－3	ⅢⅣ	横線文＋縦線文	普	石英・長石・砂	にぶい褐色	
32	壺	頸　部		Ⅲ	横線＋縦線文	普	石英・長石	外　にぶい黄橙色 内　暗灰黄色	
33	壺	頸　部	A－6	Ⅲ	横線文＋縦線文？	普	石英・長石・砂少	外　にぶい赤褐色 内　暗褐色	
34	壺	胴　部	A－7	Ⅲ	横線文＋縦線文	普	石英少・長石少 砂	外　黒褐色 内　灰褐色	
35	壺	頸　部	A－3	Ⅲ	縦位の条痕（縦線文？）の後横線文を施す内面横位の条痕が一部みられる	普	石英・長石・砂少	外　黒褐色 内　黒色	
36	甕	頸部～胴部	A－7	Ⅳ	縦線文＋横位の条痕	普	石英・長石多 砂少	外　黒褐色 内　黒色	
37	壺	胴　部	A－4	Ⅲ	横線文＋斜線文	普	石英・長石 金雲母微	外　褐色 内　にぶい黄褐色	
38	甕	頸部～胴部	A－4	Ⅲ	横線文＋斜位の条痕（斜線文）	普	石英・長石 細砂・金雲母少	暗褐色	
39		胴　部	B－7	Ⅲ	横線文＋斜線文	普	石英少・長石少 砂・金雲母微	外　灰黄褐色 内　にぶい黄橙色	
40	甕	頸部～胴部	A－4	Ⅲ	横線文＋斜位の条痕	普	石英・長石 砂少・金雲母少	外　褐色 内　暗褐色	
41	壺？	胴　部	B－5	Ⅲ	横線文＋縦位羽状の列点文（条痕文）	やや良い	石英・長石 金雲母少	外　黒褐色 内　にぶい赤褐色	
42	甕	胴　部		Ⅲ	縦位羽状文+横位の条痕	普	石英・長石 砂・金雲母	外　黒色 内　褐色	外面スス付着
43		胴　部	A－5	Ⅲ	縦位羽状文	普	石英・長石 金雲母	外　黒褐 内　にぶい黄褐色	
44		胴　部	A－4	Ⅲ	縦位羽状文？	普	石英少・長石少 砂少	にぶい黄褐色	外面赤彩
45		胴　部		Ⅲ	縦位羽状文	普	石英・長石 砂少	外　赤褐色 内　暗褐色	
46	壺	胴　部	A－4	Ⅲ	縦位羽状文	普	石英少・長石 金雲母	外　にぶい黄色 内　黒色	
47		胴　部	A－6	Ⅲ	縦位羽状文＋横線文？	やや悪い	石英・長石 粗砂	外　にぶい褐色 内　橙色	
48	壺	頸　部		Ⅲ	縦位羽状文　内面一部横位の条痕がみられる	普	石英・長石	外　黄褐色 内　にぶい黄褐色	
49	壺	頸　部	A－4	Ⅲ	縦位羽状文	普	石英・長石	外　褐色 内　にぶい黄褐色	48と同一個体
50	壺	胴　部	A－6	Ⅲ	横位羽状文を１条の横線で区画する	普	石英・長石 砂・金雲母少	外　明黄褐色 内　褐色	文様帯赤彩
51		胴　部	A－6	Ⅲ	横位羽状文	普	石英・長石 砂・金雲母	外　灰黄褐色 内　黒褐色	外面スス付着
52	壺？	底　部		Ⅰ	外面条痕の後に横方向のヘラミガキ内面横位の条痕	普	粗石英多・長石 粗砂・金雲母少	外　褐色 内　灰黄色	
53		底　部		Ⅲ	外面横位の条痕	やや悪い	石英・長石・砂	外　にぶい黄褐色 内　暗オリーブ褐色	

54		底　部	B－7		外面斜位の条痕	普	石英少・長石少 砂・金雲母微	外　灰黄色 内　浅黄色	
55	壺	底　部	A－7	Ⅲ	底面木葉痕（シダ類）	普	砂・金雲母微	にぶい黄橙色	
56		底　部	A－1 A－2	Ⅲ	底面木葉痕	普	石英少・長石少 砂・金雲母微	外　灰黄褐色 内　黄灰色	
57		底　部	B－7	Ⅲ	外面横位の条痕 底面木葉痕	普	石英・長石・砂	外　暗灰黄色 内　黒色	内面タール付着
58		底　部	A－4	Ⅲ	外面縦位の条痕底面ナデ整形	普	石英少・細砂・金雲母微	にぶい黄橙色	
59	鉢	口縁部	A－7	Ⅲ	第▽群口縁部外面に3条の沈線	普	石英・長石・石・金雲母	にぶい黄褐色	
60	鉢	口縁部	A－4	Ⅲ	第Ⅲ群－Ⅰa 外面縦位の条痕を施す	普	石英少・長石少・砂	黒褐色	
61	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	外面口唇部条痕を施す 工具による疑似縄文内面斜位の条痕甕口縁Ⅰ	普	石英少・長石少 砂	外　にぶい橙色 内　黒褐色	1点出土
62	鉢	口縁部	A－6	Ⅲ	第Ⅲ群－Ⅱ　外面に横位の条痕を施す	普	長石少・細砂 金雲母微	外　暗オリーブ褐色 内　黒褐色	1点出土
63	甕	口縁部	A－7	Ⅲ	第Ⅲ群－Ⅰb 外面に横位の条痕を施す 頸部に穿孔を有す	普	石英・長石・砂	外　黒褐色 内　暗褐色	
64	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2　口唇部を外側に肥厚させる外面は横位の条痕	普	石英・長石 砂・金雲母	外　橙色 内　明赤褐色	
65	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	長石・砂・金雲母	外　暗灰黄色 内　黒色	
66	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は縦位羽状文？	やや悪い	石英少・長石少 金雲母少	外　黒褐色 内　にぶい黄褐色	
67	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母少	外　黒褐色 内　暗褐色	
68	甕	口縁部	A－2 A－3	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石・金・雲母	褐色	
69	甕	口縁部	A－5	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外　オリーブ褐色 内　黒色	
70	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2	普	石英・長石 金雲母	外　オリーブ黒色 内　褐色	
71	甕	口縁部	A－5	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は斜位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外　黒褐色 内　褐灰色	
72	甕	口縁部	A－5	ⅢⅣ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石 細砂・金雲母	外　黒色 内　黒褐色	
73	甕	口縁部	A－5	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石 砂・金雲母微	外　赤褐色 内　褐色	
74	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石 砂少・金雲母少	外　にぶい赤褐色 内　暗赤褐色	
75	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英少・長石少 砂少	外　明赤褐色 内　黄灰色	
76	甕	口縁部	A－6	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石 砂少・金雲母	外　黄褐色 内　にぶい黄褐色	
77	甕	口縁部	A－3	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2　外面は横位の条痕が粗く残る	やや悪い	石英・長石 砂・金雲母	外　暗褐色 内　褐色	
78	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅰ－2　外面は横位の巾広の条痕	普	細石英・細長石 金雲母少	外　にぶい褐色 内　灰黄褐色	
79	甕	口縁部	A－7		甕口縁Ⅰ－2　外面は横位の巾広の条痕	普	細石英・長石 金雲母	外　黒色 内　灰黄褐色	
80	甕	口縁部	A－5	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・金雲母	外　黒褐色 内　褐色	
81	甕	口縁部	B－7		甕口縁Ⅰ－3　外面は横位の条痕の後縦位の条痕を施す	やや良い	砂・金雲母微	外　暗赤褐色 内　黒色	
82	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅰ－3 口唇部内面を若干肥厚させる外面は横位の条痕	普	砂・長石	褐色	
83	甕	口縁部	A－2	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－3　外面は横位の条痕の後縦位の痕を施す	普	砂・金雲母少	外　黒褐色 内　にぶい赤褐色	
84	甕	口縁部	A－6	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－3外面は横位の条痕の後縦位の条痕を部分的に施す口唇部内面を若干肥厚	普	石英少・砂	外　赤褐色 内　黄	
85	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅰ－3 外面は縦位の条痕を施す一部に横位の条痕がみられる	普	石英少・長石・砂	外　黒褐色 内　にぶい黄褐色	
86	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	甕口縁Ⅰ-3 口唇部内面を若干肥厚させる外面は縦位の条痕の後縦位の条痕を部分的に施す	普	長石・砂少	外　赤褐色 内　にぶい黄褐色	
87	甕	口縁部	A－3	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－3　口唇部内面を若干肥厚させる外面は縦位の条痕を部分的に施す	普	砂	黒色	
88	甕	口縁部	A－1 A－2 A－3	Ⅱ	甕口縁Ⅱ 外面は巾広の条痕を粗く施す	普	石英、長石 金雲母微	外　黒褐色 内　オリーブ黒色	
89	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅱ　外面は横位の巾広の条痕	やや悪い	石英・長石	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	外面スス付着
90	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅱ　外面は横位の巾広の条痕	普	石英・長石 金雲母少	外　にぶい黄橙色 内　褐色	
91	甕	口縁部	A－1 A－2 A－3	Ⅲ	甕口縁Ⅲ？ 外面は横位の条痕	普	石英・長石・砂	外　灰黄褐色 内　黄灰色	
92	甕	口縁部	A－2	Ⅲ	甕口縁Ⅲ 外面は横位の条痕	普	細石英・長石 細砂・金雲母少	外　暗褐色 内　オリーブ褐色	
93	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅲ 外面は横位の条痕	普	細長石・石英少 金雲母少	外　にぶい黄褐色 内　浅黄色	
94	甕	口縁部	A－3	Ⅲ	甕口縁Ⅲ 外面は横位の条痕内面ナデ整形	普	石英少・長石 金雲母少	外　黄褐色 内　灰オリーブ色	
95	甕	口縁部	A－3	Ⅲ	甕口縁Ⅲ外面は横位の条痕(甕口縁)	普	石英少・長石・金雲母少	外　褐色 内　黄褐色	94と同一個体
96	甕	頸部～胴部	A－3	Ⅲ	斜位の条痕	普	長石・砂	黒褐色	
97	甕	頸　部	A－2 A－3	Ⅲ	外面横位の条痕	やや悪い	石英少・長石 金雲母	外　黒色 内　黒褐色	
98	甕	頸　部	B－6	Ⅲ	外面横位の条痕	普	石英・長石多	外　黒褐色 内　暗褐色	
99	甕	頸部～胴部	A－4	Ⅲ	外面斜位の条痕 内面一部条痕が残る	普	石英・長石	外　黒褐色 内　暗褐色	
100	甕	胴　部	A－5	Ⅲ	外面横位の条痕 内面板状工具によるナデ	普	石英・長石 金雲母	外　オリーブ黒色 内　褐色	外面スス付着
101		胴　部	A－6	Ⅲ	外面斜位の条痕	普	粗石英・長石 金雲母	外　灰褐色 内　褐色	

102		胴　部	A－1 A－2	Ⅲ	外面斜位の細かい条痕	やや悪い	粗石英・長石 砂・金雲母少	外　灰白色 内　灰黄色	
103	壺？	胴　部	A－4	Ⅲ	外面横位の条痕　2 ケ所穿孔がみられる	普	石英・長石 砂少・金雲母多	外　明褐色 内　暗赤褐色	外面スス付着
104		胴　部	A－1 A－2	Ⅲ	外面斜位の細かい条 痕	普	石英・長石 砂少・金雲母微	外　浅黄色 内　オリーブ黒色	外面スス付着
105		胴　部	A－6	Ⅲ	外面植物の繊維の束 による縦位の条痕	普	石英・長石・砂	外　暗灰黄色 内　黄褐色	
106	甕	胴部下 位	A－5	Ⅲ	外面横位の条痕	普	石英・長石・砂少	外　にぶい褐色 内　にぶい黄橙色	内面タール付着
107		胴部下 位	A－2	Ⅲ	外面横位、斜位の条 痕　内面表面磨耗	やや悪い	粗石英・長石	外　にぶい黄橙色 内　明黄褐色	
108		胴部下 位		Ⅰ	外面横位の条痕	普	石英・細長石 金雲母	外　にぶい赤褐色 内　暗褐色	内面タール付着
109	甕	胴　部	A－7	Ⅳ	外面横位の条痕の後縦位の条痕を 間隔を開けて施す内面斜位条痕	やや悪い	石英・長石 砂・金雲母少	明褐色	
110	甕	胴　部	A－2 A－3	Ⅲ	外面横位の条痕の後縦位の 条痕を間隔を開けて施す	普	長砂・砂・金雲母	暗赤褐色	
111		口縁部		Ⅰ	外面上位を横位の条痕(横線文) 下位を斜位の条痕(横位羽状文) を施す口唇部は欠る	やや悪い	金雲母・長石・砂	外　褐色 内　にぶい黄褐色	
112		口縁部	A－1 A－2	Ⅲ	平縁の小型な口縁 （甕口縁Ⅱ）	普	石英・長石 金雲母少	外　にぶい褐色 内　褐色	
113		口縁部	A－6	Ⅲ	甕口縁Ⅰ-2外面下位に横線がみられる	普	石英・長石	褐色	
114	甕	口縁部		Ⅰ	厚手の口縁で内外面と もヨコナデ甕口縁Ⅰ-1	普	石英・長石・砂	外　にぶい黄褐色 内　にぶい橙色	
115				Ⅰ	外面波状文？	普	石英・長石・砂	外 灰黄褐色 内 赤褐色	
116		胴　部	A－7	Ⅲ	外面横線文	普	石英・長石・砂	褐色	外面赤彩
117	壺	頸部？	A－2	Ⅲ	外面横線文＋縦位羽状文？	普	石英・長石金雲母	黒褐色	
118	壺	口縁部		Ⅰ	波状口縁？口唇部外面棒状 工具による押圧文と円形刺 突文棒状付文内外面ミガキ	普	石英・長石・砂	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	
119		胴　部	A－5	Ⅲ	縄文（ＬＲ）	普	石英・長石・砂 金雲母少	外　黒褐色 内　褐色	
120		胴　部		Ⅲ	縄文（ＬＲ）	普	石英･長石･砂･金雲母少	にぶい褐色	119と同一個体
121		胴　部	A－7	Ⅲ	縄文（ＬＲ）	やや悪い	粗石英・長石少 金雲母微	外　灰白色 内　明褐色	
122		胴　部	A－5	Ⅲ	縄文（ＬＲ）	普	石英・長石 金雲母微	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	
123		胴　部	A－4	Ⅲ	縄文（ＬＲ）	普	石英・長石 金雲母微	外　にぶい赤褐色 内　暗褐色	
124		胴　部		Ⅰ	弧文の沈線 横位の2条の沈線 ＋磨消縄文(ＬＲ)内面表面剥離	普	石英・長石 金雲母	外　褐色 内　赤褐色	
125		胴　部		Ⅲ	Ｌ字の沈線(三角文？)横位 の1条の沈線＋磨消縄文(ＬＲ)	普	石英・長石少 金雲母	外　黒褐色 内　暗赤褐色	外面赤彩
126		胴部？		Ⅲ	磨消縄文（ＬＲ）＋横 位の２条の沈線	普	石英・長石少	外　灰黄褐色 内　褐灰色	
127		胴　部		Ⅲ	磨消縄文（ＬＲ）＋横 位の条痕	やや悪い	粗石英・長石少 金雲母微	外　灰白色 内　明褐色	121と同一個体
128		頸部～ 胴部	A－6	Ⅲ	横位の沈線文＋菱形文？	普	石英・長石・砂 金雲母少	外　暗赤褐色 内　赤褐色	
129		胴　部	A－6	Ⅲ	三角文	普	石英・長石 金雲母少	外　にぶい赤褐色 内　褐色	
130		胴　部	A－2	Ⅲ	横位の沈線文＋三角文?	普	石英・長石・砂 金雲母微	外　灰褐色 内　にぶい赤褐色	外面赤彩
131		胴　部	A－4	Ⅲ	横位の沈線文＋？	普	石英・長石 金雲母微	外　にぶい黄橙色 内　褐色	

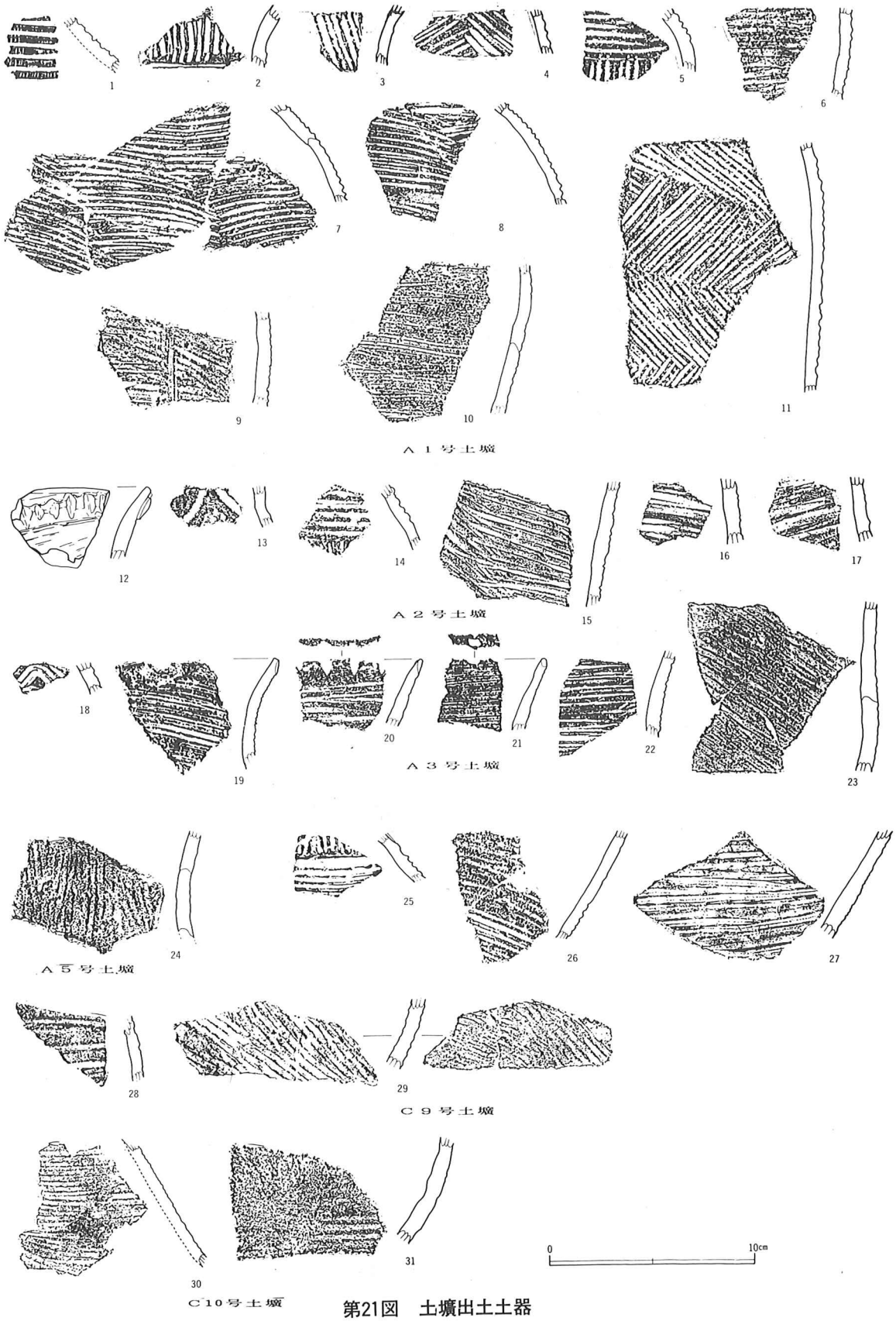
第６表　Ｂ地区出土土器観察表

号	器形	部　位	出土区	層位	整形・施文の特徴	焼　成	胎　土	色　調	備　考
132	壺	口縁部		撹乱	壺口縁Ⅰｂ－２ 外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石・砂 金雲母少	外　にぶい褐色 内　にぶい黄褐色	
133	壺	口縁部		Ⅰ	壺口縁ⅠＣ－１ 内面縦位羽状文	悪　い	石英・長石・砂 金雲母少	外　明赤褐色 内　灰褐色	
134	壺	口縁部		Ⅰ	壺口縁ⅠC-1外面は横位の条痕 内面は横位と斜位の条痕を施す	普	石英少・長石少	外　灰色 内　オリーブ黒	
135	壺	頸　部		Ⅰ	外面波状文	普	粗石英・長石 金雲母少	外　にぶい黄橙色 内　暗褐色	
136	壺	頸　部			外面2段の波状文…横位の条痕 (横線文) を波状文で区画する	普	石英・長石少 金雲母	明赤褐色	
137	壺	胴　部	A－6	Ⅲ	横線文＋３段の斜位の 条痕による重山形沈線文	普	石英・長石・砂少 金雲母	褐色	
138	壺	肩部～ 胴部		Ⅰ	横線文＋押圧文を施す 凸帯＋縦位羽状文※凸 帯…押圧文以外は指頭による画取り	普	石英・長石	外　暗褐色 内　赤褐色	
139	壺	胴　部		Ⅰ	縦位羽状文	普	石英・細長石	外 にぶい黄褐色　内 黒褐色	
140	壺	頸　部		Ⅰ	横線＋縦位羽状文	普	石英・長石・砂少		
141	壺	肩　部	A－2	Ⅲ	横線文＋縦位羽状文？	普	石英・長石・砂	外　橙色 内　にぶい黄橙色	
142	甕？	頸　部		Ⅰ	横位羽状文？	普	石英・長石・砂少	外　にぶい黄褐色 内　灰褐色	
143	壺	底　部			底面網代痕 外面磨耗	やや悪い	石英・長石	外　暗灰色 内　にぶい黄褐色 底　にぶい赤褐色	
144	甕	口縁部	B－7	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－１ 外面は横位の条痕	普	石英・長石砂	外　暗赤褐色 内　明赤褐色	
145	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅰ－２ 外面は縦位の条痕	普	石英少・長石・砂	外　にぶい赤褐色 内　明赤褐色	
146	甕	口縁部	A－4	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－２ 外面は横位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母多	外　黒褐色 内　にぶい黄褐色	
147	甕	口縁部	B－6	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－２ 外面は横位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母多	外　黒褐色 内　褐色	

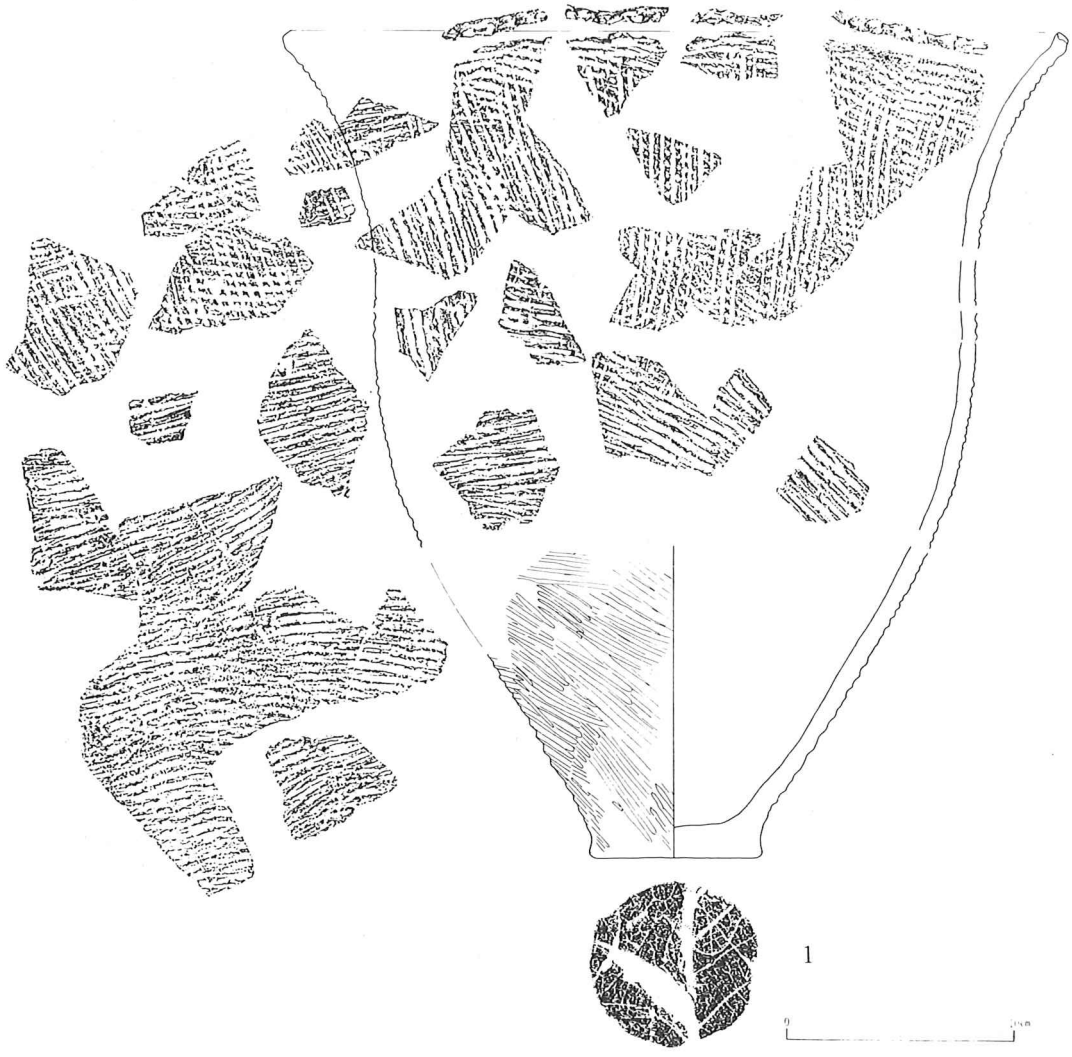
147	甕	口縁部	B－6	Ⅲ	甕口縁Ⅰ－2 外面は横位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母多	外　黒褐色 内　褐色	
148	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅰ－2 外面は縦位の条痕	やや悪い	石英・長石・砂少 金雲母少	外　橙色 内　明褐色	
149	甕	口縁部 ～胴部			甕口縁Ⅰ-3 外面横位の条痕の後縦位の条痕を間隔を開けて施す	普	長石・小石	外　暗赤褐色 内　黒褐色	
150	甕	口縁部			甕口縁Ⅰ-3外面横位の条痕の後縦位の条痕を間隔を開けて施す内面縦位の条痕	普	石英少・長石少 砂少	外　黄灰色 内　黒褐色	
151	甕	口縁部		撹乱	甕口縁Ⅰ－3　外面横位の条痕の後縦位の条痕を間隔を開けて施す	普	石英・長石少 砂少	にぶい黄褐色	
152	甕	口縁部		撹乱	甕口縁Ⅱ　外面縦位の条痕　外面磨耗	やや悪い	石英・長石	外　明赤褐色 内　暗赤褐色	
153	甕	口縁部	A－6	Ⅲ	甕口縁Ⅱ 外面横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外　黒褐色 内　黒色	
154	甕	口縁部		Ⅲ	甕口縁Ⅲ 外面横位の条痕	普	石英・長石・砂 金雲母	外　明褐色 内　黄褐色	
155	壺	頸　部		Ⅲ	横線＋羽状縄文（ＬＲ）	普	石英・長石 金雲母少	外　にぶい黄橙色 内　オリーブ黄橙色	
156		胴　部		Ⅲ	３条の横線＋２条の斜線　内面剥離	普	石英少・長石	外　褐色 内　暗褐色	

第７表　Ｃ地区出土土器観察表

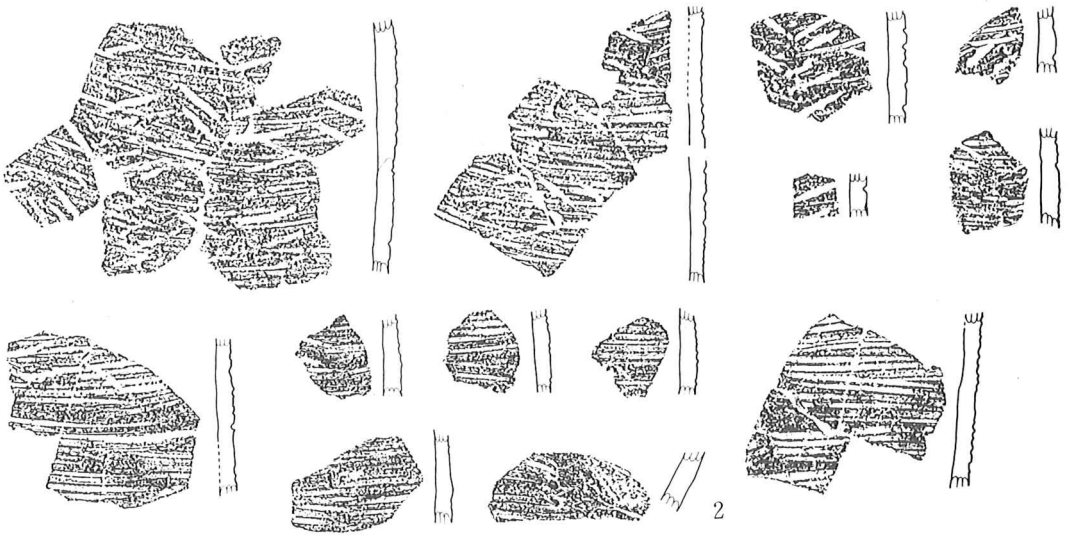
号	器形	部　位	出土区	層位	整形・施文の特徴	焼　成	胎　土	色　調	備　考
157	壺	口縁部	Ｃ－７	Ⅲ	壺口縁Ⅱｂ 内外面共に横位の条痕	普	石英・長石	外　黒色 内　にぶい黄橙色	
158	壺	口縁部	Ｃ－７	Ⅲ	壺口縁Ⅱ Ｃ－１外面横位の条痕	普	石英少・長石少	にぶい橙	１点出土
159	壺	頸　部		Ⅰ	孤文＋横線文	普	石英・長石・金雲母	外　灰褐色 内　褐色	
160	壺	頸　部	Ｃ－７ Ｃ－８		太目の波状文	普	石英・長石	外　褐色 内　暗褐色	
161	壺	頸　部	Ｃ－７	Ⅲ	横線文＋波状文	普	石英・長石	外 浅黄色 内 黒褐色	
162	壺	頸　部		Ⅰ	横線文＋細かい波状文	普	石英・長石少 砂少	外　にぶい黄褐色 内　にぶい黄橙色	
163	壺	頸　部		Ⅰ	横線文	普	石英少・金雲母微	外　にぶい黄色 内　黄灰色	
164	壺	頸　部	Ｃ－７	Ⅲ	縦線文＋横線文	普	石英少・金雲母微	外　にぶい黄橙色 内　黒色	
165	壺	頸　部		Ⅰ	横線文＋縦線文	普	石英・長石・砂少 金雲母微	外　明赤褐色 内　赤褐色	
166	壺	胴　部	Ｃ－８	Ⅲ	横線文？	やや悪い	石英・長石 金雲母微	外　にぶい橙色 内　にぶい黄褐色	
167	壺	胴　部		Ⅰ	縦線文＋横線文	やや悪い	石英・長石 金雲母	外　にぶい黄褐色 内　褐色	
168	壺	頸　部	Ｃ－７	Ⅲ	横線文＋横位羽状文	普	石英・長石・砂少	外　にぶい褐色 内　赤褐色	１点出土
169	壺	胴　部		Ⅰ	横線文＋縦位羽状文？	普	粗石英・長石 金雲母少	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	
170	壺	胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	横線文＋縦位羽状文	普	石英・長石・金雲母少	外　黒色　内　褐色	
171	壺	胴　部	Ｃ－８	Ⅲ	縦位羽状文	普	石英・長石金雲母微	黒褐色	
172	壺	胴　部	Ｃ－８	Ⅲ	横位の条痕	普	石英・長石	外　黒褐色 内　にぶい赤褐色	
173	鉢	口縁部	Ｃ－７	Ⅲ	第Ⅲ群－Ⅰ内面にミガキを施す	普	石英少・長石・砂少	黒色	
174	甕	口縁部	Ｃ－７	Ⅲ	甕口縁Ⅰ 外面粗い横位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母	外　黒褐色 内　にぶい赤褐色	１点出土
175	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅰ－２ 外面横位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母少	外　黒色 内　にぶい褐色	
176	甕	口縁部		Ⅰ	甕口縁Ⅱ 外面横位の条痕	やや悪い	石英・長石 金雲母	外　明赤褐色 内　褐色	
177	甕	胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面斜位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母微	外　暗赤褐色 内　褐色	
178		胴　部	Ｃ－８	Ⅲ	外面斜位の後横位の条痕	普	石英少・長石	外　暗赤褐色 内　にぶい黄橙色	
179	甕	頸部～ 胴部		Ⅰ	外面横位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母少	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	外面スス付着
180		胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面横位の条痕	やや悪い	石英少・長石 金雲母少	外　黒褐色 内　にぶい赤褐色	
181	甕	頸　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面横位の条痕	普	石英・細長石 砂少・金雲母	外　暗青灰色・黒色 内　にぶい黄橙色・黒褐色	
182	甕	胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面横位の条痕	普	粗石英・長石少 金雲母少	外　黒色 内　褐色	外面スス付着
183		胴　部	Ｃ－８	Ⅲ	外面斜位の条痕	普	石英少・長石 金雲母	外　黒褐色 内　黒色	
184	甕	胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面斜位の条痕	普	長石少・金雲母微	外 黒色 内　黒褐色	外面スス付着
185	甕	胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面横位斜位の条痕 内面横位の条痕	普	長石・砂	外　黒褐色 内　暗褐色	外面スス付着
186	甕	頸部～ 胴部	Ｃ－７	Ⅱ Ⅲ	外面斜位の条痕の後縦位の条痕を間隔を開けて施す	やや良い	石英少、長石、砂少 金雲母少	外　黒色 内　暗褐色	
187	甕	頸　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面縦位の条痕	普	粗石英・長石 金雲母少	外　黒褐色 内　オリーブ黒色	
188				Ⅲ	外面細かい縦位の条痕	普	石英・長石 金雲母少	外　暗灰黄色 内　にぶい黄橙色	
189			Ｃ－７	Ⅲ	外面縦位の細かい条痕	普	長石少	外 暗褐色 内 灰黄褐色	
190		胴　部	Ｃ－７	Ⅲ	外面半截竹管による 横位の条痕	普	石英・長石少 金雲母少	外　赤褐色 内　にぶい赤褐色	１点出土
191		頸部？		Ⅰ	外面ミガキ 横線文（３条）＋？	普	石英・長石 金雲母微	外　暗赤褐色 内　にぶい赤褐色	
192		胴部？	Ｃ－７	Ⅲ	横線文＋三角文？	普	石英・長石 金雲母少	外　黒褐色 内　暗赤褐色	
193		胴部？	Ｃ－７	Ⅲ	外面ミガキ磨消縄文 （ＬＲ）＋」字状の沈線	普	石英・長石 金雲母	外　にぶい赤褐色 内　暗赤褐色	


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
A 1 号土壙
12
13
14
15
16
17
A 2 号土壙
18
19
20
21
22
23
A 3 号土壙
24
A 5 号土壙
25
26
27
28
29
C 9 号土壙
30
31
C10号土壙
0
10cm

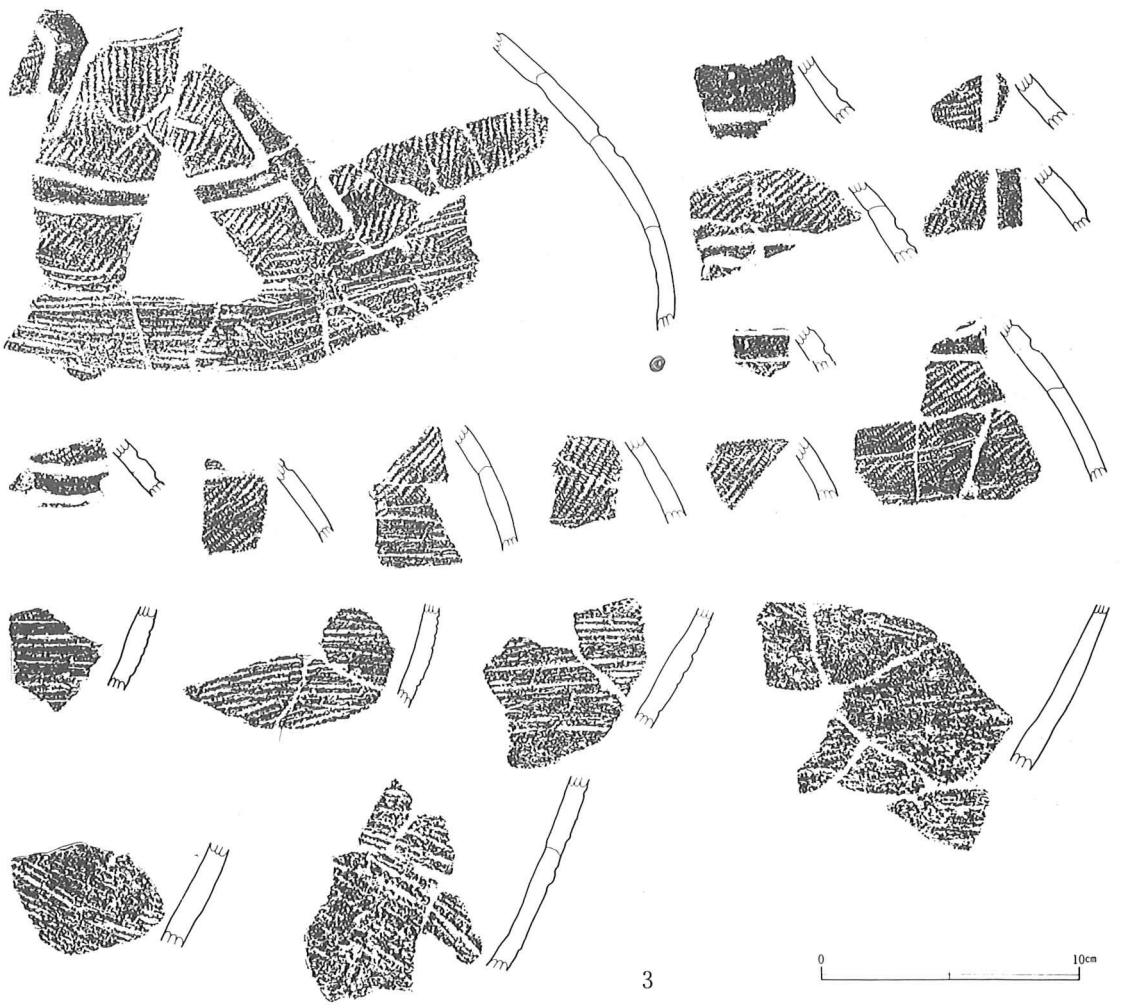
第21図　土壙出土土器



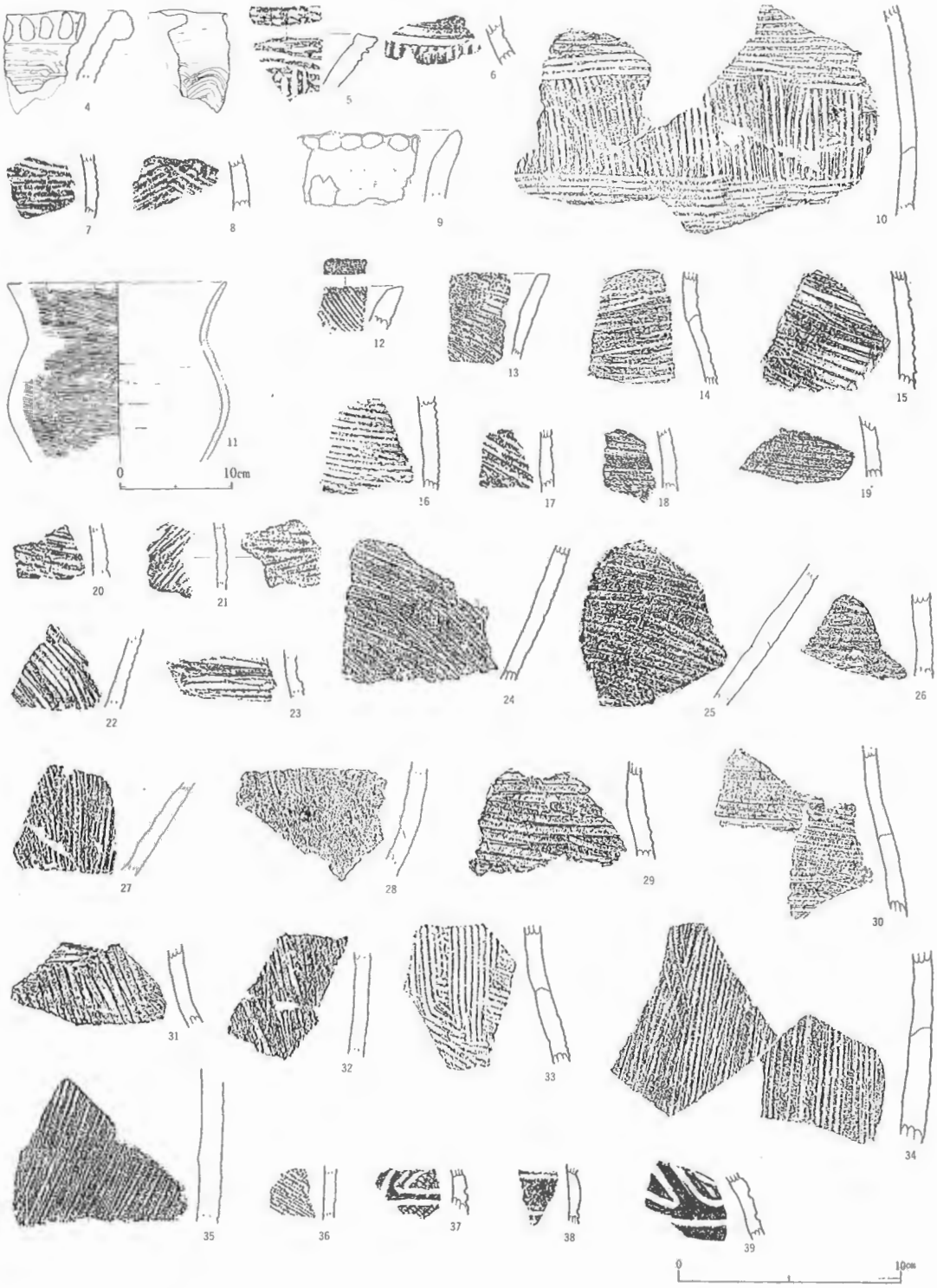
第22図　C－12号遺物集中区 ①



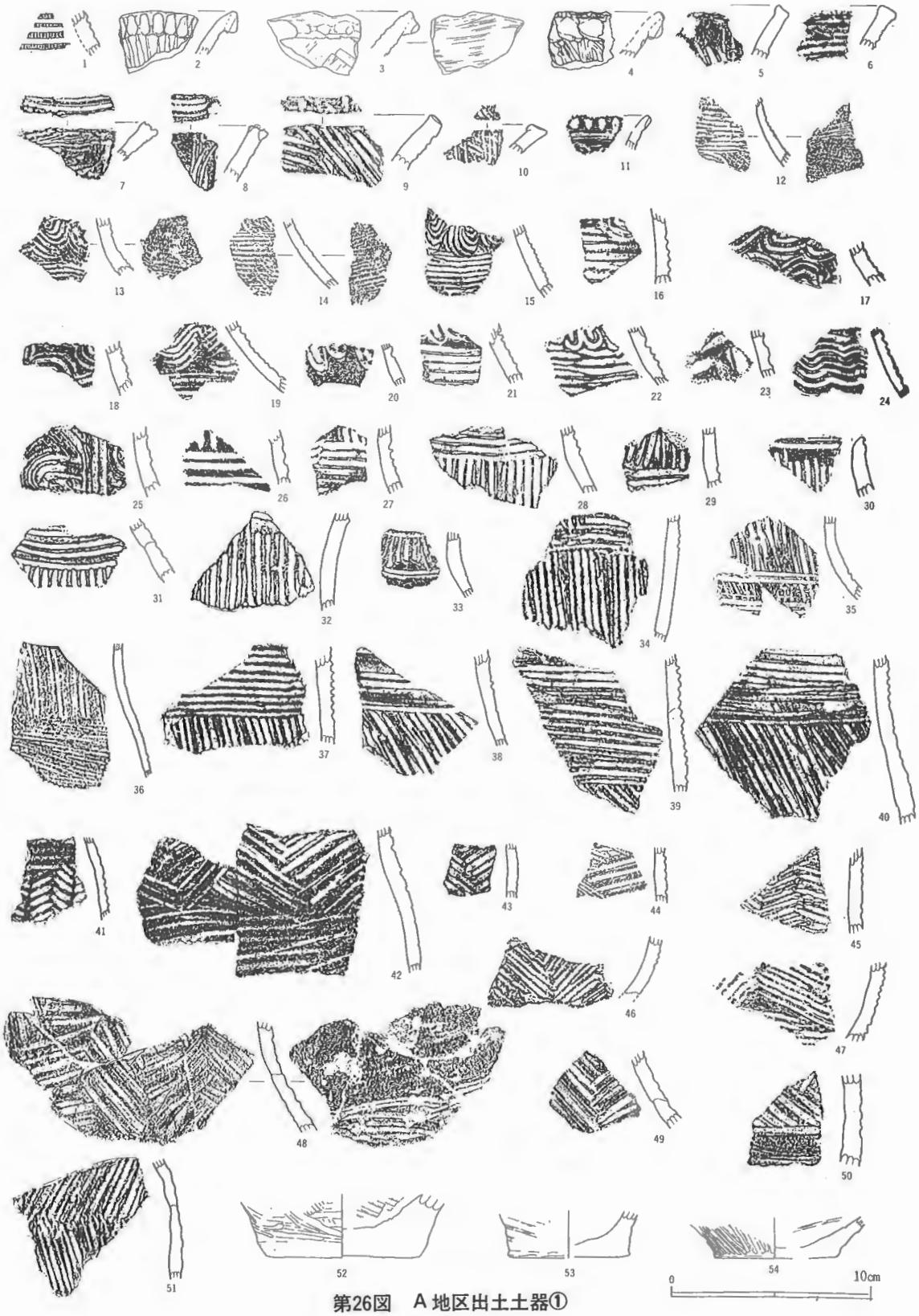
第23図C －12号遺物集中区出土土器②



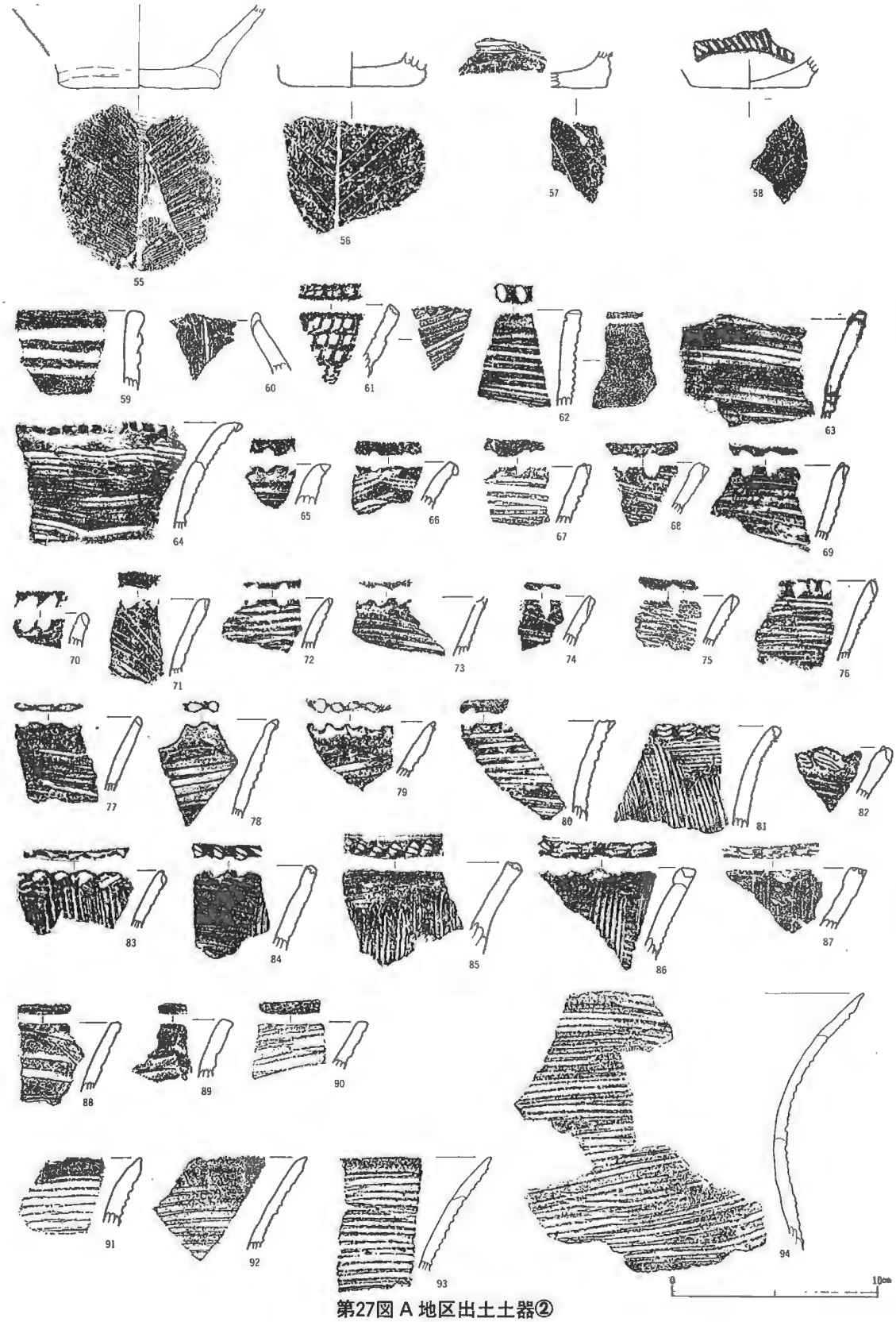
第24図C －12号遺物集中区出土土器③



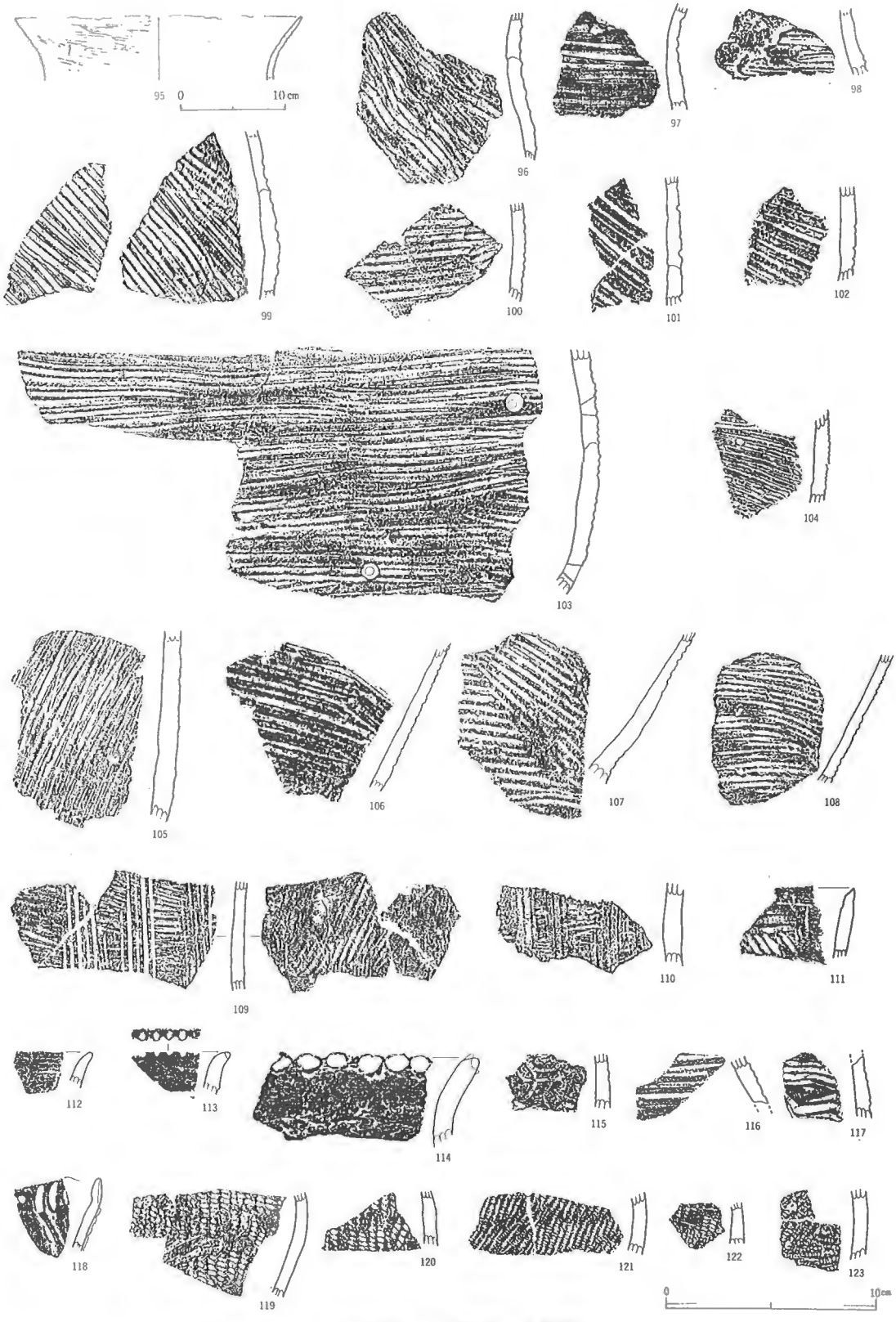
第25図　C－12号遺物集中区出土土器④



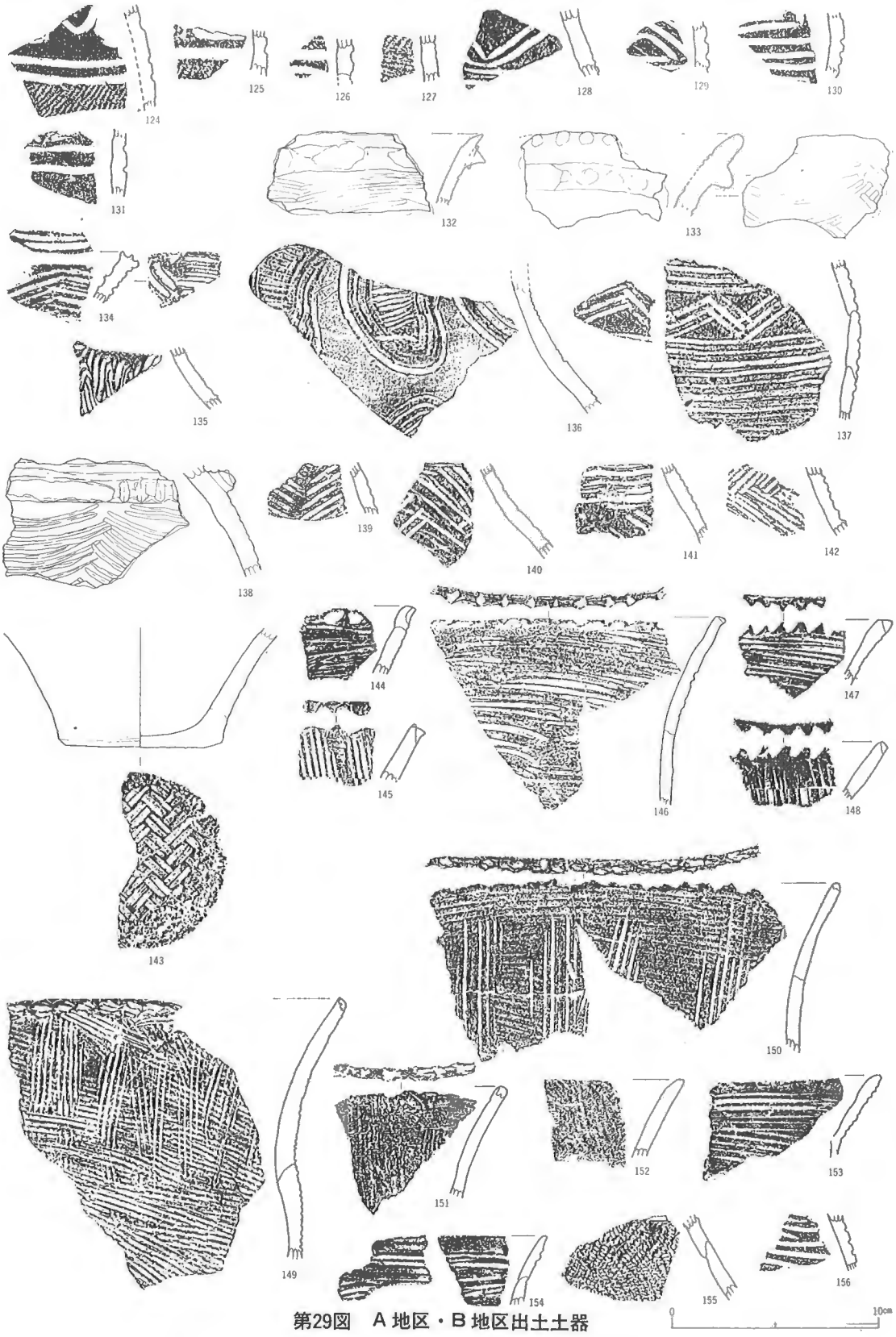
第26図　A地区出土土器①



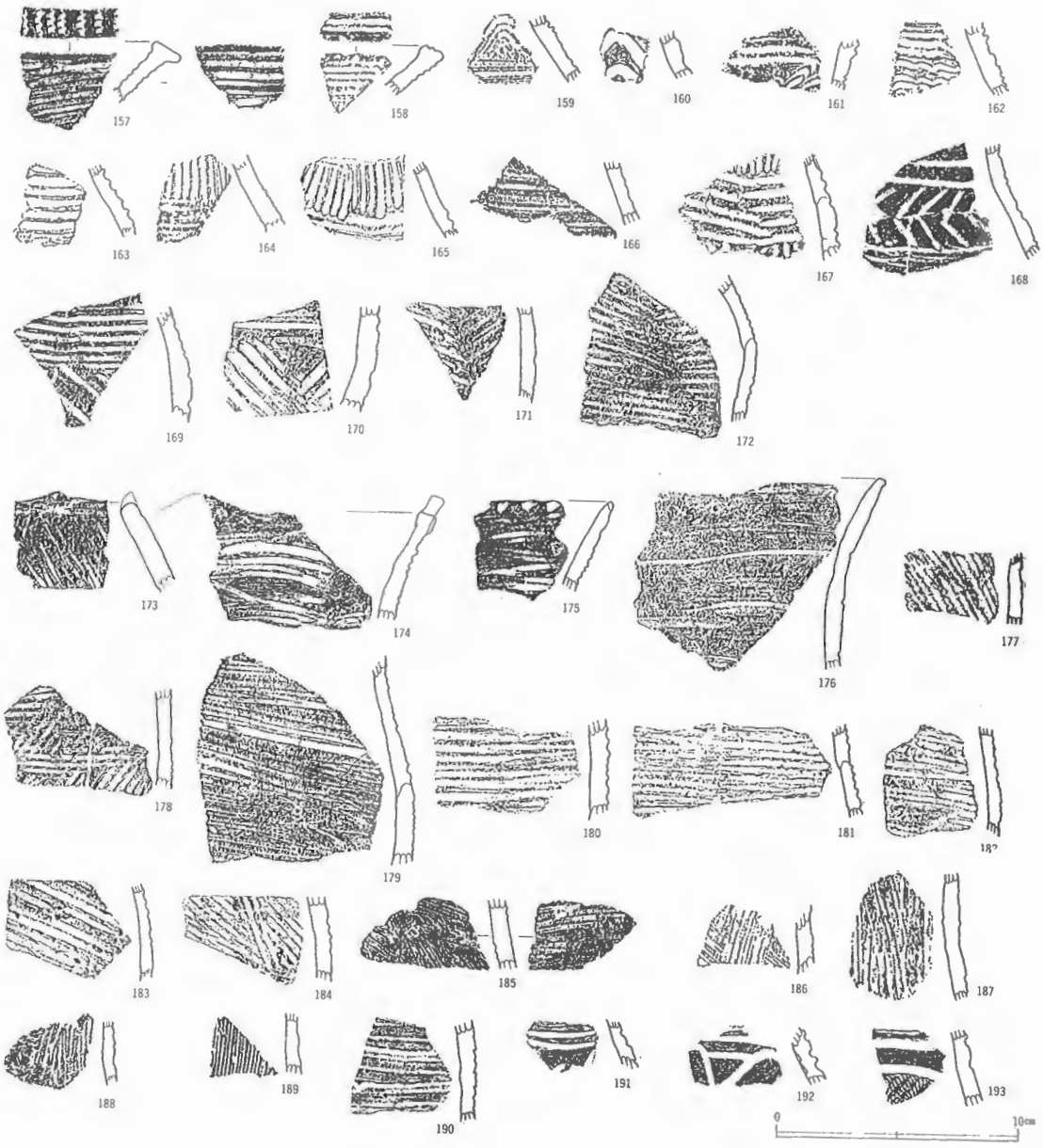
第27図 A 地区出土土器②



第28図　A 地区出土土器③



第29図　A 地区・B 地区出土土器



第30図　C 地区出土土器

2　石　器（第31～34図、図版23～24）

本調査で得られた石器は、磨製石斧、打製石斧、横刃不定形石器、砥石、磨石、石鍬等、製品と認められるもの20点、黒曜石剝片58点、頁岩類剝片112 点であった（第８表）。この他、Ａ～Ｃ地区の所属不明の遺物及び、荻精吾氏表採資料を合わせた数は、磨製石斧と環状石斧が加わり製品と認められるもの86点、黒曜石剝片105 点、頁岩類剝片212 点、その他14点で、総数417 点であった。荻氏の資料については、駿豆考古第６号（小野他1962）や、富士宮市史上巻（植松1971）でその一部が紹介されているが、大部分が未発表資料であり、表採地点が本調査区内のＡ地区にあたる部分とその周辺の畑に限られることを考えあわせ、本稿ではあえて区別せずに同一図版に組んだ。発掘資料と表採資料の区別は石器計測表（第9.10表）を参照されたい。

磨製石斧（１～２）

磨製石斧は２点検出された。１・２とも敲打と粗い研磨が施され、断面は楕円形を呈する。乳棒状石斧の基部破片である。

打製石斧（３～35）

打製石斧は33点を認めた。このうち、完形品は16点であった。３～５は大型の石鍬ともいうべきもので、いずれも扁平な断面を呈し、長径25cm前後を測る。６～８は長径16～18cm程の中型のものである。９は基部欠損品ながら両側に着装用と考えられる抉りこみがあり素材をあまり変形させていない。10、11は破片であるが、大型の石斧に匹敵する刃部を作り出している。12～17、24、25は基部欠損のもの、18～21は刃部欠損資料である。16～31は６～10cm程度の小型のものである。32～35は形状が特異のもので、35は南信濃や南九州にみられる靴形石器と呼ばれるもの（神村1985）に類似する。

環状石斧（36）

1/4 程度の破片であるが本来円形を呈し、周囲に刃部を作り出し中央に着柄用の穴をあけたものである。外側面において砥石としての再利用がうかがえる。

磨製石庖丁（37）

富士宮史上巻（1971植松）に掲載された資料である。半折しているが、現長10.6cm程を測る。直線刃半月形態のものが、使用と研磨を重ね、刃部を内彎させた可能性が強い。研磨は孔のすぐにまで及んでいる。

横刃不定形石器（38～66）

不定形で横型に刃部を作り出している打製石器で、全部で29点を数える。38～54については石庖丁的な形態を示すもので、その形態を多量の磨製石庖丁出土で知れる池上遺跡（1979大阪文化財センター）に求めれば、38は外彎刃半月形態、39～46は長方形態47～50、54は楕円形態、51は杏仁形態、52、53は直線刃半月形態ということになる。39、41、42、44～46は破片資料である。55は三角形の横刃形石器で石匙としてもいいかもしれない。56～66は、剝片の横刃形石

第8表　石器組成表

出土地点		磨製石斧	打製石斧	環状石斧	磨製石窓丁	横刃不定形石器	砥石	磨石	石鏃	頁岩類剥片	黒曜石剥片	その他	合計
遺構内	A1号								1	3	1		5
	A2号		1							9			10
	A3号									2	2		4
	A5号		1						1				2
	B6号							1		2			3
	C7号					1				3			4
	C8号					1				1			2
	C10号					1							1
	C12号								1	8	18		27
小計			2			3		1	3	28	21		58
グリッド内	A-1,2		1							6	2		9
	A−2								1	6	4		11
	A-2,3					1				10	4		15
	A−3								1	5	3		9
	A−4									14	1		15
	A−5									3			3
	A−6		1						2	6	6		15
	A-6,7									1			1
	A−7							1	1	7	3		12
	B−5									1			1
	B−6									1	1		2
	B−7									2	1		3
	C−5										2		2
	C−6									1			1
	C-6,7									1			1
	C−7					1				6	1		8
	C-7,8										1		1
	C−8									2	1		3
	D−11								1				1
	Z−4									1			1
	Z−7									11	7		18
小計			2			2		1	6	84	37		132
表採資料	A地区		1						2	22	8		33
	B地区		1			1	1			1			4
	C地区	1	1			1			1	7	3		14
	荻氏	1	27	1	1	22	3		1	70	36	14	176
小計		2	30	1	1	24	4		4	100	47	14	227
合計		2	34	1	1	29	4	2	13	212	105	14	417

器で、いずれも5～10cm程度の小型のものである。

砥石（67～70）

砥石は4点検出された。67は30cm弱の大型のものである。扁平で片面だけを砥面として使用している。砥石を固定しての使用が考えられる。68～70は小型のものである。68は扁平な菱形状のもので、全側面を砥石としている。69、70は棒状のもので一側面を砥石としている。70は敲石として利用も考えられる。対象物を固定しての使用が考えられる。なお、富士宮史上巻において写真掲載された大型の資料については、その後散逸してしまったのか荻氏表採資料の中に見えなかった。

磨石（71、72）

磨石は2点が検出された。71は長楕円形でふくらみをもち、緻密に研磨されている。72は破片資料である。

石鏃（73～85）

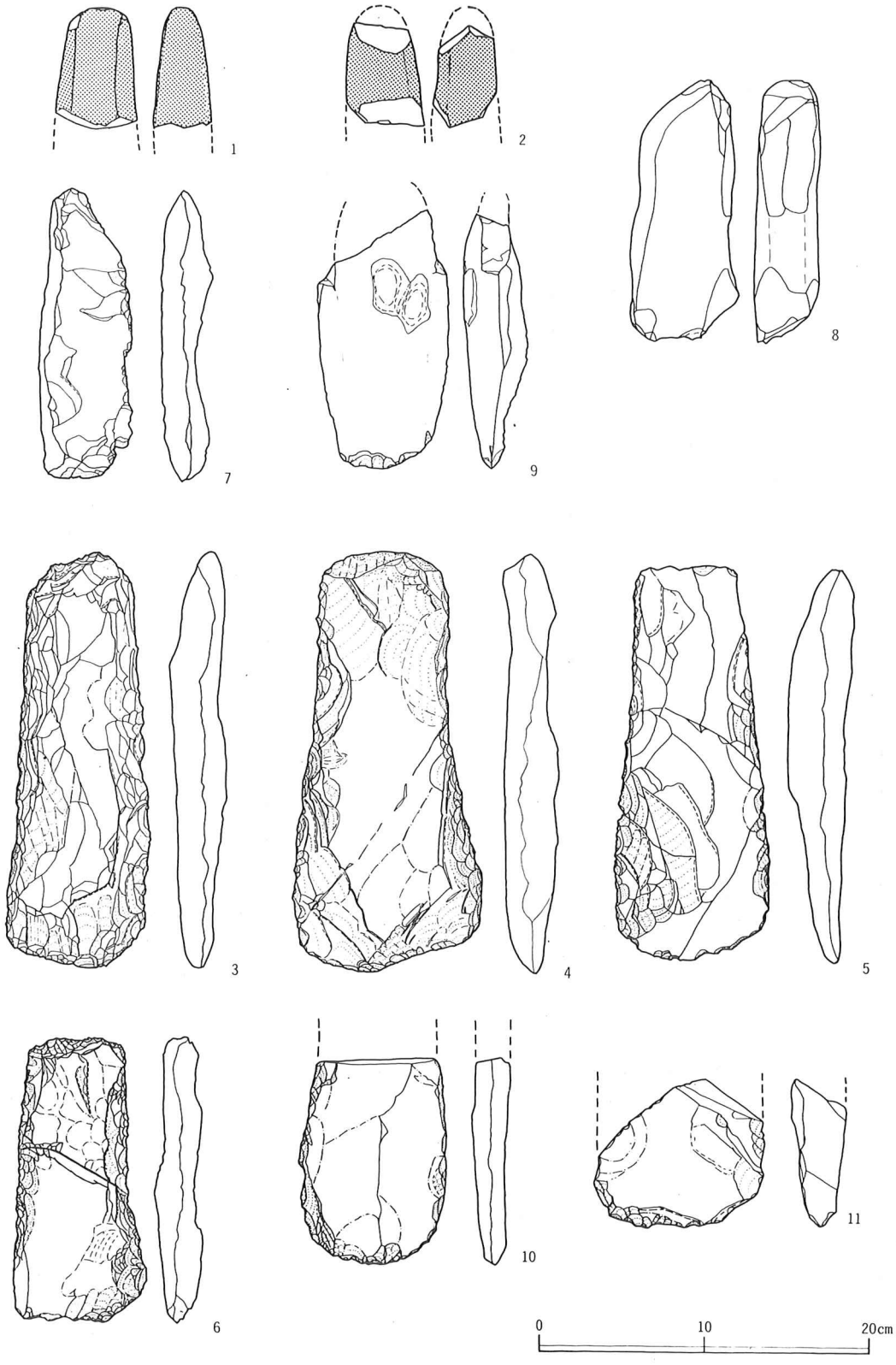
石鏃は13点が検出された。73～75は無茎で基部が直線的なもの、77～83は無茎で基部に抉入のあるもの、84は有茎で基部に抉入のあるもの、85は基部が緩やかに尖るものに分類される。76については基部欠損のためその形状を示さない。85については側縁に段をもつものとして捉えられる。83は磨製石鏃の未製品と考えられる。（渡井）

第9表　石器計測表①

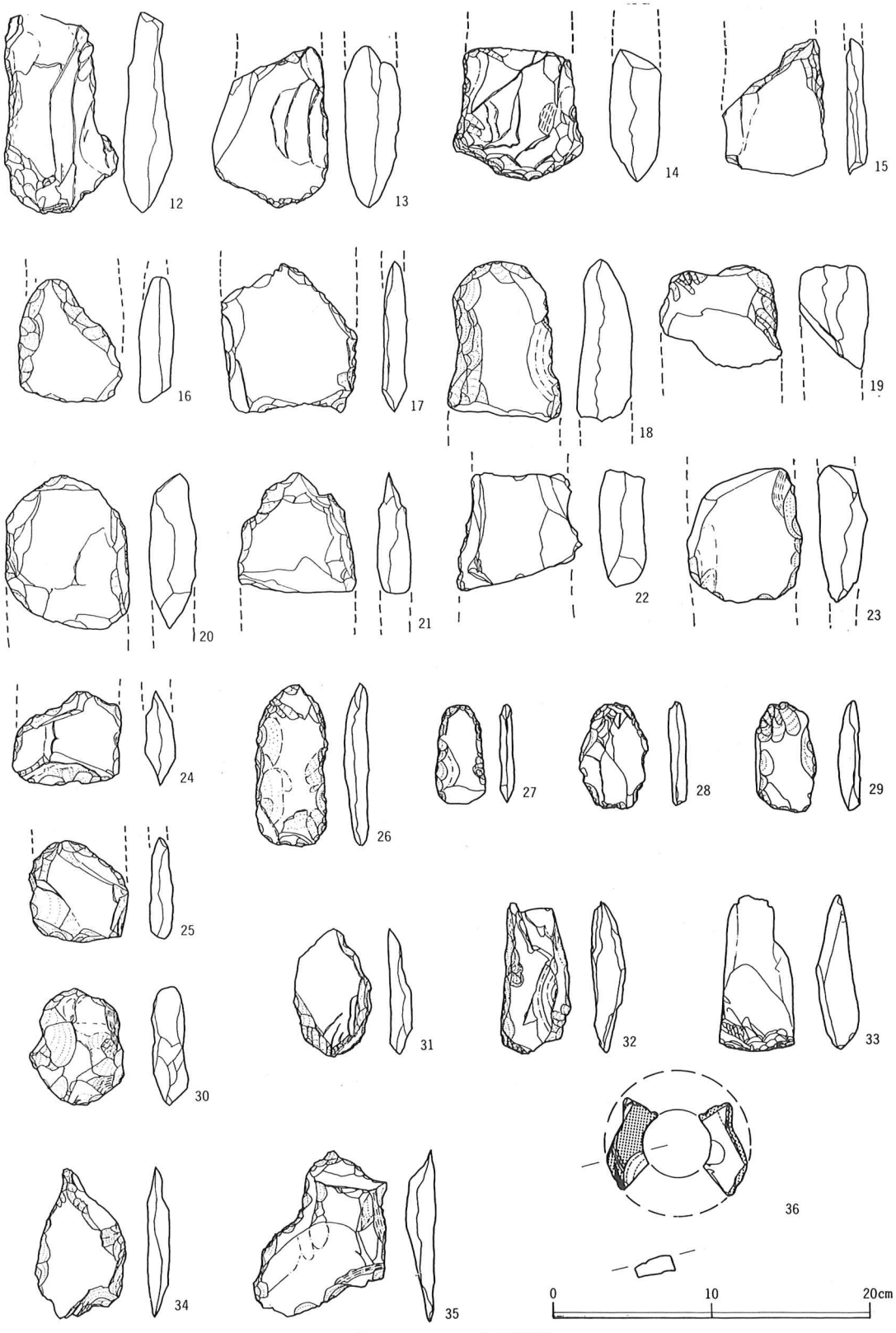
番号	石器名	最大長(mm)	最大巾(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	出土地点	遺存状況
1	磨製石斧	(75.7)	(49.6)	(34.1)	(191)	砂質頁岩	荻氏表採	½～⅓存
2	〃	(62.5)	(44.1)	(38.1)	(176)	〃	C地区表採	⅓～¼存
3	打製石斧	252.0	84.6	32.3	884	〃	A－2ｸﾞﾘｯﾄﾞ	完型
4	〃	253.8	112.9	32.0	998	〃	A－6ｸﾞﾘｯﾄﾞ	〃
5	〃	239.0	91.9	34.3	901	〃	荻氏表採	〃
6	〃	173.0	81.4	23.8	456	〃	〃	〃
7	〃	178.4	55.6	30.9	304	頁岩	〃	〃
8	〃	159.6	66.1	39.0	686	玄武岩	〃	〃
9	〃	(157.2)	79.6	41.4	(543)	砂岩	〃	一部欠
10	〃	(124.1)	88.3	21.6	(354)	砂質頁岩	〃	½存？
11	〃	(88.2)	(108.8)	(33.9)	(343)	〃	〃	¼存？
12	〃	(126.8)	(72.7)	(29.7)	(252)	〃	〃	一部欠
13	〃	(101.7)	72.8	(31.8)	(271)	〃	〃	½～⅓存
14	〃	(83.1)	81.3	(30.5)	(258)	〃	〃	〃
15	〃	(86.3)	(63.7)	(10.4)	(82)	粘板岩	〃	〃
16	〃	(76.6)	(64.7)	(21.0)	(130)	安山岩	A-5号土壙	〃
17	〃	(92.3)	(84.0)	(13.1)	(123)	砂質頁岩	B地区表採	〃
18	〃	(101.9)	(72.9)	(35.0)	(304)	〃	荻氏表採	〃
19	〃	(64.6)	(80.1)	(41.2)	(200)	〃	〃	⅓～¼存
20	〃	(100.2)	(79.1)	(27.4)	(270)	〃	A地区表採	〃
21	〃	(79.8)	(74.3)	(22.0)	(159)	〃	荻氏表採	〃
22	〃	(72.2)	(76.2)	(26.7)	(215)	〃	〃	〃
23	〃	92.1	70.3	29.4	(248)	砂岩	〃	〃
24	〃	(59.4)	(67.5)	(19.0)	(88)	砂質頁岩	〃	〃
25	〃	(63.4)	(63.5)	(14.6)	(76)	〃	〃	〃
26	〃	100.8	44.0	13.5	92	〃	C地区表採	完型
27	〃	62.0	30.9	8.5	24	砂岩	荻氏表採	〃
28	〃	64.9	42.4	12.0	42	頁岩	〃	〃
29	〃	70.0	32.3	13.6	46	砂岩	〃	〃
30	〃	72.0	61.2	22.0	115	砂質頁岩	〃	〃
31	〃	80.8	47.9	13.4	55	粘板岩	〃	〃
32	〃	96.0	43.4	17.9	92	〃	〃	〃
33	〃	97.4	47.1	21.5	136	チャート	〃	〃
34	〃	96.2	54.7	16.1	93	砂質頁岩	〃	〃
35	〃	106.8	81.4	18.6	130	〃	〃	〃
36	環状石斧	――	――	――	――	粘板岩	〃	〃
37	磨製石庖丁	(106.3)	(23.8)	6.2	(24)	緑泥片岩	〃	½存
38	横刃不定形石器	85.2	54.5	11.3	67	砂岩	〃	完型
39	〃	66.8	52.1	11.5	51	砂質頁岩	C地区表採	½存？
40	〃	90.1	45.1	9.8	62	〃	荻氏表採	完型
41	〃	62.6	53.4	9.0	32	頁岩	〃	½存？
42	〃	58.9	43.9	9.9	27	粘板岩	〃	½~⅓存?
43	〃	101.0	35.5	9.9	50	〃	〃	完型

第10表　石器計測表②

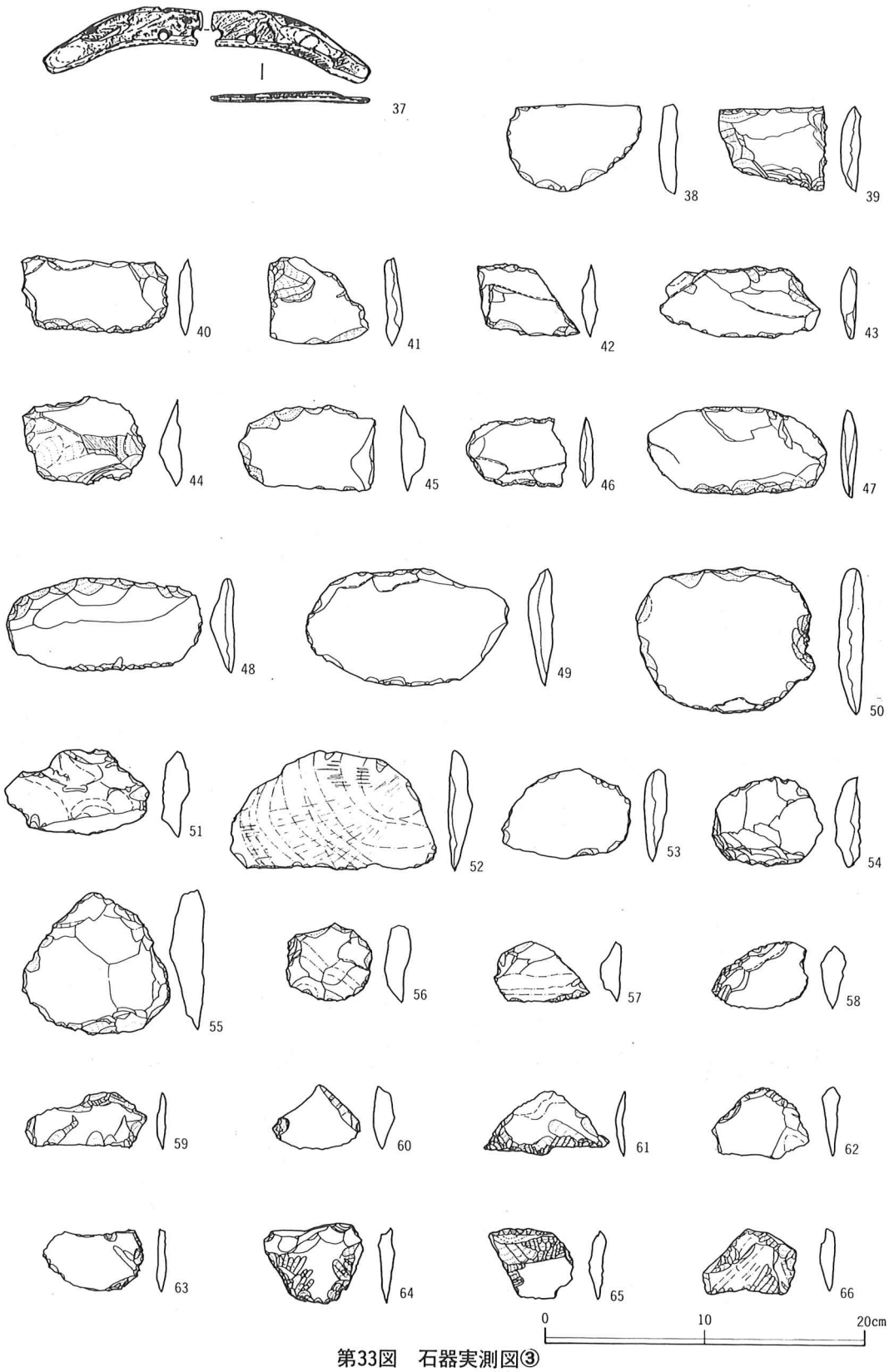
番号	石器名	最大長(mm)	最大巾(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	材質	出土地点	遺存状況
44	横刃不定形石器	75.3	54.9	12.3	64	頁岩	荻氏表採	完型
45	〃	82.7	51.2	12.2	70	砂質頁岩	〃	⅔存？
46	〃	61.2	41.9	7.4	25	〃	〃	½存？
47	〃	113.3	53.0	9.0	77	〃	〃	完型
48	〃	121.4	58.1	14.3	126	玄武岩	C10号土壙	〃
49	〃	128.8	73.1	14.1	132	砂岩	C－7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	〃
50	〃	110.3	89.9	13.3	190	砂質頁岩	A－2ｸﾞﾘｯﾄﾞ	〃
51	〃	90.1	53.9	14.8	65	〃	荻氏表採	〃
52	〃	129.9	74.0	14.6	148	頁岩	〃	〃
53	〃	78.9	55.8	13.2	72	チャート	〃	〃
54	〃	69.2	55.3	15.2	56	砂質頁岩	〃	〃
55	〃	93.1	88.7	19.6	177	〃	〃	〃
56	〃	53.9	49.2	10.5	34	頁岩	〃	〃
57	〃	51.2	41.8	11.2	22	砂質頁岩	C7号土器棺	〃
58	〃	62.1	38.1	13.6	29	〃	C－8ｸﾞﾘｯﾄﾞ	〃
59	〃	74.9	33.2	6.3	17	〃	B地区表採	〃
60	〃	52.8	39.5	11.2	23	〃	荻氏表採	〃
61	〃	77.6	39.3	5.5	16	〃	〃	〃
62	〃	57.3	45.7	9.5	21	〃	〃	〃
63	〃	62.3	35.8	5.1	15	〃	〃	〃
64	〃	60.5	47.4	10.5	30	〃	〃	〃
65	〃	41.0	41.9	11.5	25	〃	〃	〃
66	〃	61.3	38.9	9.4	23	〃	〃	〃
67	砥石	278.0	212.0	48.0	4,250	安山岩系	〃	〃
68	〃	69.6	31.0	9.7	29	チャート	〃	〃
69	〃	79.3	26.4	18.8	51	〃	B地区表採	〃
70	〃	76.2	18.8	12.5	25	頁岩	荻氏表採	〃
71	磨石	106.8	99.3	70.8	1,295	砂岩	B6号土壙	〃
72	〃	(49.7)	(46.0)	(46.4)	(176)	〃	A－7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	¼～⅕存
73	石鏃	27.8	15.1	7.3	2.9	黒曜石	荻氏表採	〃
74	〃	25.1	14.8	4.0	1.2	チャート	A－2ｸﾞﾘｯﾄﾞ	一部欠
75	〃	(16.5)	20.7	2.1	(0.75)	頁岩	A地区表採	½存
76	〃	(35.4)	(16.3)	(3.5)	(2.0)	〃	A－6ｸﾞﾘｯﾄﾞ	¾存
77	〃	(33.2)	11.8	3.1	(1.3)	〃	D－11ｸﾞﾘｯﾄﾞ	先端部欠
78	〃	22.0	(11.6)	2.9	(0.6)	〃	A5号土壙	〃
79	〃	(15.5)	11.9	2.4	(0.5)	頁岩	C地区表採	〃
80	〃	(10.8)	11.4	2.7	(0.35)	黒曜石	A－7ｸﾞﾘｯﾄﾞ	〃
81	〃	(15.8)	(12.8)	2.5	(0.5)	頁岩	A1号土壙	基部片欠
82	〃	31.0	21.5	3.3	2.3	〃	A－6ｸﾞﾘｯﾄﾞ	完型
83	〃	(27.8)	30.1	1.7	(1.8)	粘板岩	A地区表採	先端部欠
84	〃	(14.9)	14.5	2.9	(0.5)	黒曜石	C12号住居跡中区	〃
85	〃	24.8	16.7	3.5	1.3	頁岩	A－3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	完型



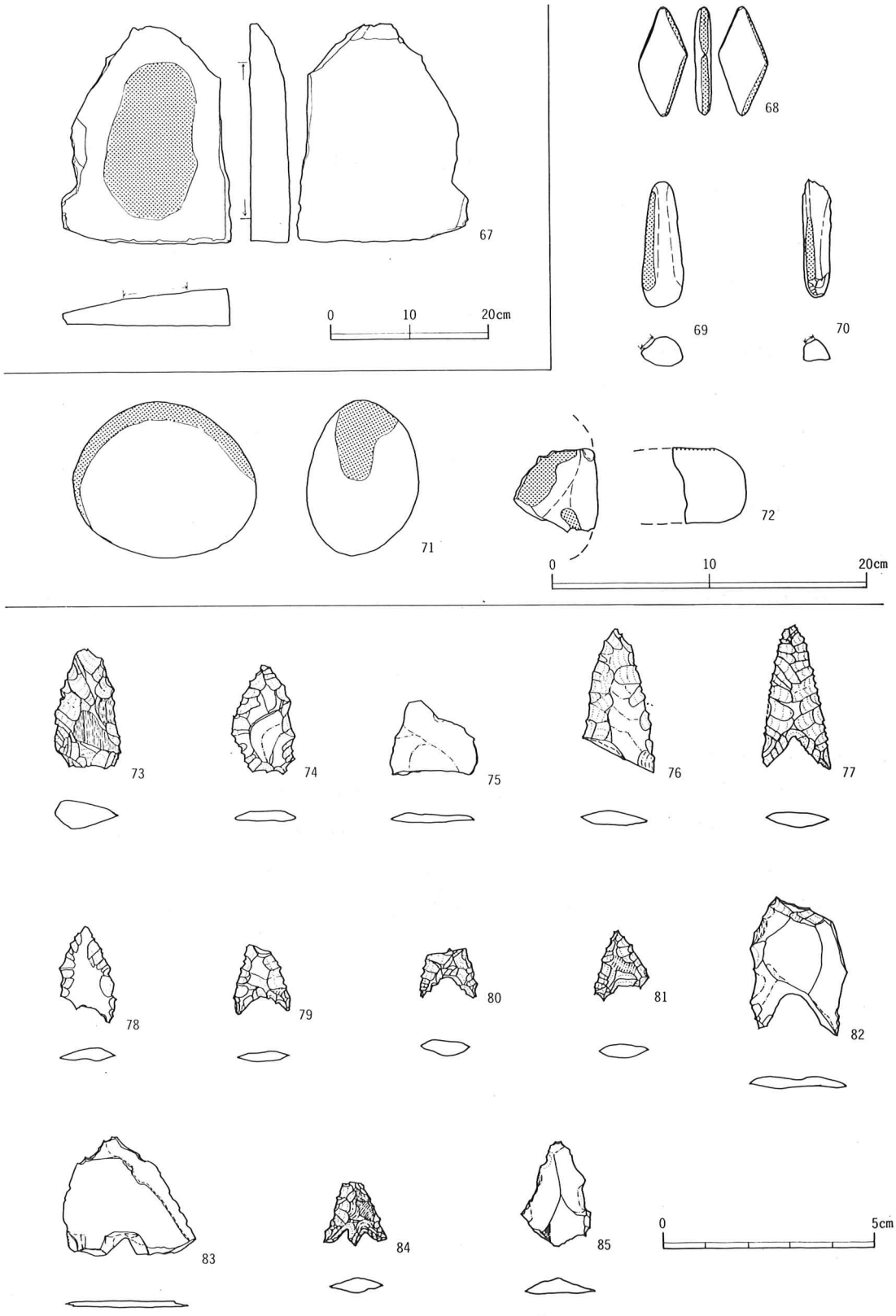
第31図　石器実測図①


12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10
20cm

第32図　石器実測図②


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
10
20cm

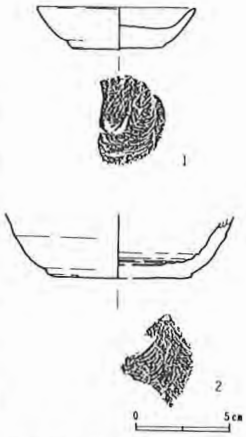
第33図　石器実測図③



第34図　石器実測図④

3．その他（第35図、図版22）

荻氏表採資料の中に中世以降のカワラケが見られるので紹介する。1は、口径8.6cm、底径4.8cm、器高 2.3cmを計るもので、厚手の底部からやや内彎気味に立ち上がるものである。底部には回転糸切りの痕が見られる。色調は橙色で、胎土は非常にきめの細かいものである。焼成はやや軟質である。2は、底径7.8 cm、を計る底部の破片であるが正確な器種等は不明なものである。平底の底部から内彎しながら胴部へ展開する器形を呈する。内面の底部にはロクロ成形痕を顕著に残している。また、底部外面には回転糸切りの痕がみられる。色調は褐色で、胎土は緻密で少量の砂粒を含む。焼成は硬質である。



第35図その他の遺物

1は、その器形より15世紀前後の所産かと考えられる。今回の調査において当該期の遺構の検出は見ていないが、市内元城町付近に位置していたとされる大宮城との関連を考えると非常に興味深い資料と言える。

上記の資料のほかに近世陶器片が少量確認されている。

・C12号遺物集中区 No. 3土器にみられる特異な文様について（図版22、第24図、図版11）

図版22でみられる文様（絵画？）は、壺形土器の胴部上半にＬＲの縄文が施文された後に棒状工具によって描かれたものである。大きさは横4.0cm縦3.0cmを測り、上方向に彎曲する線と下方向に延びる3本の直線によって構成されている。文様は非常に抽象的なもので積極的に絵画とは認め難いが、絵画とすれば簡略化された四足獣になる可能性が考えられる。

この文様の描かれている壺形土器は、関東（北関東）地方にその系譜が求められるものであり、弥生時代中期初頭期に比定されるものである。関東～東海地方において当該期のこのような資料を管見では見い出せなくその様相については不明確である。文様の一部として捉えるか、絵画あるいは記号として捉えるか、今後周辺を中心とした地域の資料の増加を待って検討していきたい。

（山上）

Ⅴ　調査総括

1　渋沢遺跡の土器について

渋沢遺跡は、かって多くの報告書や論文で丸子式土器の標準的な資料であるとして扱われてきたが、今回の調査で、樫王式（大洞Ａ式）から丸子式併行期まで続く複合遺跡であることが判明した。また、丸子式土器の標式遺跡である静岡市丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡とは、第Ⅲ期(丸子式併行期)において共通する部分が多く認められるものの相違する部分も多く認められた。それは、丸子式土器と相関関係を持ちながら地域差を表出していることを物語っていることも判明した。

本遺跡で設定した第Ⅲ期は渋沢遺跡の主体を占める時期で遺物の絶対量も多い。静岡県東部地方において当該期の遺跡の発見例はまだ少なく、資料の蓄積が充分なされているわけではない。そのため丸子式土器の内容については不明な点が多く残されている。渋沢遺跡の資料は静岡県東部地方の弥生時代中期初頭の様相がある程度把握できるものであると考えている。静岡市に所在する丸子セイゾウ山遺跡、佐渡遺跡の資料を基準としている丸子式土器の名を安易に東部地方全ての地域で使うことは地域色の表出を弱めてしまうことになり、また、それらは丸子式土器の名前ばかりが一人歩きし、、その内容についての詳細な研究がなされないような状況を生み出す恐れがある。本遺跡における分類でも、多く丸子式土器と共通する要素が見られるが、壺口縁Ⅱｄ－２、甕口縁Ⅲとそれに関連する甕Ｃ、更に壺Ｃ、甕Ｄ[1] といった相違点も多く見られる。系統が不明確な壺口縁Ⅱｄ－2 以外の、中部高地の関連が考えられる甕Ｃ(甕口縁Ⅲ)、北関東地方との関連が考えられる壺Ｃ、甕Ｄ[1] に、水神平式土器の影響下に成立した丸子式土器が融合した状況を渋沢遺跡では捉えることができる。渋沢遺跡での遺物出土状況はけっして良好なものとは言えないが、上記のことから仮称「渋沢式土器」を提唱したい。そしてその時期を丸子式併行期とし、分布範囲は、調査例のない伊豆半島西海岸部を除いた静岡県東部地方、堂山遺跡の所在する神奈川県西部地方の山間部、伊豆諸島の一部(大島、新島)、山梨県の富士五湖周辺及び桂川流域辺りまでをその広がりとして捉えたい。

第Ⅰ期、第Ⅱ期においては、別所遺跡を含めて富士川町山王遺跡との連続性が認められたことが重要な成果と言える。現在、富士市内に当該期の遺跡の発見が見られないという事実を考え合わせ、その連続性は、山王遺跡の人々が富士川を北上し、さらに沼久保谷を通り、安居山の別所遺跡や淀師の渋沢遺跡へ移動したことが想定できるものである。、山王遺跡付近には、沖積地が少なく、水田の可耕地は非常に限定されたものであっただろうと考えられる。さらに富士川対岸の現在の富士市松岡付近にそれを求めた場合でも、江戸時代前半に古郡孫太夫重高らによって築かれた雁堤の存在からもわかるように安定した沖積地とは言い難く、また、山王遺跡の段階に高度な灌漑技術をもっていたとも考え難い。まだ山王遺跡の段階では狩猟、採集へ

の依存度が高く、遠賀川系土器の出土に見られるように弥生文化の波及が認められるものの前段階の文化の伝統を強く残しているように思われる。山王遺跡から別所遺跡、渋沢遺跡への移動は、安定した沖積地への移動であり、生業の大きな転換を示すものであろうと考えられる。

再三記述しているように、渋沢遺跡の出土資料は層位的に分層できるものではなく、また第13図－１．２ 以外共併関係のわかるものもない。渋沢遺跡の資料を３時期に分けたものの安定した時代区分と言い難いが、樫王式から丸子式の編年がまだ体系づけられていない現在、渋沢遺跡の資料の重要性を考えその提示に努め、土器の特徴や地域性が少しでも表わせれば充分であると考え試案として時期区分を行ってみた。今後、周辺地域の当該期の資料とその研究の蓄積が行われて弥生文化波及期の土器編年の体系化がなされることを期待したい。

2　土器棺墓について

土器棺墓の分布（第36図）

条痕文土器の分布圏における土器棺墓は、三河地方を主体として浜名湖西岸までの地域で数多く確認されている（斎藤1978、湖西市教育委員会1980）。丸子式土器の分布範囲では浜松市半田山遺跡、掛川市原川遺跡に見られる。半田山遺跡は浜松市半田町大地他に所在する古墳時代後期のＡ～Ｈまでの小支群にグルーピングされる群集墳を中心とした遺跡群で、Ｃ支群を中心とした地区に弥生時代中期前葉の遺構が確認されている。遺構に関する報告書が未刊であるため詳細な内容は不明であるが、土器棺墓、土壙等が存在するようである。遺物が公表されている１号土器棺は、完型の壺形土器と小破片の甕形土器により構成されている（浜松市教育委員会1986）。原川遺跡は掛川市領家字原川に所在し、原野谷川、逆川、垂木川などにより形成された沖積平野上に立地している。弥生時代中期前葉の掘立柱建物跡７棟、土器棺墓６基、土壙１基、性格不明の土坑７基、溝状遺構などが確認されている。各遺構の詳細なデーターは本報告が刊行されていないので不明であるが、土器棺墓は、深鉢（甕）形土器の合せ口のもの、深鉢（甕）形土器を大きく何分割かしてそれを土壙の上からかぶせるもの（単棺）、破片化した深鉢（甕）形土器を身（棺の底部）と蓋にするもの（単棺）、破片化した壺形土器を身（棺の底部）とし同様の深鉢（甕）形土器を蓋にするものなど埋葬の方法にバラエティーが見られ、特異な様相を呈している（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所1984～1987）。

静岡県東部地方においては、富士宮市渋沢遺跡が初例であり、現在のところ他に類例は見られない。

土器棺墓の形態

土器棺墓の形態を静岡県内の諸例を中心として分類する。土器棺墓の分類はその埋葬法の分類として湖西市埋蔵文化財発掘調査概報（昭和54年度）の報文中で試みられており、その成果を引用して考えてみたい。

遺体を埋葬する際の棺（土器棺）の数によって大きく２つに分類される。

Ⅰ類、単葬

Ⅱ類、複葬（２個体以上の土器棺によって構成される。）

Ⅱ類の明確な類例は県内において見い出せない。

Ⅰ類は、土器棺による器種構成によって更に３つに分けられる。

Ⅰ－Ａ　壺棺

Ⅰ－Ｂ　甕館

Ⅰ－Ｃ　壺＋甕棺

上記のⅠ－Ａ～Ⅰ－Ｃは埋葬の形態により更に細分される。

Ⅰ－Ａａ　壺形土器の単棺。浜松市半田山遺跡１号土器棺、湖西市伊賀谷遺跡第１号土壙の類例がこのタイプになろうか。三河地方には普遍的に見られるものである。また、県内においては弥生時代中期中葉以降盛行するタイプである。

Ⅰ－Ａｂ　身蓋とも壺形土器。身となる壺形土器に別の個体の破片の壺形土器を蓋として被せるものが多い。時期的には新しくなるが、湖西市横枕遺跡第３号土器棺のように、身の壺形土器の口縁部に別の小型壺形土器を、入れ子状にして蓋としているものもある。

Ⅰ－Ｂａ　甕形土器の単棺。縄文時代晩期にその系譜が辿れるタイプで、渋沢遺跡Ｃ－８号土器棺墓、掛川市原川遺跡ＳＦ1101、ＳＦ702 、ＳＦ1102、などがその類例である。Ⅰ－Ｂａは渋沢遺跡Ｃ－８号土器棺墓のように底部を欠損した完型の甕形土器を使うものや原川遺跡ＳＦ1101のように破片化した同一個体の甕形土器を遺体（遺骨）対してサンドウイッチ状に包み込むものなどバラエティーが認められ、さらに細分が可能である。

Ⅰ－Ｂｂ　身蓋とも甕形土器。基本的には２個体の甕形土器を身と蓋にしているもので、掛川市原川遺跡ＳＦ806 のように同大、同形の甕形土器の合せ口のものもこのタイプと考える。縄文時代晩期にその系譜が辿れる。

Ⅰ－Ｃ　身を壺形土器、蓋を甕形土器で構成されるもので、蓋は破片化した甕形土器が使われる。Ⅰ－Ｃはこのタイプしか認められないようである。渋沢遺跡Ｃ－７号土器棺墓、掛川市原川遺跡ＳＦ1105などがその類例になるが、原川遺跡ＳＦ1105は若干特異な形態を示し、破片化した壺形土器を身にし、破片化した甕形土器を蓋としている。Ⅰ－Ｃは後続する時期に盛行するもので浜名湖周辺に散見されるようになる。

渋沢遺跡の類例はＣ－７号土器棺墓がⅠ－Ｃタイプ、Ｃ－８号土器棺墓がⅠ－Ｂａタイプになる。また、市史掲載資料は、Ⅱ類、あるいはⅠ－Ａ類、Ⅰ－Ｃ類になる可能性が強い壺形土器が多く含まれるようであるが、Ⅱ類の類例が当地方において見られない現在、Ⅰ－Ａ類、Ⅰ－Ｃ類と捉えておいた方が妥当なのかもしれない。

土器棺墓は雄踏町長者平遺跡の合口甕棺のようにその系譜が縄文時代晩期に辿れるものであ

るが、弥生時代中期前葉になると甕形土器から壺形土器への器種の交代が行われる。渋沢遺跡や原川遺跡のように前時代の遺風を残し甕形土器による土器棺墓を採用している類例も見られるが三河地方を中心とした条痕土器の主体的に分布する地域では壺棺への転換がスムーズに行われたようである。つまり縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前葉は、土器棺墓が、Ⅰ－B類からⅠ－A類、Ⅰ－C類へ転換した時期であると捉えることができる。渋沢遺跡においては、C－8号土器棺墓からC－7号土器棺墓への変化として表出している。このことについて林原利明氏は、壺形土器を種籾を主とする穀物の貯蔵をその機能と規定し、穀物を再生産する種籾を貯蔵する機能を有する壺形土器に当時の人々は、再生産願望を込めて遺骨を埋納したのではないかと考え、農耕文化との密接な関係を指摘されて、土器棺の壺形土器への転換を捉えられている(林原1985)。林原氏は関東地方を中心とした再葬墓の性格として上記の論旨を述べられているが、それは、東海地方の墓制にも適応できるものであると考えられる。条痕文土器の文化圏においても弥生時代中期前葉では、三河地方～天竜川まではⅠ－A類、Ⅰ－C類がほとんどであるのに対し天竜川～駿河地方ではⅠ－B類、Ⅰ－C類が混在する状況を呈している。それは農耕文化の安定度の差に起因しているもので、西日本から伝播した農耕文化の定着の差が墓制に表われた結果と捉えられ、天竜川周辺を境に東側の地域では墓制の上で古い様相が弥生時代中期前葉まで遺存する状況が強く看取される。

第36図　渋沢遺跡周辺の土器棺墓

当地方の土器棺墓について以上のように大まかではあるがその分類と地域性について若干の考察を行ってみたが、実際は再三指摘しているようにその類例が少なく、まだ考察を加える段階ではないのかもしれないのが現状である。今後、資料の増加を待って土器棺墓の体系的な分類と再葬墓としての葬制を含めた葬送儀礼の問題、さらに、それに伴う社会構造の問題などを検討していく必要がある。

(山上)

3　石器について

渋沢遺跡の遺物は基本層序第Ⅲ・Ⅳ層中より出土するが、両層の分化について、時期差を認め得ないことは遺物の出土状況（第11・12図）により明らかである。よって、石器も出土土器と同様、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭（丸子式）の一括遺物として把握でき得るも

のと考え、石器についての二、三の問題点を整理してみたい。

石器組成について

本遺跡出土の石器は総数85点であった。その内訳をみると、磨製石斧２点（２％）、打製石斧35点（41％）、環状石斧１点（１％）、磨製石庖丁１点（１％）、横刃不定形石器29点（34％）、砥石４点（４％）、磨石２点（２％）、石鏃13点（15％）である。この数字は、本遺跡がまさしく、縄文時代から弥生時代への移行期にあることを如実に物語っているといえる。磨製石庖丁の出現は弥生時代の到来を確実に捉えつつも、一方では当地方の縄文時代晩期の代表的な遺跡である富士川町山王遺跡や、清水市天王山遺跡出土の石器群の構成とよく似て、縄文時代的な様相を強く残すものである。磨製石庖丁を除けば、弥生時代を示す重要な指標の一つである太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧等の所謂大陸系の磨製石器の出土はみられず、大型の打製石斧（石鍬）を含む打製石斧や打製石鏃の出土量が他に比して多いという傾向は地域のみならず東海地方の縄文時代晩期末葉遺跡の様相に共通するものである。このことは縄文時代晩期末葉の本地方の様相が、弥生時代中期初頭を主体とする本遺跡とは立地条件等においてほとんど差のない状況を想定させるものである。

磨製石庖丁について

本遺跡出土石器中特筆すべきは磨製石庖丁である。昭和40年前後に荻精吾氏により、畑の掘削中に発見されたものである。はじめにその形状をみると、緑泥片岩製の半折資料であるが、二つの孔の中心を石庖丁の中心と考えると、巾18㎝前後を測る。現状は内彎刃鎌型形態を示すが、使用と再研磨による相当の形状変化が考えられ、変形以前の原形態は直線刃半月形態のものと推定される。つぎにその分布をみると、縄文時代晩期後半から弥生時代中期前葉にかけての遺跡では、東海地方から西関東にかけてはほとんど類例をみず、中部高地の長野市伊勢宮遺跡や諏訪市荒神山遺跡等に類例を求めることができる（1983北武蔵古代文化研究会）。この他に、静岡県下で時期が異なるものとして、磐田市御殿、二宮遺跡の弥生時代後期の外彎刃半月形態の磨製石庖丁が出土している（1981磐田市教育委員会）。

横刃不定形石器について

本遺跡出土石器中組成比率34％を占める横刃不定形石器については、打製の石庖丁、穂摘具としての機能を考えている。縄文時代晩期末葉から弥生時代前葉にかけての遺跡についてみれば、打製の石庖丁や、それに類すると考えられる横刃型石器については、東海地方東部地域においてはほとんどみられず、東三河地方や中部高地地方に多数出土している（1985愛知考古学談話会）。その他、小型の横刃型剝片石器については今後の資料の増加を待ちたい。　（渡井）

4　おわりに

渋沢遺跡発掘調査報告書の刊行にあたり、諸般の事情からそれが大幅に遅れてしまったことを、まずもってお詫びする次第である。その間に、時代は昭和から平成へと静かに、そして厳かに移り進み、両時代にまたがる記録保存の措置となってしまったが、渋沢遺跡が存在したであろう時代背景を考え合わせると感慨深いものがある。

おわりにあたって、再度、渋沢遺跡発掘調査及び出土遺物物の整理作業から得られた成果についてみる、

土器棺墓の発見から墓域と認められたこと
本遺跡が縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の所産であること
東海地方の影響を受けつつも、中部高地や北関東にその一部様相が許容されること
仮称「渋沢式土器」の提唱についてのこと。
磨製石庖丁と打製石鍬の出土からみる生業の複雑性についてのこと

等々多くのものが得られたと考える。それはまた、いくつかの問題点も提起しているようにも思える。今後、多くの方々のご指導、助言をいただき、地道な調査、研究を続けていきたいと考えている。

最後に報告書刊行が遅れたことを再度お詫びするとともに、調査から刊行までに、ご協力をいただいた、現場作業員、整理作業員の方々、遺跡の保護にご尽力下さった荻精吾氏、快く報告書刊行の一翼を担ってくれた山上英誉君に対し、厚く感謝の意を表する次第である。（渡井）

付　　編

1　荻氏表採資料について（第37～39図、図版26～29）

荻精吾氏により表採、保管されている資料は、富士宮市史掲載資料を含め整理用コンテナ５箱分程になる。本項では紙面の都合上、60点あまりの資料の提示に止める。

器種構成や文様構成の面などは、発掘調査時の資料との類似性が強く認められるがその中で数点特徴的な資料が見られるので紹介する。１は直立する鉢形土器の口縁部の破片であり、内外面、口辺部ともに横位の条痕により整形されている。樫王式土器の範中で捉えられるが当該期の鉢形土器は内面まで条痕を施す類例があまりみられない。この鉢形土器は、鉢Ｃと同時期のものであると考えられ、鉢形土器の頸部が外反する前段階のものであると捉えられる。３、４は壺口縁Ⅰｃの好例である。13は壺口縁Ⅱｃ－３で内面に緩かに孤状を呈する横線文が見られる。波状文はＡ種、Ｂ種、Ｄ種が認められ、14～17はＡ種、18はＤ種、19はＢ種に相当する。特に17は横線文と波状文によって文様を構成し、内面に横線文を施すものである。22は壺Ｃの胴部破片で、胎土が粗く石英、長石の混入の目立つものである。24のように横線文と縦線文とを組み合わせた文様帯を沈線で区画するものは発掘調査時の資料に明確な類例が見られないものであるが条痕文土器の範中で捉えられＴ字文との関係を指摘できるものであろう。30は縦位羽状文と横線文により文様も構成される大型壺の胴部破片である。大型壺の明確な類例が把握できるのは本例のみである。31は壺Ｃの胴部破片だと思われるもので横位羽状文が施文されている。43は口辺部に横位の条痕を施す甕形土器の好例である。47～49は甕Ｃの類例であるが49は頸部の外反が緩やかで外面を横位の条痕で丁寧に仕上げられており甕Ｃの中でも特異な様相を呈している。

荻氏の表採資料は、その出土状態が不明確であるため遺物相互の時代的位置づけができないものであるが、１、２のように渋沢第Ⅰ期に比定されるもの、３、４のように渋沢第Ⅱ期に比定されるものなどが見られ、さらに波状文も施文方法にバラエティーが見られるなど、時期差として捉えることができる。このように本表採資料は渋沢第Ⅲ期が主体となるものの、第Ⅰ、Ⅱ期の類例も認めら、れある程度の時間幅の中で捉えることができる。

2　別所遺跡の資料（図40図、図版30）

第40図は、渋沢遺跡の南方２kmあまりの潤井川右岸に位置する別所遺跡の表採資料である。

１は富士川町山王遺跡に多く見られる氷Ⅰ式系の鉢形土器の口縁部破片で、渋沢遺跡の第Ⅳ群－鉢Ａに相当する。２は、浮線網状文の施される鉢形土器で氷Ⅰ式土器の中に多く見られる。３は、器厚の厚い壺形土器の頸部破片で外面を横位の条痕で整形した後に文様Ⅲを施文してい

る。4は文様Ⅱと文様Ⅲが施された壺形土器の破片である。5～11は横位、斜位の条痕により整形されている破片である。5は富士川町山王遺跡出土の水神平式土器と胎土が非常に類似している。12～17縦位は、斜位の条痕が施されている。15は巾の狭い条痕が部分的に見られるもので特異な様相を呈している。

以上が別所遺跡表採の資料の概略であるが、1、2の資料は特に注目される。1は、渋沢遺跡の第Ⅰ期に比定される資料で、1の類例が主体的に出土している富士川山王遺跡との関連が強く認められる。2は、本市で初見の資料であり、山王遺跡においてD地点第Ⅰ類土器として分類されたもので氷Ⅰ式土器に比定されているものである。1、2の資料を見るかぎりでは別所遺跡が渋沢遺跡とほぼ同時期の開始が伺える遺跡であることがわかり、弥生時代中期初頭にかけて同じような展開を示した遺跡である可能性も考えられる。更に筆を進めてしまえば、墓域である渋沢遺跡に対して潤井川を挟んで対岸に位置する別所遺跡が大中里湧水群や淀師湧水群を利用した水田耕作を行った集落であった可能性も考えられる。

3　押出遺跡の資料（第41図、図版30）

国指定の天然記念物である万野風穴の入口部に広がる押出遺跡は、潤井川の支流である風祭川右岸に位置している。

18～31は条痕文土器、31は縄文が施文されるものである。25は壺口縁Ⅰａの範疇で捉えられるものと考えられるが渋沢遺跡では見られない形態をしている。26、27は縦位羽状文もしくは斜線文と横線文の組み合せによって構成される文様が施文されているもので丸子式土器の中に普遍的に存在するものである。32はＬＲの縄文を施文しているものであるが第28図－121 の渋沢遺跡の資料と類似している。

26、27の文様構成を指標として押出遺跡は渋沢遺跡の主体的な時期である第Ⅲ期に比定できる。同じ河川の流域に3㎞あまりの距離を隔てて位置する両遺跡は渋沢遺跡第Ⅲ期に段階において強い関連性が認められる。水田可耕地のほとんどで認められない山間部に位置する押出遺跡の周辺まで集落を展開させていることは、当時の生業を考える上で非常に興味深いものと言える。

（山上）

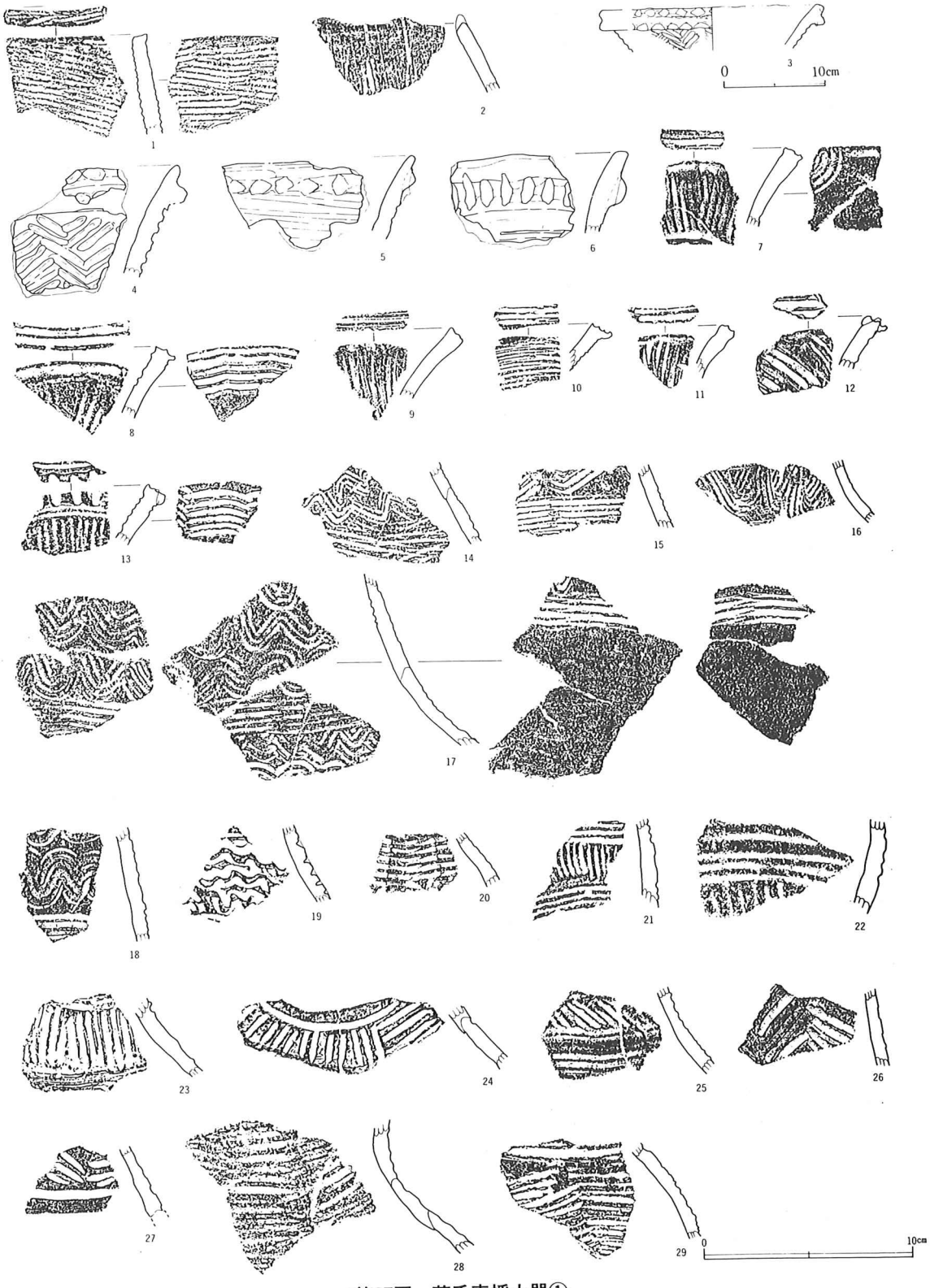
第11表　荻氏表採資料　土器観察表

番号	器形	部位	整形・施文の特徴	焼成	胎土	色調	備考
1	鉢	口縁部	内外面・口辺部　横位の条痕	普	石英・長石・小石	橙色	内外面・口辺部赤彩・樫王式～水神平式
2	鉢	口縁部	鉢Ｂ　外面は縦位の条痕	普	石英・長石多 砂少	外　黒褐色 内　褐灰色	
3	壺	口縁部	壺口縁Ⅰｃ－１　指頭による押圧文を施す　外面は縦位羽状文	普	石英・金雲母	外　褐色 内　暗褐色	
4	壺	口縁部	壺口縁Ⅰｃ－１　指頭による押圧文を施す　外面は縦位羽状文	普	石英・金雲母	褐色	
5	壺	口縁部	壺口縁Ⅰｂ－１　外面は横位の条痕	普	石英・長石少 金雲母	外　暗赤褐色 内　赤褐色	
6	壺	口縁部	壺口縁Ⅰｂ－１　外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外　褐色 内　赤褐色	

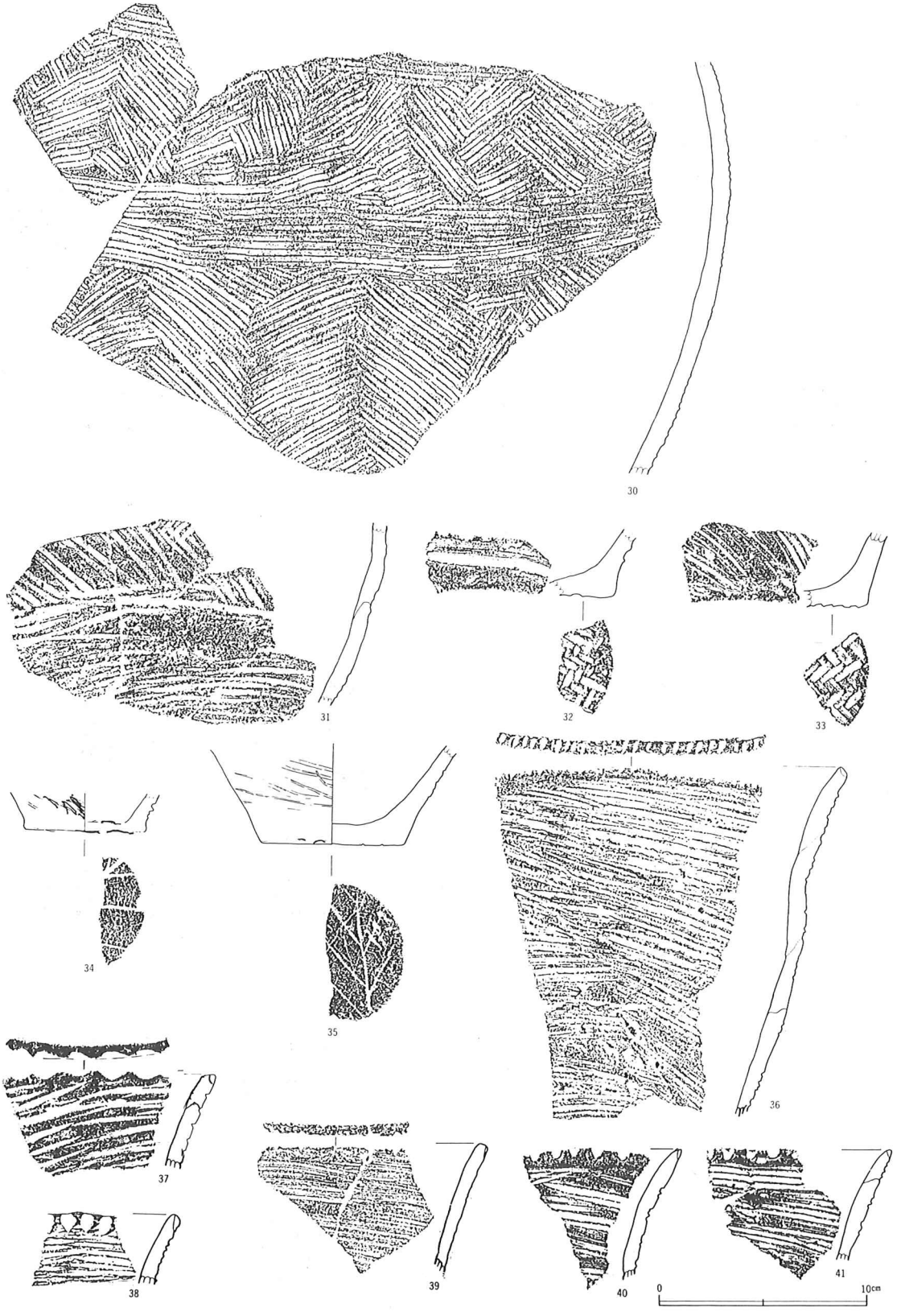
7	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－１　外面は縦線文＋横線 内面は孤文	やや悪い	石英・長石・砂	灰白色	
8	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－１　外面は縦位の条痕 内面は横線文	普	石英・長石・砂	にぶい黄橙色	
9	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－１　外面は縦位の条痕	普	石英少・長石少 砂少	にぶい黄橙色	口辺部～内面 赤彩
10	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－１　外面は横位の条痕	普	石英少・長石多	外　にぶい黄橙色 内　にぶい赤褐色	
11	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－１　外面は縦位の条痕	普	石英微・長石少・砂	にぶい橙色	
12	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－２　外面は斜位の条痕	普	石英・砂少	にぶい橙色	
13	壺	口縁部	壺口縁Ⅱｃ－３　外面は横線＋縦線文 （縦位の条痕） 内面は緩かな孤文（横線文）	普	石英・長石	にぶい黄橙色	
14	壺	頸　部	波状文＋横位の条痕	普	石英少・長石・砂	外　にぶい褐色 内　橙色	
15	壺	頸　部	波状文＋横線文	普	石英少・長石・砂	にぶい黄橙色	
16	壺	頸　部	波状文　内面に一部横位の条痕が残る	普	石英・長石少	外　明黄褐色　内　橙色	
17	壺	頸　部	波状文＋横線文　内面　波状文＋横線文	普	石英・長石 砂・金雲母	外　にぶい赤褐色 内　赤褐色～黒褐色	
18	壺	頸部 ～胴部	波状文（孤文）+横線文	普	石英・長石	外　褐色 内　赤褐色	
19	壺	頸　部	波状文を横線で区画する	やや良い	石英少・長石微	にぶい黄橙色	
20	壺	頸　部	横線文	普	石英・長石 金雲母微	外　暗褐色 内　明褐色	
21	壺	胴　部	横線文＋縦線文	普	石英・長石・砂少	外　にぶい黄橙色 内　にぶい黄褐色	
22	壺	胴　部	横線文＋縦線文	やや悪い	石英少・長石	黒褐色	
23	壺	頸　部	横線文＋縦線文	普	石英・長石・砂	橙色	
24	壺	頸　部	沈線で区画した文様帯に縦線文と横線を 組み合わせて施文	普	石英・長石・砂少	外　暗赤褐色 内　にぶい赤褐色	
25	壺	頸　部	斜線文　横線文	悪い	石英少・長石少・砂	灰白色	
26	壺	頸　部	縦位羽状文	普	石英少・長石	外　にぶい黄橙色 内　黒褐色	
27	壺	頸部？	縦位羽状文＋横線	普	石英少・長石	暗赤褐色	
28	壺	頸　部	外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石・砂少	明黄褐色	
29	壺	肩　部	横線＋縦位羽状文？	普	石英少・長石・砂	外　灰白色 内　灰黄褐色	
30	壺	胴　部	縦位羽状文＋横線文	普	石英少・長石 砂少・金雲母	外　にぶい褐色 内　明赤褐色	外面スス付着
31	壺	胴　部	横位羽状文＋横位の条痕	普	石英・長石	黄褐色	
32		底　部	外面は横位の条痕、底面は網代痕	普	石英・長石	外　灰黄色 内　暗灰黄色	
33		底　部	外面は斜位の条痕、底面は網代痕	普	石英少・長石 金雲母	外　赤褐色 内　黒褐色	外面スス付着
34		底　部	外面は斜位の条痕、底面は木葉痕	普	石英・長石・砂少	橙色	
35		底　部	外面は横位の条痕、底面は木葉痕	普	石英・長石	外　赤褐色 内　暗褐色	
36	甕	口縁部 ～胴部	甕口縁Ⅰ－２ｂ　外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外　黄褐色 内　にぶい黄褐色	外面スス付着
37	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－１　外面は横位の条痕	やや悪い	石英・長石	外　黄灰色 内　にぶい黄色	
38	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－２ｂ　外面は横位の条痕	普	石英・長石 金雲母	外　黒褐色 内　黄褐色	
39	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－２ａ　外面は横位の条痕	普	石英・長石・砂少・金雲母少	黄褐色	
40	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－２ｂ　外面は横位の条痕	普	長石・金雲母微	外　にぶい黄色 内　暗灰黄色	
41	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－２ｂ　押圧文は半截竹管状工 具による外面は横位の条痕	普	長石少・金雲母少	外　灰色 内　オリーブ黒色	
42	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－３　外面は横位の条痕の後に 縦位の条痕を施す	普	長石・砂	外　明褐色 内　明黄褐色	
43	甕	口縁部	甕口縁Ⅰ－３　口辺部に横位の条痕を施す 外面は横位の条痕の後に縦 位の条痕を施す	良	石英少・長石	外　赤褐色 内　黒褐色	
44	甕	口縁部	甕口縁Ⅱ　外面は横位の条痕 内面に横線文を施す	普	石英少・長石	外　黒褐色 内　赤褐色	
45	甕	口縁部	甕口縁Ⅱ　外面は横位の条痕	普	石英少・長石少	外　黒褐色 内　明黄褐色	
46	甕	口縁部	甕口縁Ⅱ　外面は斜位の条痕	普	長石・砂少	外　赤褐色 内　褐色	
47	甕	口縁部	甕口縁Ⅲ　外面は横位の条痕	普	石英・長石少 砂少・金雲母少	外　赤褐色 内　褐色	
48	甕	口縁部	甕口縁Ⅲ　外面は横位の条痕	普	石英少・長石 砂少	外　黒褐色～褐色 内　褐色	
49	甕	口縁部	甕口縁Ⅲ　一部平縁にしている甕口縁Ⅲ の特異形　外面は横位の条痕	やや良い	石英・長石少・砂	外　褐色 内　明褐色	
50	甕	頸部 ～胴部	外面は横位の条痕の後斜位の条痕を施す 内面下位に横位の条痕を残す	普	石英・長石	外　暗褐色 内　にぶい黄色	内外面スス付着
51	甕	頸　部	外面は横位の条痕、上位に縦位の条痕を 間隔を開けて施す	普	長石・砂	外　明赤褐色 内　暗赤褐色	内面　赤彩
52		胴　部	外面　２条の横位の沈線＋四角文の一部？	やや悪い	石英・長石	外　黄褐色 内　褐色	
53		胴　部	外面　山形文（鋸歯文）の一部？	普	石英・砂・金雲母	外　褐色　内　橙色	
54		胴　部	外面　菱形文の一部？	普	石英・長石・砂	外　褐色 内　明褐色	

第12表　安居山別所遺跡　外神押出遺跡表採土器観察表

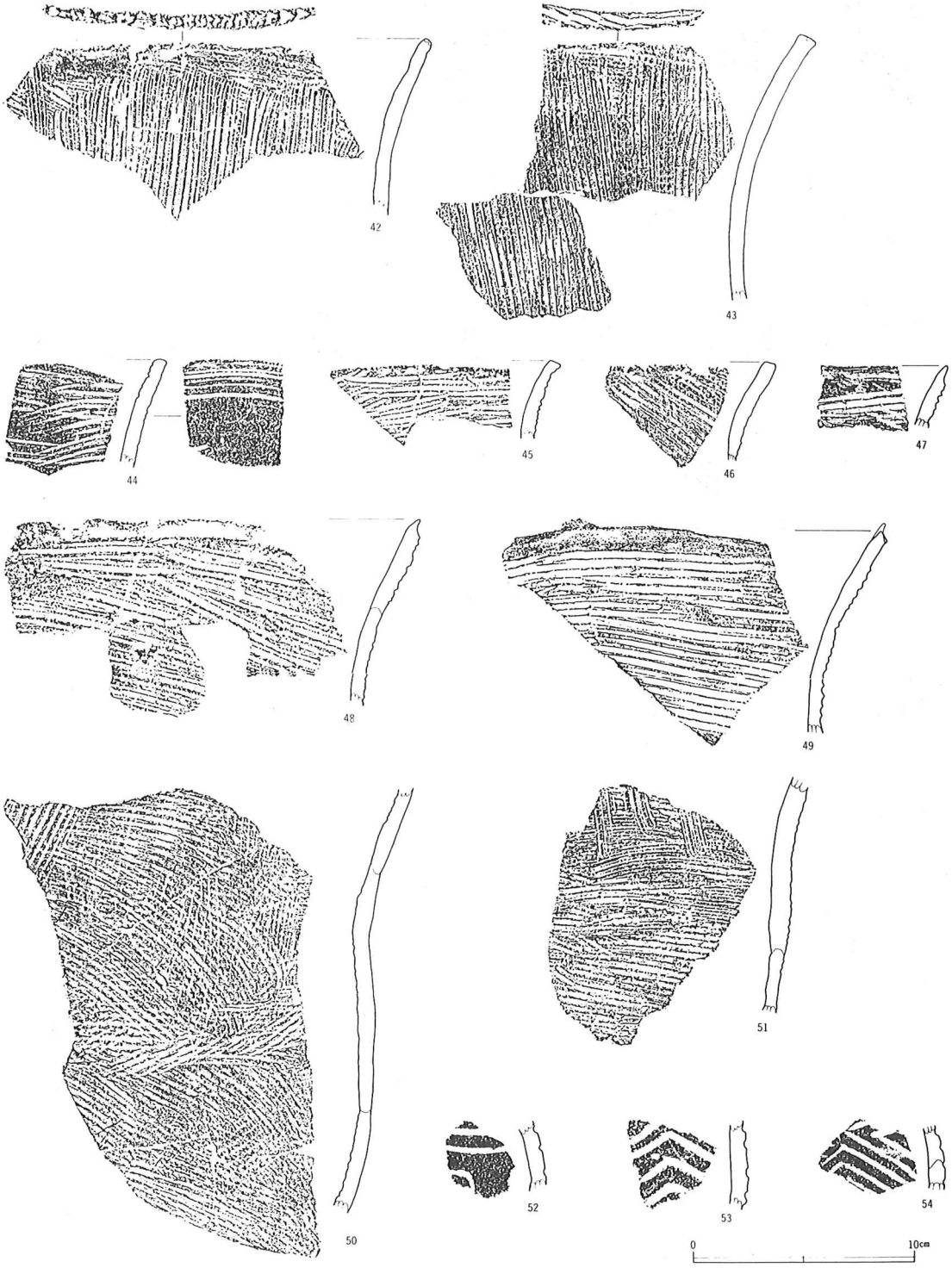
遺跡	番号	器形	部位	整形・施文の特徴	焼成	胎土	色調	備考
別所	1	鉢	口縁部	第Ⅴ群、口縁部外面に２条、内面に１条の沈線	普	石英少・長石・砂少	外　灰黄色 内　にぶい黄橙色	
	2	鉢	口縁部	浮線網状文	普	細石英微・細長石・少	にぶい黄橙色	外面赤彩
	3	壺？	頸　部	外面縦位の条痕＋斜位の条痕、内面上位に横位の条痕　下位に接合痕がみられる	普	石英少・長石 砂少・金雲母少	黒褐色	
	4	壺		外面　横線文＋縦線（縦線文）	普	石英・長石・砂	外　にぶい黄橙色 内　暗灰黄色	
	5		頸　部	外面　横位の条痕	普	粗石英・粗長石	外　にぶい褐色 内　にぶい黄橙色	
	6		頸　部	外面　横位の条痕	普	石英・長石	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	外面スス付着
	7		頸部？	外面　斜位の条痕	普	石英・長石・砂少 金雲母少	外　にぶい褐色 内　褐色	
	8		胴　部	外面　斜位、横位の条痕	普	石英少・長石	外　灰オリーブ色 内　にぶい黄褐色	
	9		胴　部	外面　横位の斜位の条痕	普	石英・長石	外　にぶい黄褐色 内　明褐色	
	10		胴　部	外面　横位の条痕の後、斜位の条痕を施す	普	石英・長石 金雲母微	外　にぶい黄褐色 内　灰オリーブ色	
	11			外面　斜位の条痕	普	石英・長石・砂礫	にぶい黄褐色	
	12		胴　部	外面　縦位の条痕 内面　斜位、縦位の条痕	普	石英少・長石 砂少		
	13		胴　部	外面　斜位の細かい条痕	普	細長石・金雲母	外　黄褐色 内　にぶい黄橙色	
	14		胴　部	外面　斜位の条痕	普	長石・砂礫	外　にぶい黄橙色 内　灰黄褐色	
	15		胴　部	外面　斜位の条痕	普	石英・長石・砂	褐　色	
	16			外面　縦位の条痕	やや悪い	長石・金雲母少	外　明赤褐色 内　にぶい赤褐色	
	17		胴部 下位？	外面斜位の粗い条痕、表面の凹凸が目立つ	普	石英・長石 砂礫	黒褐色	
押出	18	甕	頸　部	外面　横位の条痕	普	石英・細長石 金雲母少	外　黒褐色 内　にぶい黄褐色	
	19			外面　横位の条痕？	普	石英・細長石 金雲母少	外　暗赤褐色 内　明褐色	
	20		胴　部	外面斜位の条痕の後横位の条痕を施す　内外面肌あれ	普	石英少・長石 金雲母微	赤褐色	
	21		胴　部	外面　横位の条痕	悪　い	石英少・長石 砂少	外　明褐色 内　暗褐色	
	22		胴　部	外面　横位の条痕（横線文？）	普	石英少・長石 砂少・金雲母	外　暗褐色 内　褐色	
	23			外面　横位の条痕（横線文？）	普	石英・長石 金雲母	外　暗赤褐色 内　赤褐色	
	24			外面　斜位の条痕	普	長石・砂	外　明褐色 内　にぶい褐色	
	25	壺	口縁部	壺口縁Ⅰａ　外面は縦位の条痕	普	石英・長石・金雲母	褐色	
	26	壺	胴　部	横線文＋縦位羽状文？	普	粗石英・長石・砂	外　にぶい黄橙色 内　褐色	
	27	壺	胴　部	横線文＋縦位羽状文？	やや悪い	石英・長石	明黄褐色	
	28		胴　部	外面　斜位の条痕、表面の肌荒れ	普	石英少・長石・砂	外　赤褐色 内　黒褐色	外面スス付着
	29		頸　部	外面　斜位、横位の条痕	普	長石少・砂少	外　黄褐色 内　にぶい黄橙色	
	30		胴　部	外面　斜位、横位の条痕	普	長石少・砂少	外　明褐色 内　褐色	29に類似
	31		頸部？	外面　縦位の条痕	やや悪い	長石・砂少	外内　明赤褐色 器壁　褐灰色	外面スス付着
	32		胴　部	外面　縄文（ＬＲ）	悪い	石英・長石	橙色	



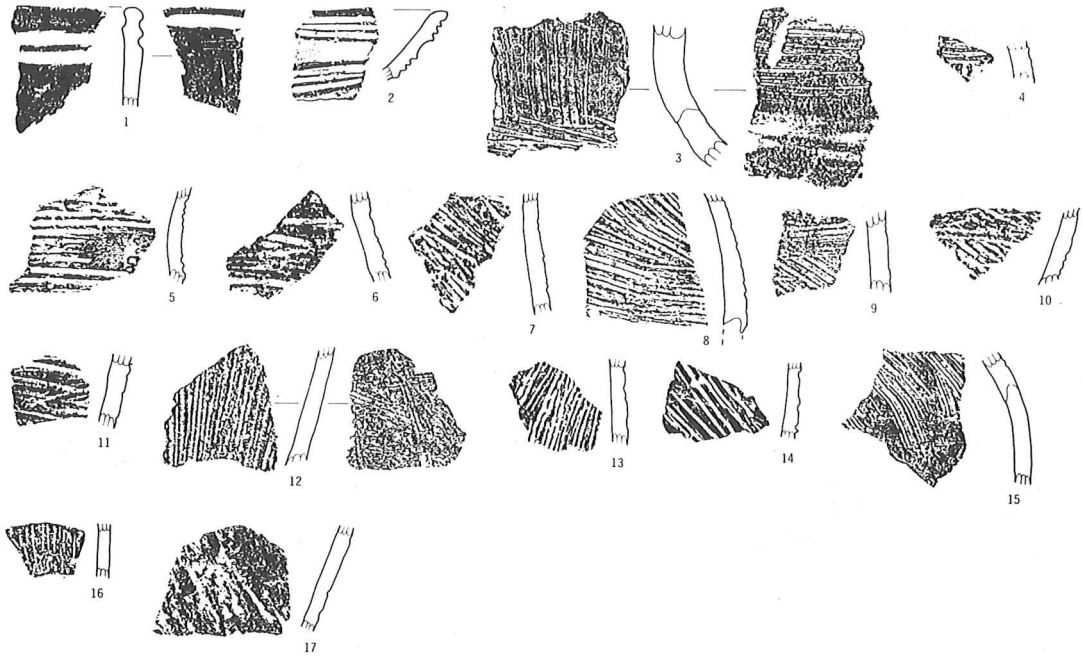
第37図　荻氏表採土器①



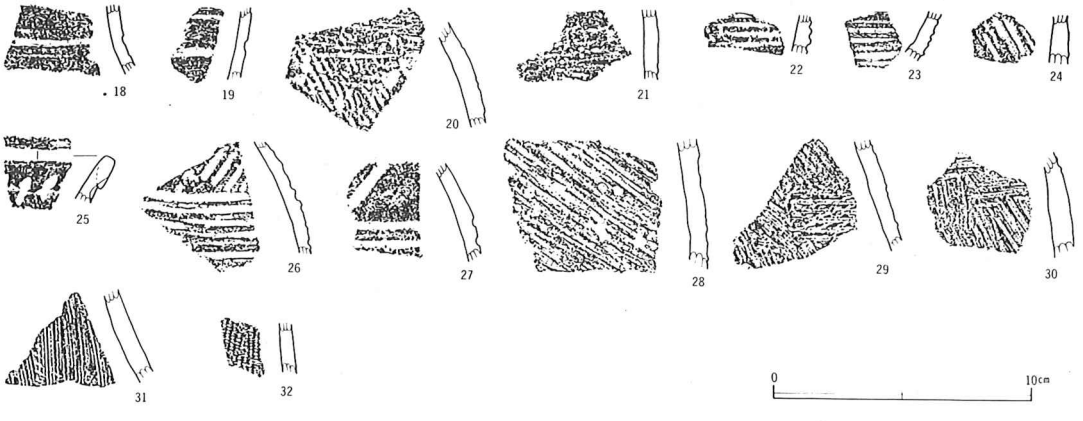
第38図　荻氏表採土器②



第39図　荻氏表採土器③



第40図　別所遺跡表採土器



第41図　押出遺跡表採土器

引用参考文献

愛知考古学談話会	1985	＜条痕文系土器＞文化をめぐる諸問題 －縄文から弥生－資料編Ⅰ	
〃	1988	＜　〃　＞　〃 －縄文から弥生－資料編Ⅱ、研究編	
石　川　日出志	1981	三河・尾張における弥生文化の成立 －水神平式土器の成立過程について－	駿台史学52
〃	1981	東海地方西部の樫王・水神平式期をめぐる問題	考古学研究28－1
石　黒　立　人	1985	＜条痕文系土器＞研究をめぐる若干の問題	マージナルNo 5
磐田市教育委員会	1974	遠江見性寺貝塚の研究	
磐田市教育委員会	1981	御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ	
植　松　章　八 平　野　吾　郎	1966	静岡県向市場遺跡出土の土器	金鈴19
植　松　章　八	1971	富士宮市史上巻第１章	
大阪文化財センター	1979	池上遺跡　第３分冊の２　石器編	
小　野　真　一	1957	静岡県東部古代文化総覧	
小　野　真　一他	1962	富士宮市渋沢遺跡出土の弥生土器 －丸子式土器の新資料－	駿豆考古第６号
神　村　　透	1985	弥生文化の研究　第５巻　道具と技術Ⅰ６－２	
河津町教育委員会	1986	姫宮遺跡発掘調査概報Ⅳ （第Ⅸ次調査）	
〃	1987	〃　Ⅵ （第Ⅺ次調査）	
神　沢　勇　一	1962	足柄上郡山北町堂山出土の弥生式土器	神奈川県文化財調査報告第27集
〃	1963	神奈川県三ケ木遺跡出土の弥生式土器	考古学集刊２－１
北武蔵古代文化研究所他	1985	第４回三県シンポジューム 東日本における黎明期の弥生土器	
北武蔵古代文化研究所他	1988	第９回三県シンポジューム 東日本の弥生墓制－再葬墓と方形周墓－	
霧ケ丘遺跡調査団	1973	霧ケ丘	
紅　村　　弘	1967	水神平式土器とその周辺	信濃19－４
小林行雄・杉原荘介	1968	弥生土器集成本編２	
湖西市教育委員会	1978	湖西運動公園内遺跡群 第３次、第４次発掘調査概報	
〃	1980	湖西市理蔵文化財発掘調査概報	
斎　藤　嘉　彦	1978	三河地方における縄文時代後、晩期と弥生時代の葬制	歴史手帖６－７
佐　藤　由紀男	1984	静岡県三ケ日町殿畑遺跡出土の土器について　－条痕紋土器の研究－	（上）古代文化36－９
〃	1985	〃 〃	（下）古代文化37－１
佐　藤　由紀男	1987	静岡市丸子セイゾウ山遺跡・佐渡遺跡出土土器の再検討	静岡県博物館協会研究紀要第10号
塩尻市教育委員会	1985	堂の前・福沢・青木沢 塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書	
静岡県	1930	静岡県史第１巻	
静岡県教育委員会	1961	静岡県遺跡地名表	
静岡県考古学会	1978	静岡県考古学会シンポジューム１ 静岡県における４～５世紀の墳墓について	

静岡県埋蔵文化財調査研究所	1984	原川遺跡 昭和58年度発掘調査概報	
〃	1985	原川遺跡 昭和59年度発掘調査概報	
〃	1985	年報Ⅰ（4、原川遺跡）	
静岡市教育委員会	1985	駿河西山遺跡	
設楽博己	1982	中部地方における弥生土器の成立過程	信濃34－4
島田市教育委員会	1982	静岡県島田市埋蔵文化財報告 山王前遺跡発掘調査概報	
清水市教育委員会	1975	清水天王山遺跡 第4次発掘調査略報	
清水市郷土研究会	1960	清水天王山遺跡 第1～第3次発掘報告	
杉山博久	1981	秦野市平沢同明遺跡の調査	第5回神奈川県遺跡調査、研究発表会発表要旨
杉原荘介	1967	群馬県岩櫃山遺跡における弥生時代の墓址	考古学集刊3－4
杉原荘介 大塚初重 小林三郎	1967	東京都（新島）田原における縄文、弥生時代の遺跡	考古学集刊3－3
杉原荘介	1987	駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器に就いて	考古学集刊1－4
駿豆考古学会	1979	駿豆地方の弥生式土器集成	
谷口肇	1987	東日本における所謂「初期弥生」文化研究の現状と課題	溯航第4号
多摩ニュータウン遺跡調査会	1979	多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅷ	
東京都大島町教育委員会	1987	大島町野増遺跡・下高洞遺跡D地区 和泉浜C地点遺跡	
中野国雄	1954	吉原周辺の原始時代（第2報）	吉原市史研究資料第2号
永峯光一	1969	氷遺跡の調査とその研究	石器時代第9号
中山誠二	1985	甲斐における弥生文化の成立	山梨県立考古博物館研究紀要2
沼津市教育委員会	1976	沼津市文化財調査報告第5集 山崎、大平丸山、高田第六天	
八王子市椚田遺跡調査会	1977	椚田遺跡群－1976年度調査概報－	
〃	1979	〃　－1978年度調査概報－	
〃	1982	神谷原Ⅲ	
浜松市教育委員会	1986	浜松市半田山遺跡（Ⅳ）発掘調査報告書	
林原利明	1985	東日本における初期弥生時代の墓制 －再葬墓について－	白山史学第21号
富士川町教育委員会	1975	駿河山王	
富士市教育委員会	1984	富士市の文化財	
富士宮市	1988	富士宮市の自然 第一次富士宮市域自然調査研究報告書	
星田享二	1967	東日本弥生時代初頭の土器と墓制 －再葬墓の研究－	史館7
町田市椙山神社北遺跡調査会	1981	町田市椙山神社北遺跡	
松井和幸	1980	中部地方における農耕社会の成立について	考古学研究27－3
三ケ日町教育委員会	1985	引佐郡三ケ日町殿畑遺跡	
向坂鋼二	1966	遠江地方を中心とした櫛描文と縄文の系譜	信濃19－1
霊山根古屋遺跡調査団	1986	霊山根古屋遺跡の研究	

図　　版

図版1　航空写真

図版第２　調査概要①

Ｄ地区試掘調査

Ｄ地区試掘調査

Ａ地区全景（撹乱状況）

Ａ地区全景（完掘状況）

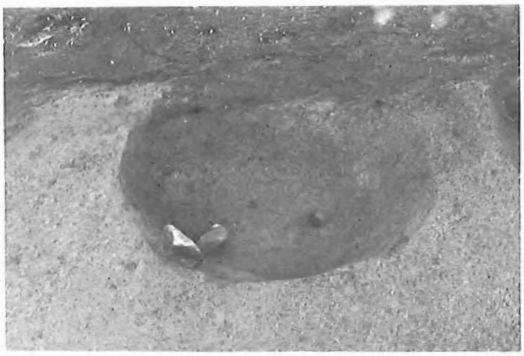
Ａ１～Ａ５号土壙

Ａ１～Ａ５号土壙（遺物出土状況）

Ａ１号土壙（遺物出土状況）

Ａ１号土壙

図版３　調査概要②

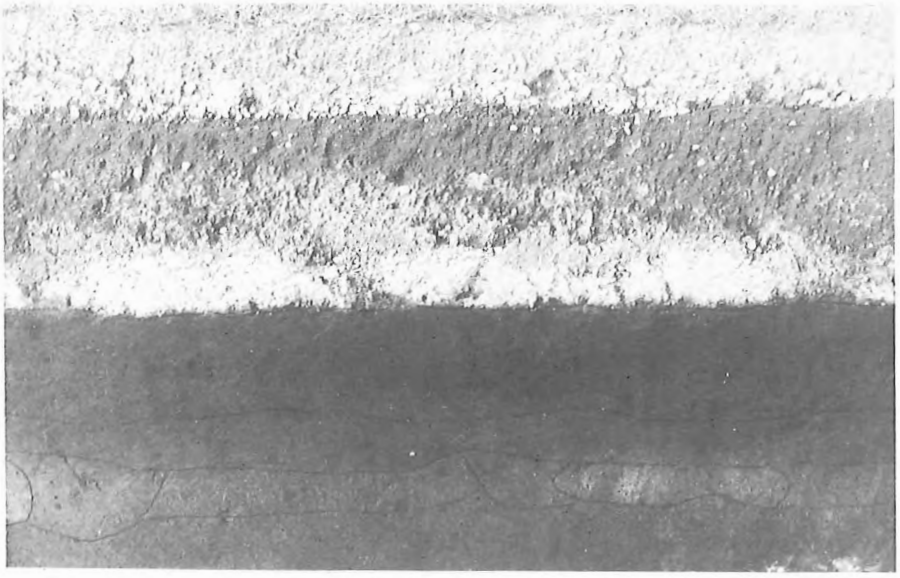


Ａ２号壙

Ａ５号土壙

大型石斧（No.3）出土状況

大型石斧（No.4）出土状況



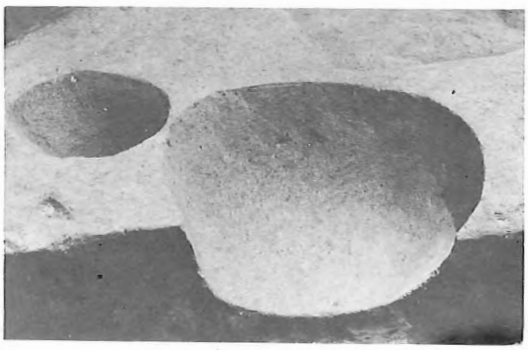
土層堆積状況（Ｃ地区東端南壁）

図版４　調査概要③

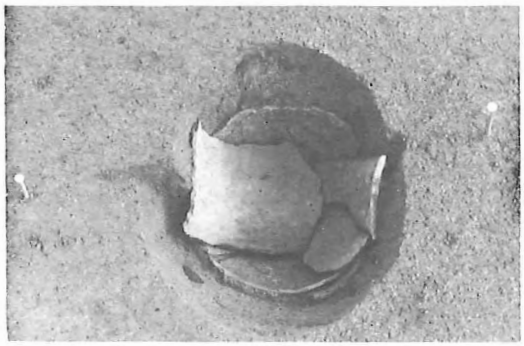
Ｂ地区全景

上新堀（南から）

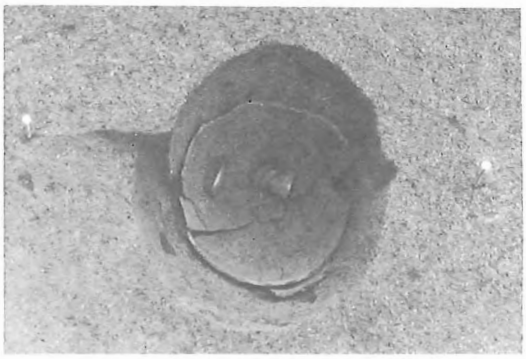
上新堀（北から）



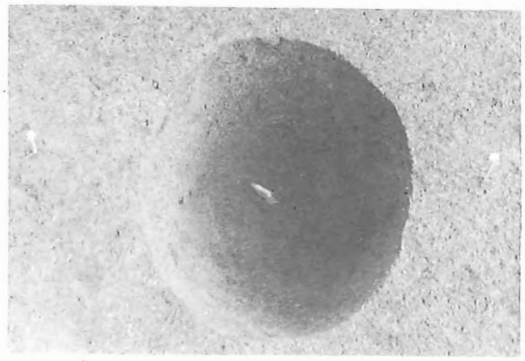
Ｂ６号土壙



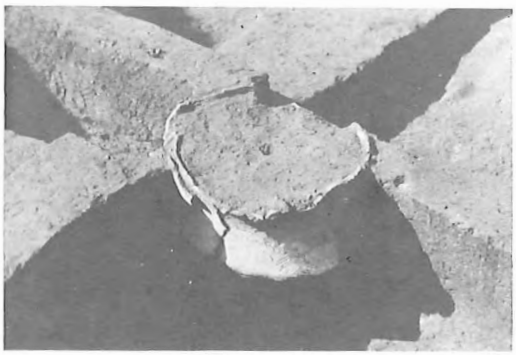
Ｃ７号土器棺墓



Ｃ７号土器棺墓



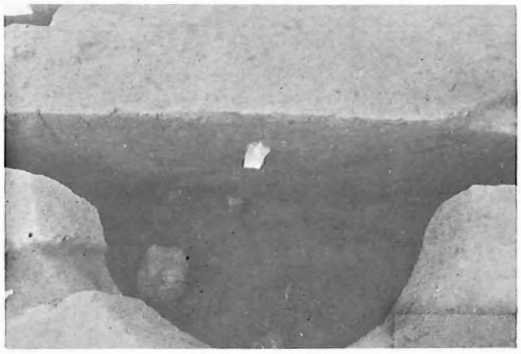
Ｃ７号土器棺墓



Ｃ８号土器棺墓

Ｃ８号土器棺墓

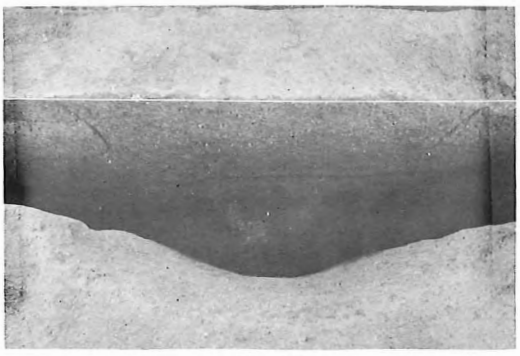
図版5　調査概要④



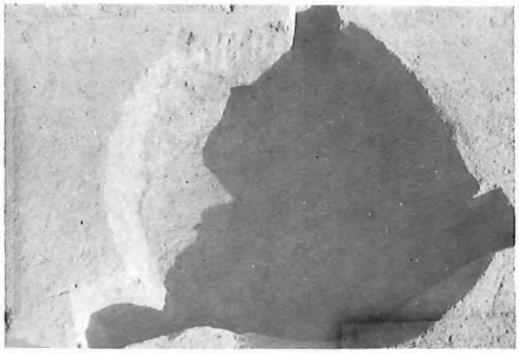
C 9 号土壙

C 9 号土壙

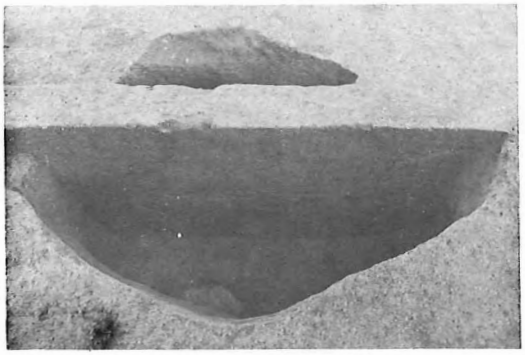
C 9 号土壙



C10号土壙

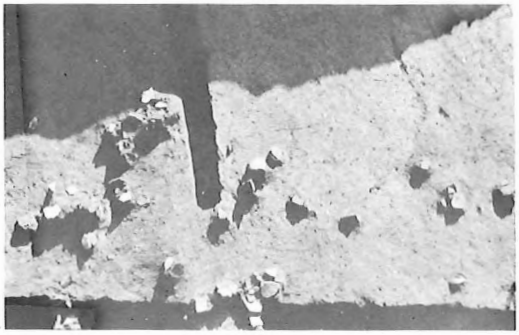


C10号土壙



C11号土壙

C12号遺物集中区



C12号遺物集中区

図版6　出土土器・富士宮市史掲載資料①

C７号土器棺墓

1

Z－７グリット調査区域外出土土器

2

C７号土器棺墓

3

C８号土器棺墓出土土器

1

富士宮市史掲載資料

C８号土器棺墓出土土器（部分）

図版 7　富士宮市史掲載資料②

2

6

4

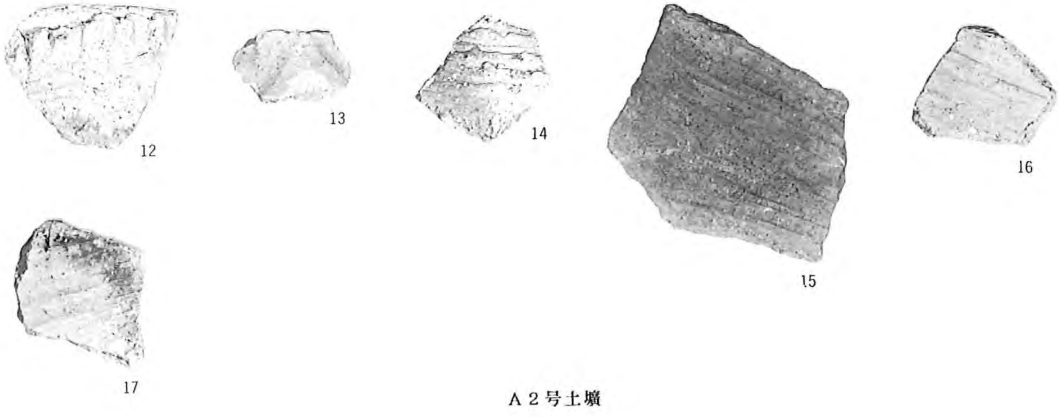
8

5

7

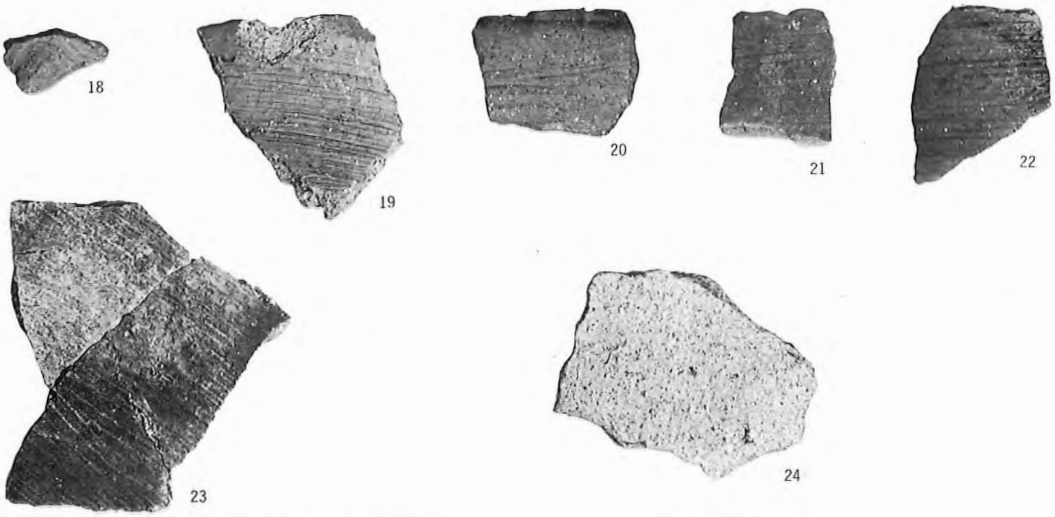
図版 8　土壙出土土器①

A 1 号土壙

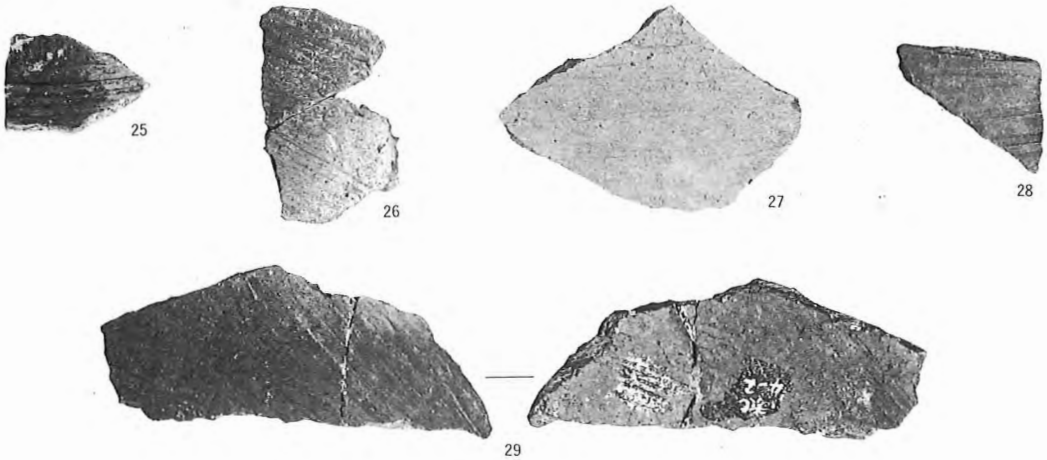


A 2 号土壙

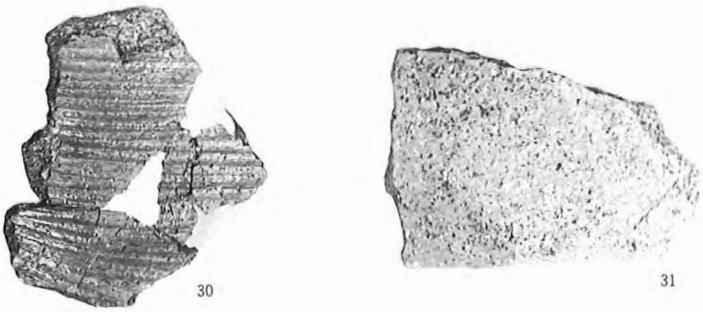
図版 9　土壙出土土器②



A３号土壙(NO.18～NO.23)　　A５号土壙

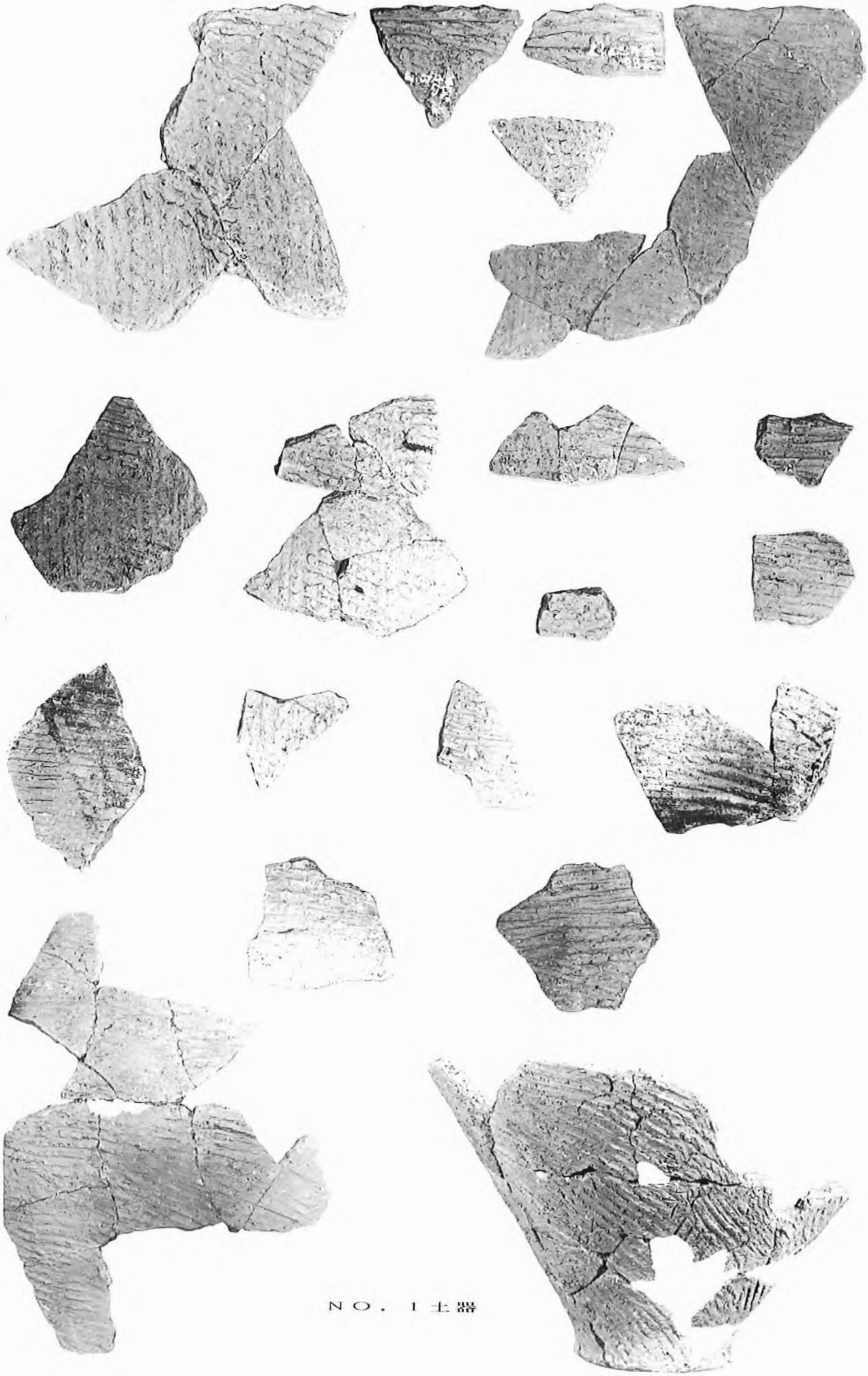


C９号土壙



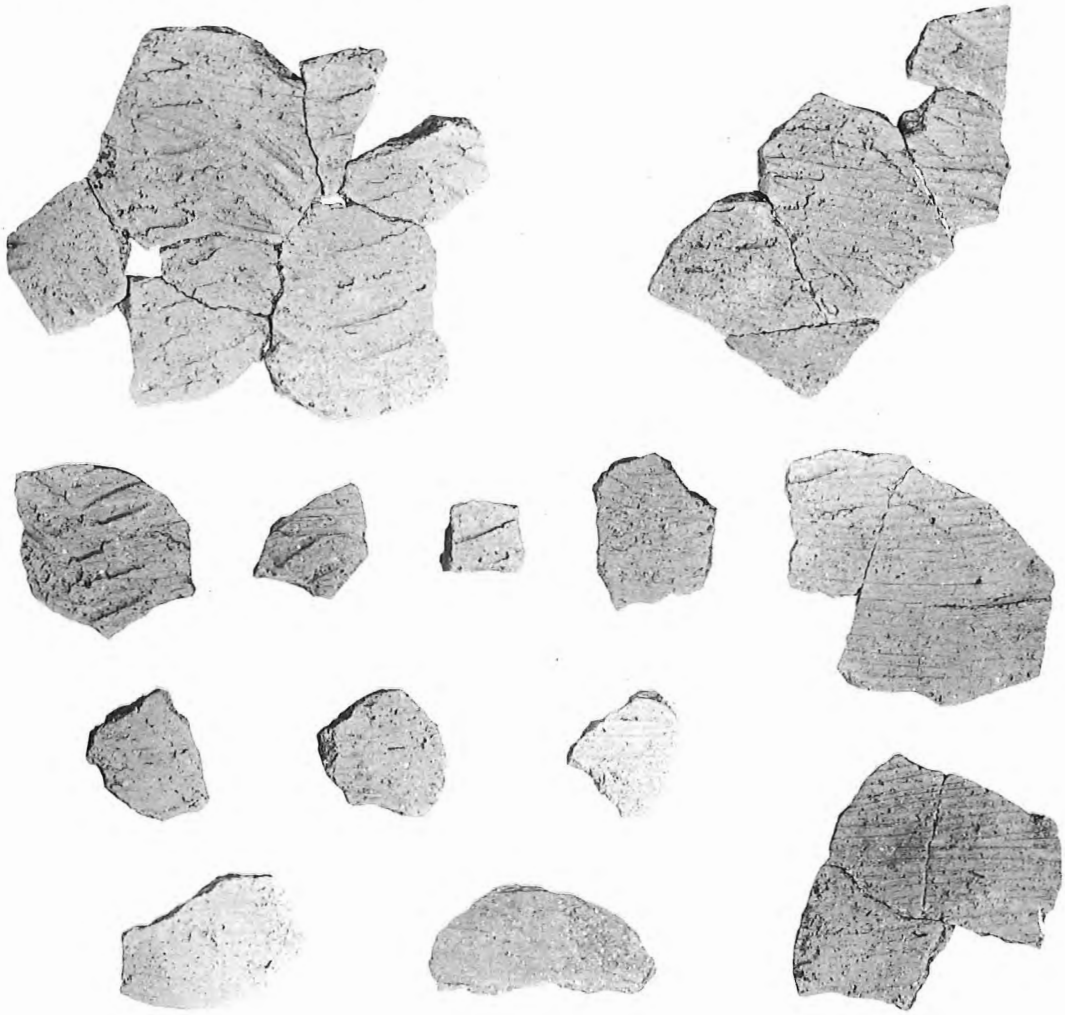
C10号土壙

図版10　C12号遺物集中区出土土器①

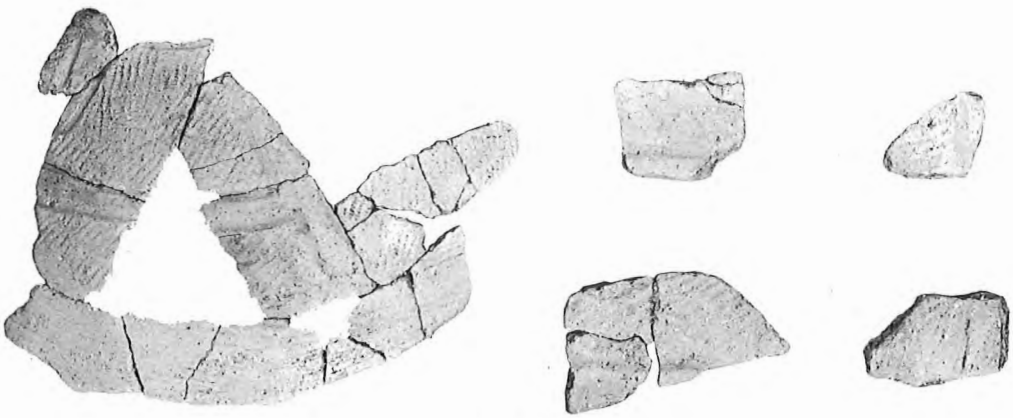


NO．1土器

図版11　C12号遺物集中区出土土器②

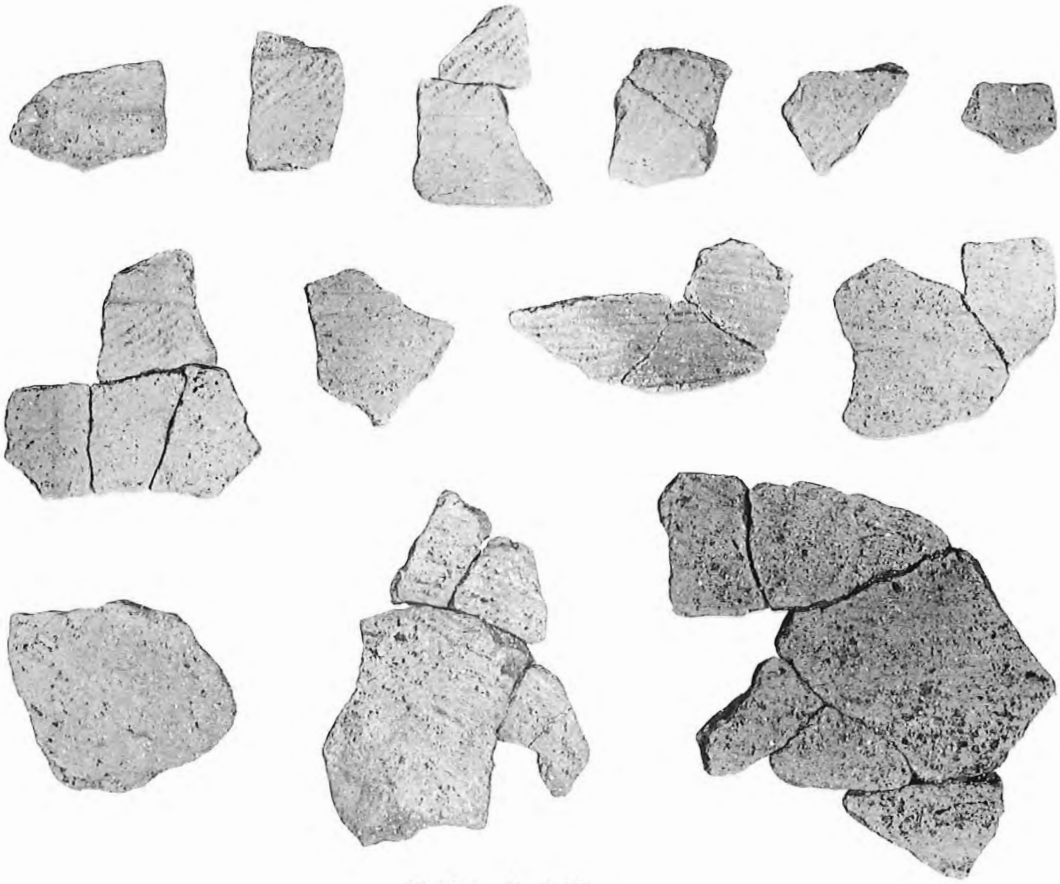


NO．2土器



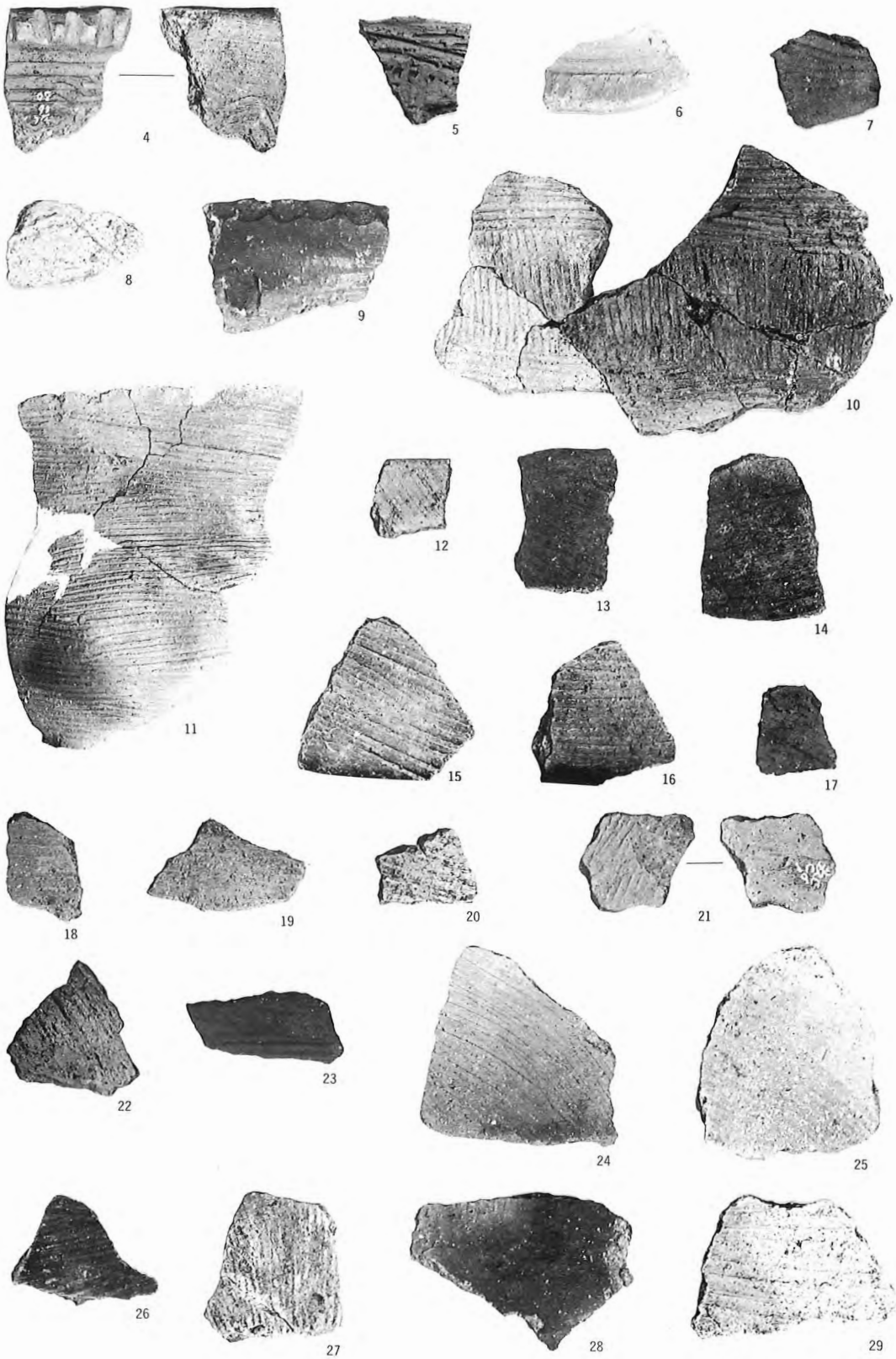
NO．3土器

図版12　C12号遺物集中区出土土器③



ＮＯ．３土器

図版13　C12号遺物集中区出土土器④



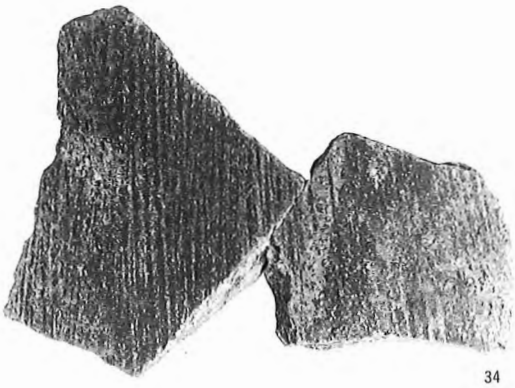
図版14　C12号遺物集中区出土土器⑤

30

31

32

33


34

35

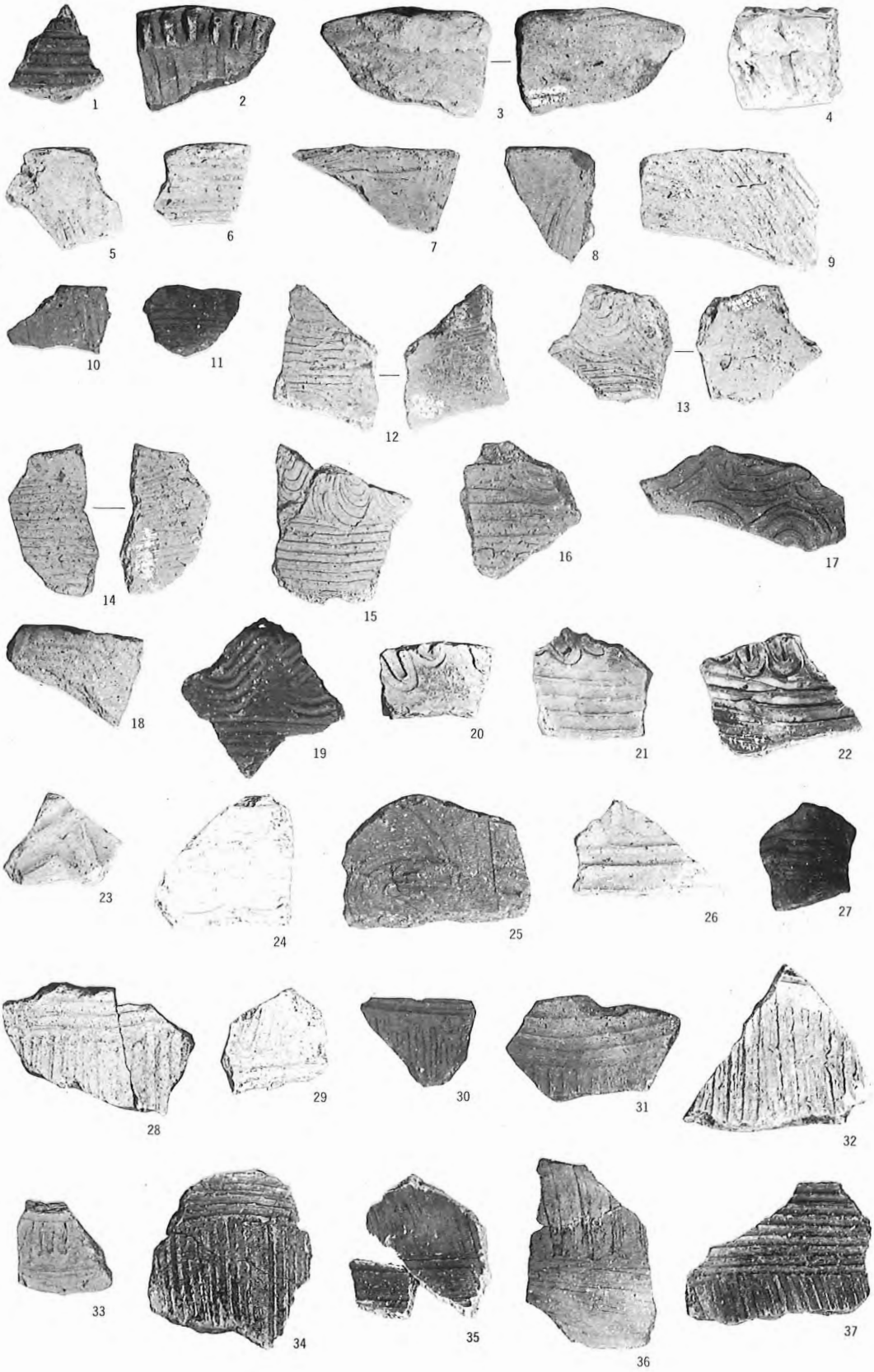
36

37

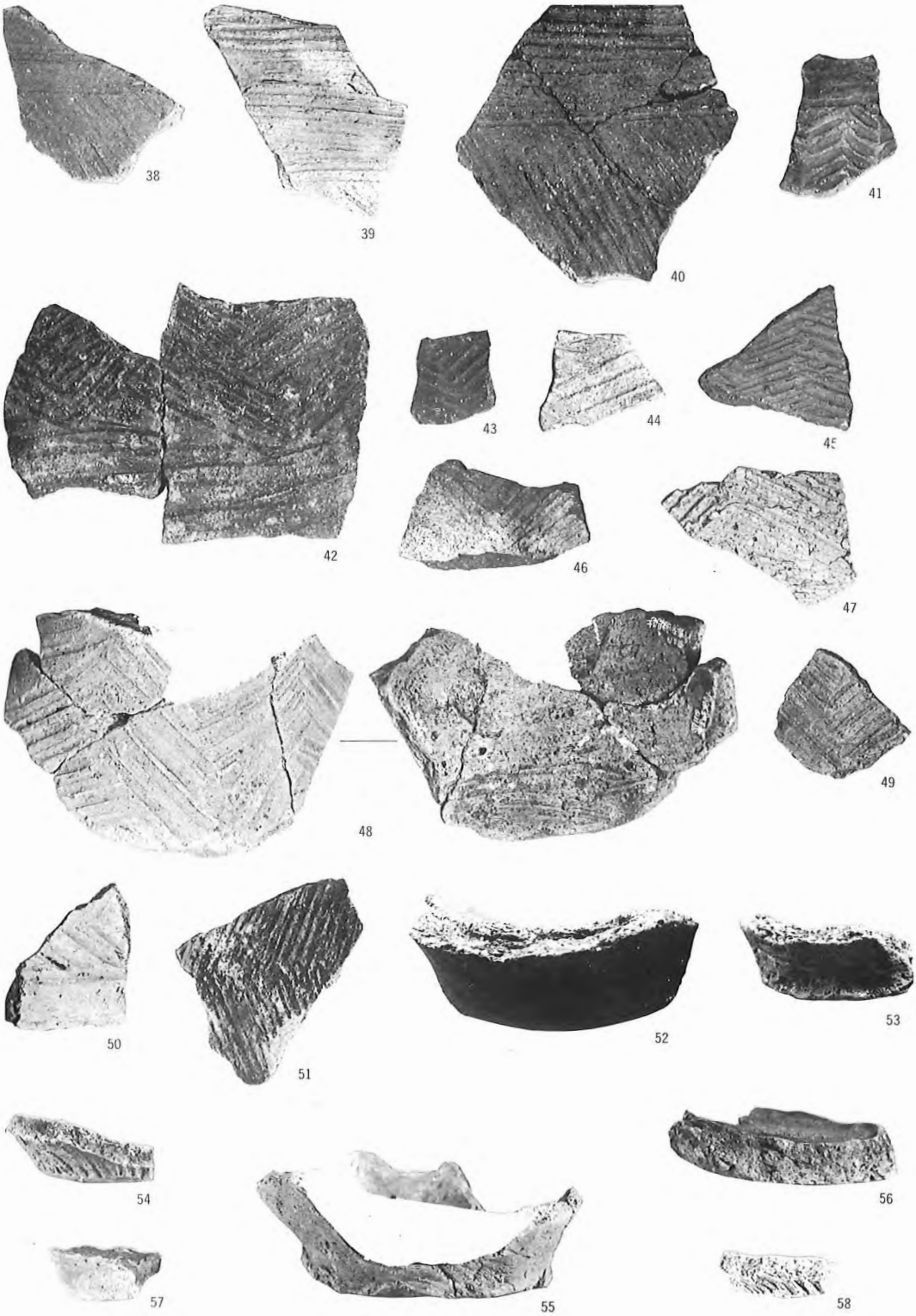
38

39

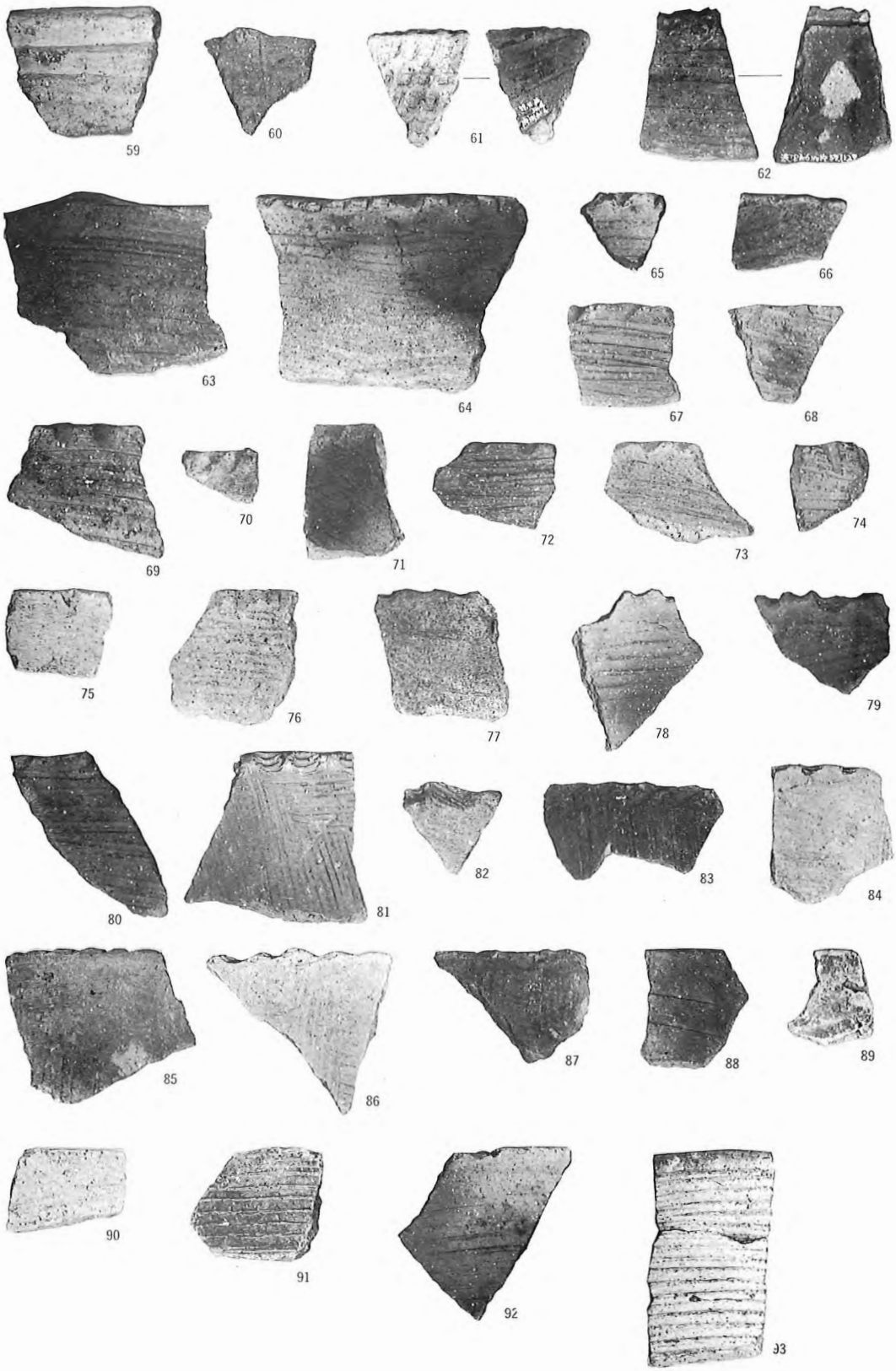
図版15　A地区出土土器①



図版16　A地区出土土器②



図版17　A地区出土土器③



図版18　A地区出土土器④

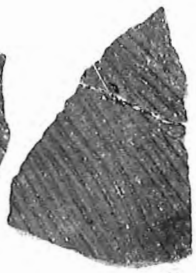
94

95

96

97

98


99

100

103

101

102

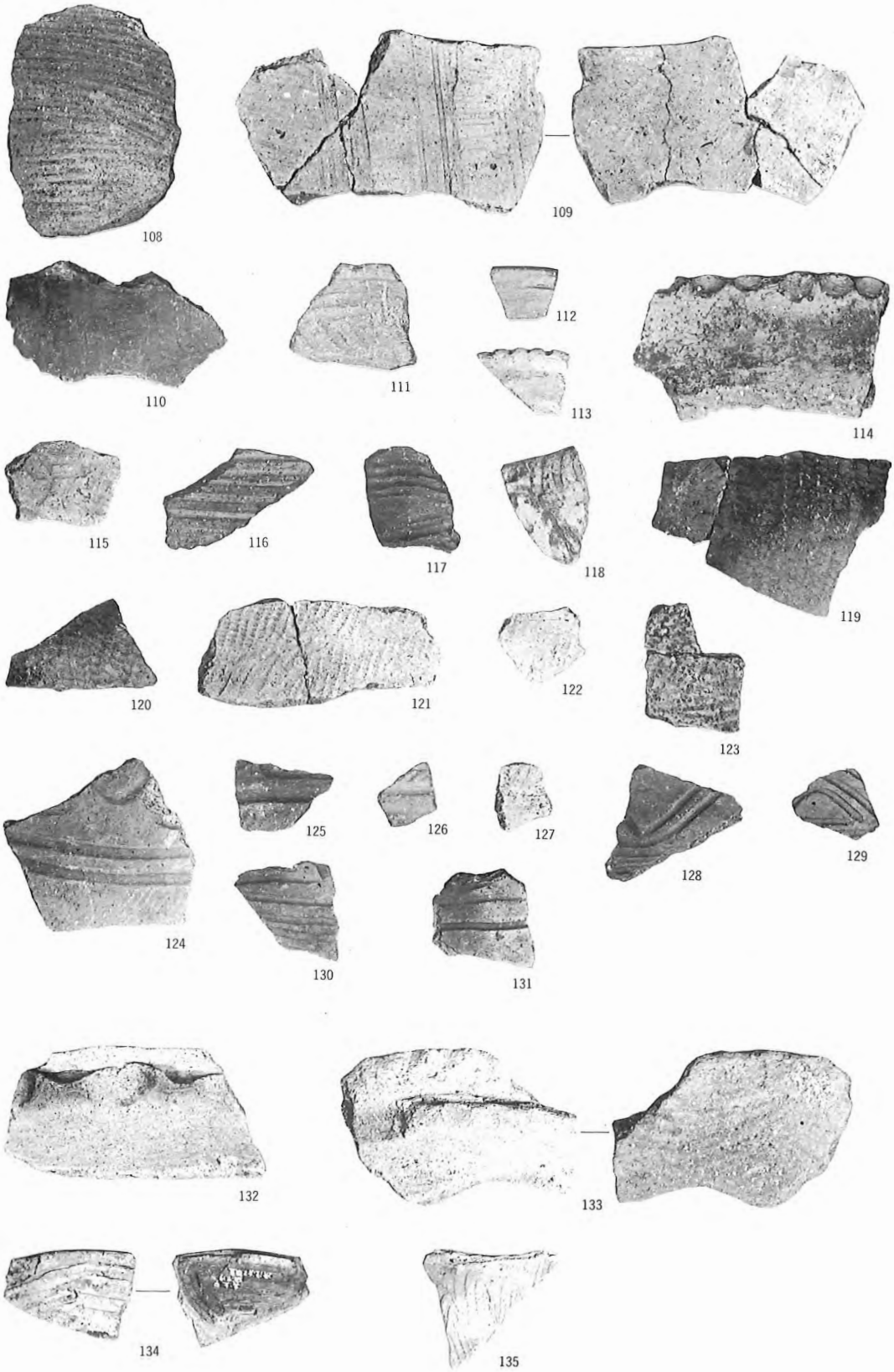
104

105

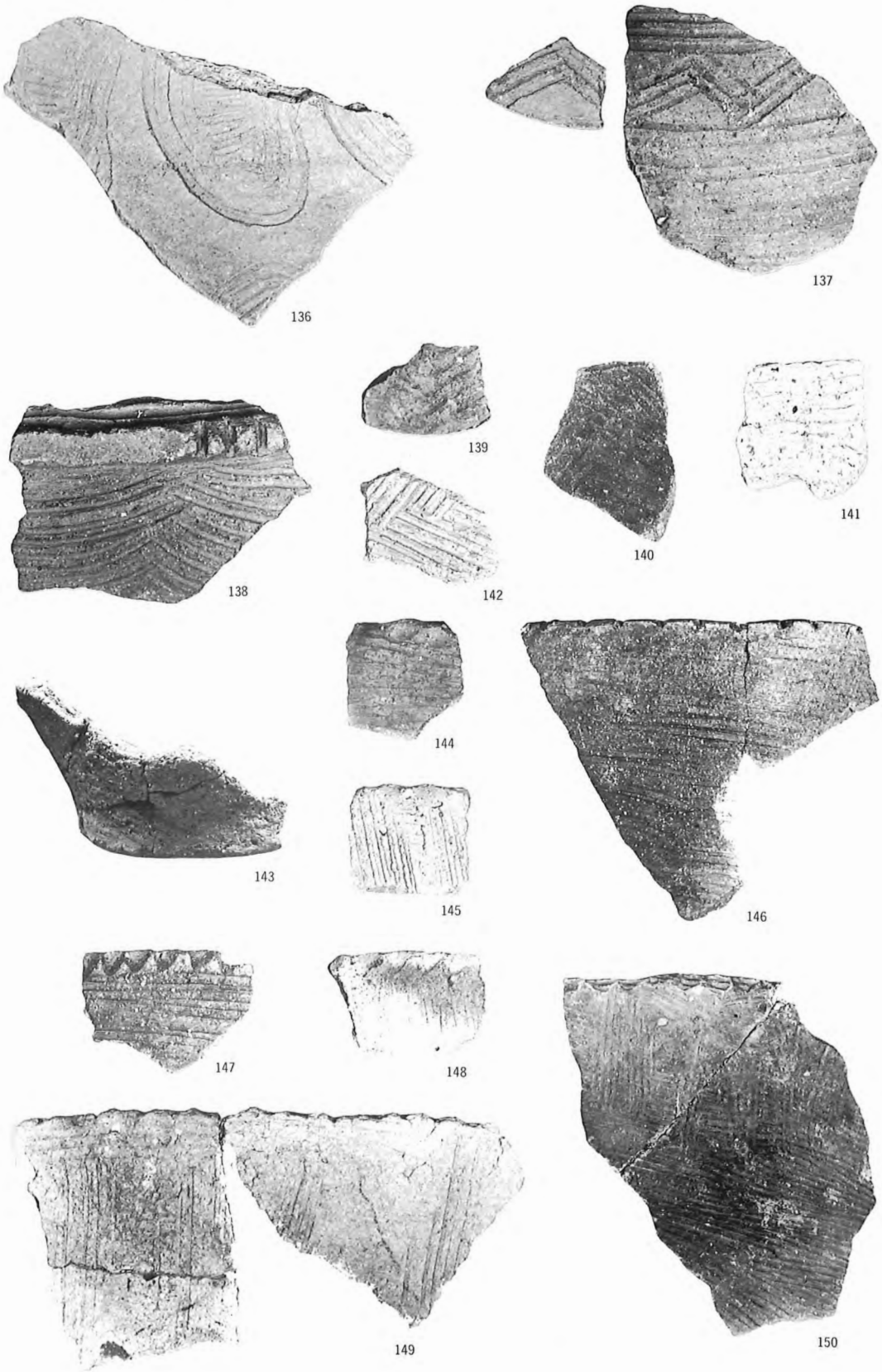
106

107

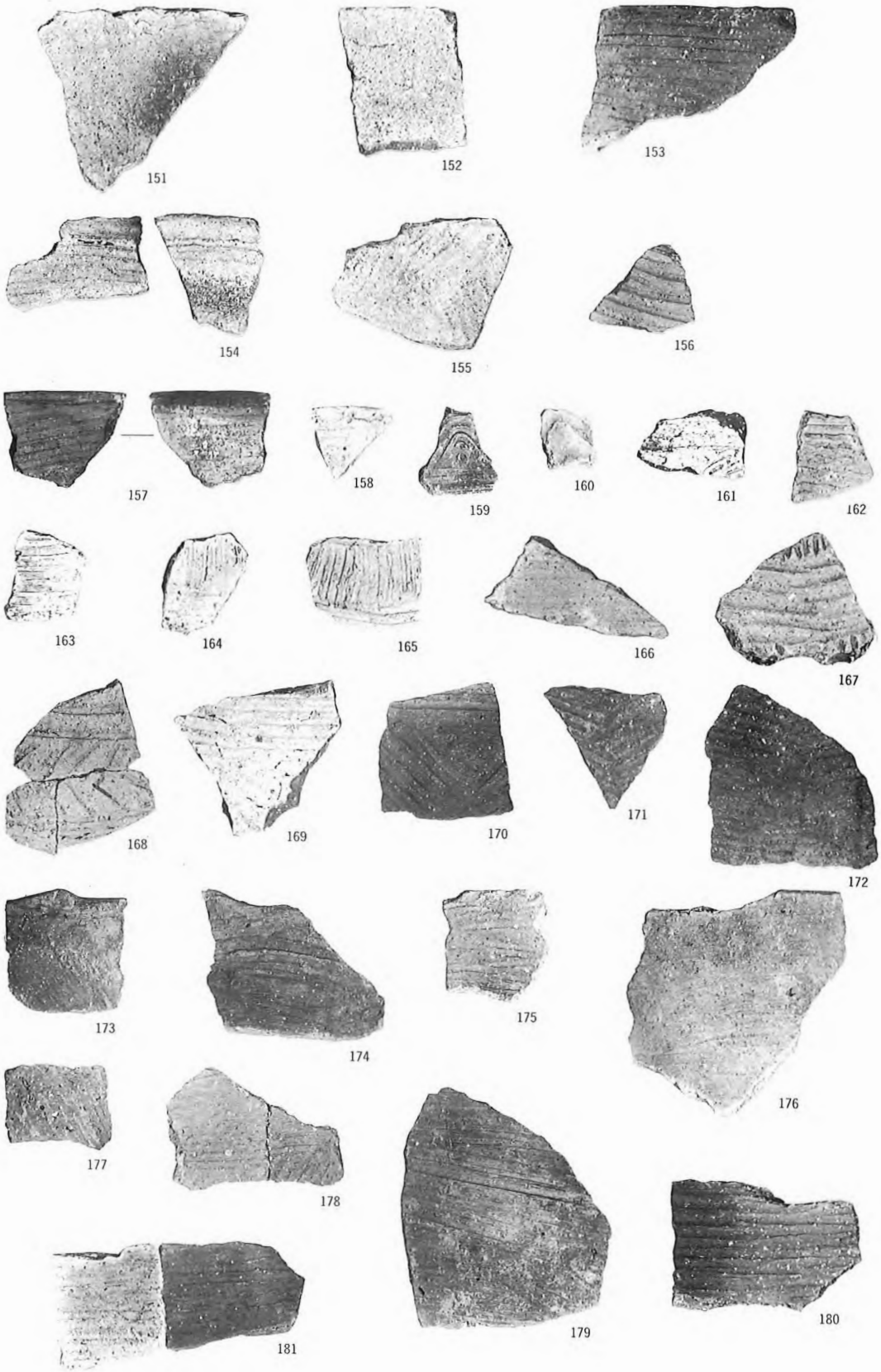
図版19　A地区、B地区出土土器



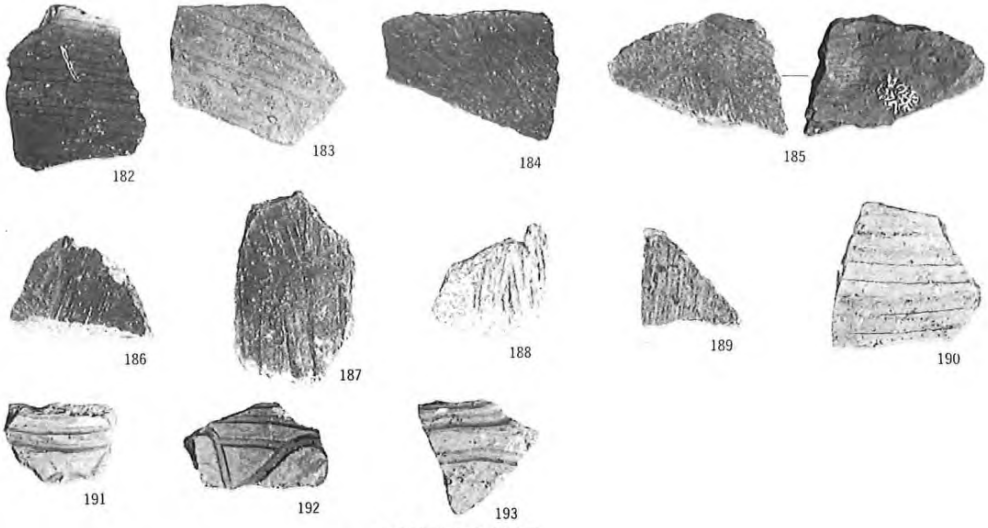
図版20　B地区出土土器



図版21　B地区、C地区出土土器



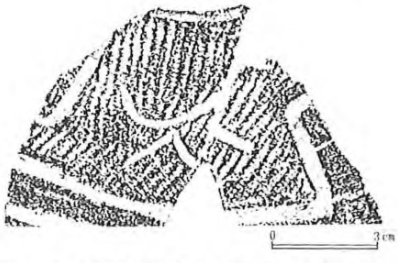
図版22　出土遺物



C地区出土状況

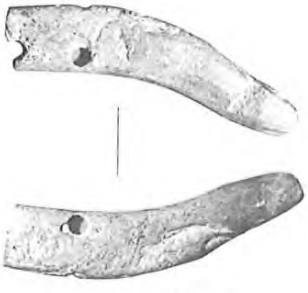
富士川町山王遺跡 E地点出土土器

出土土器（カワラケ）



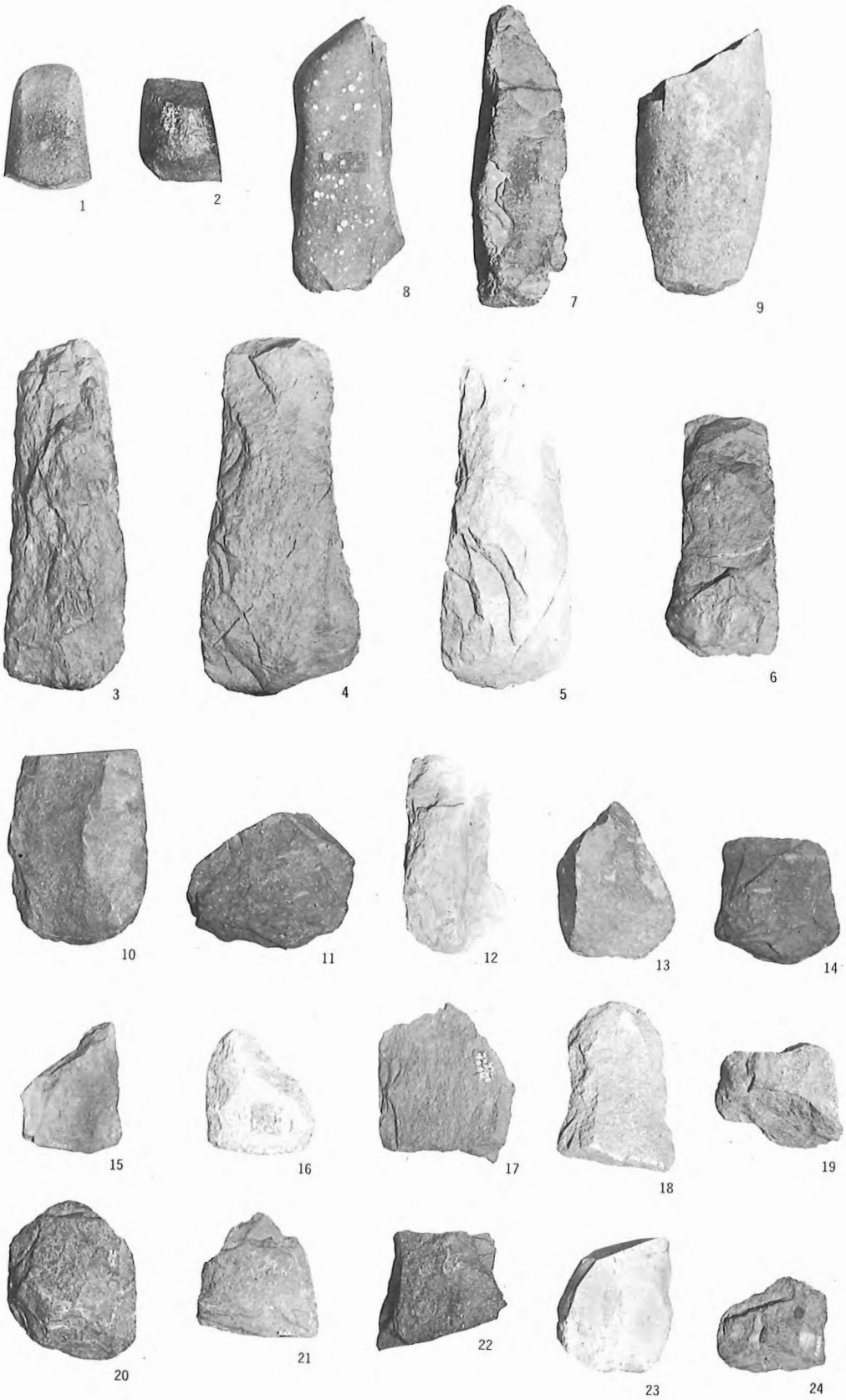
C１２号遺物集中区 No.3 土器（部分）

環状石斧 (No.36)

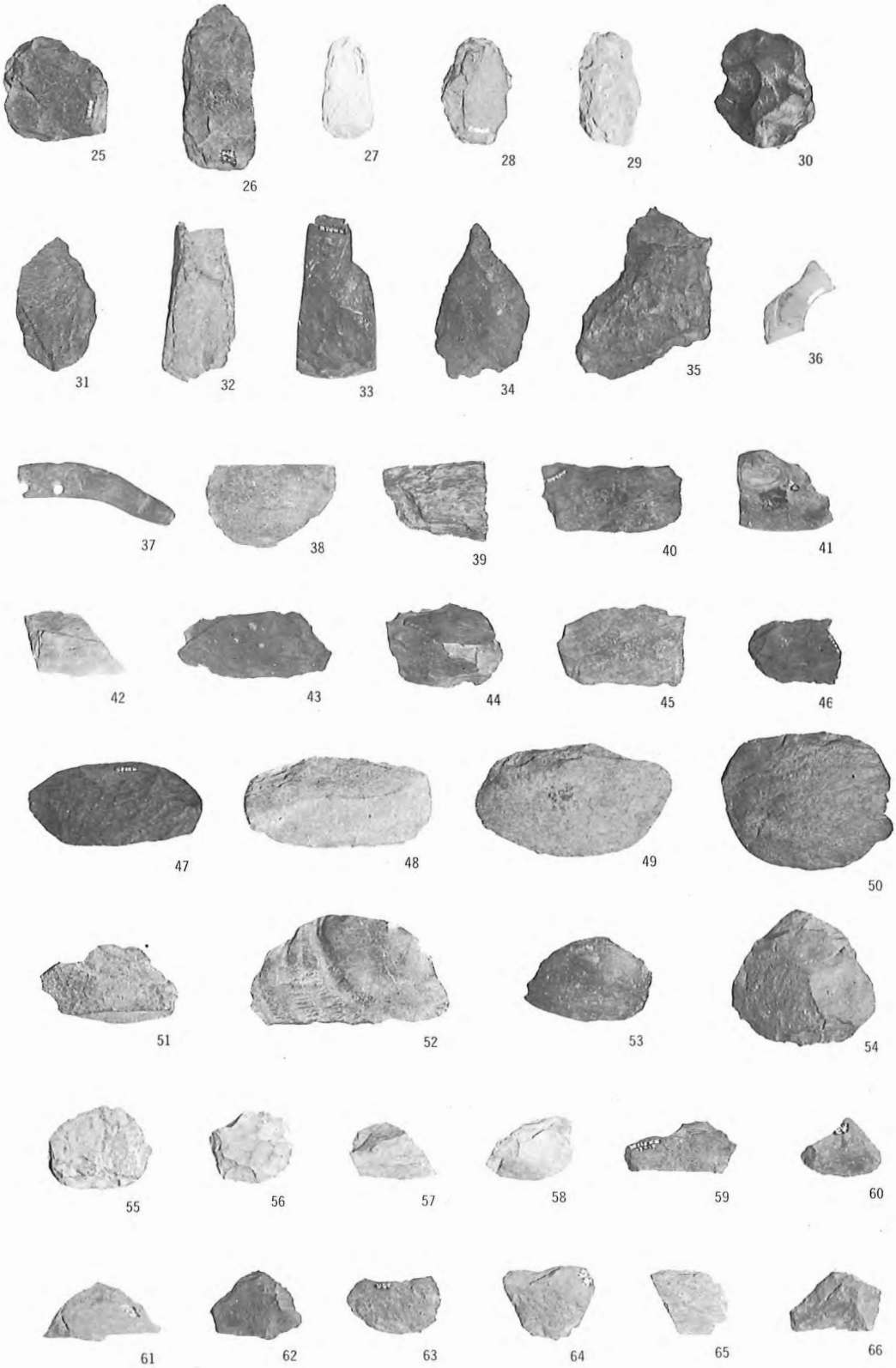


石包丁 (No.37)

図版23　出土石器①



図版24　出土石器②


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66

図版25　出土石器③

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

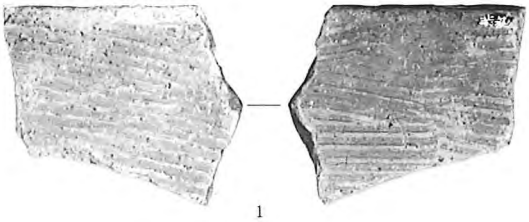
82

83

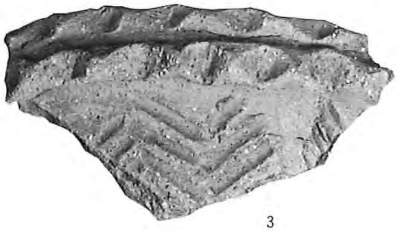
84

85

図版26　荻氏表採土器①

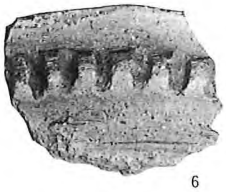

1

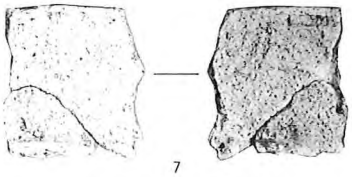
2


3

4

5


6


7

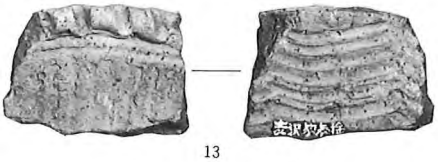
8

9

10

11

12

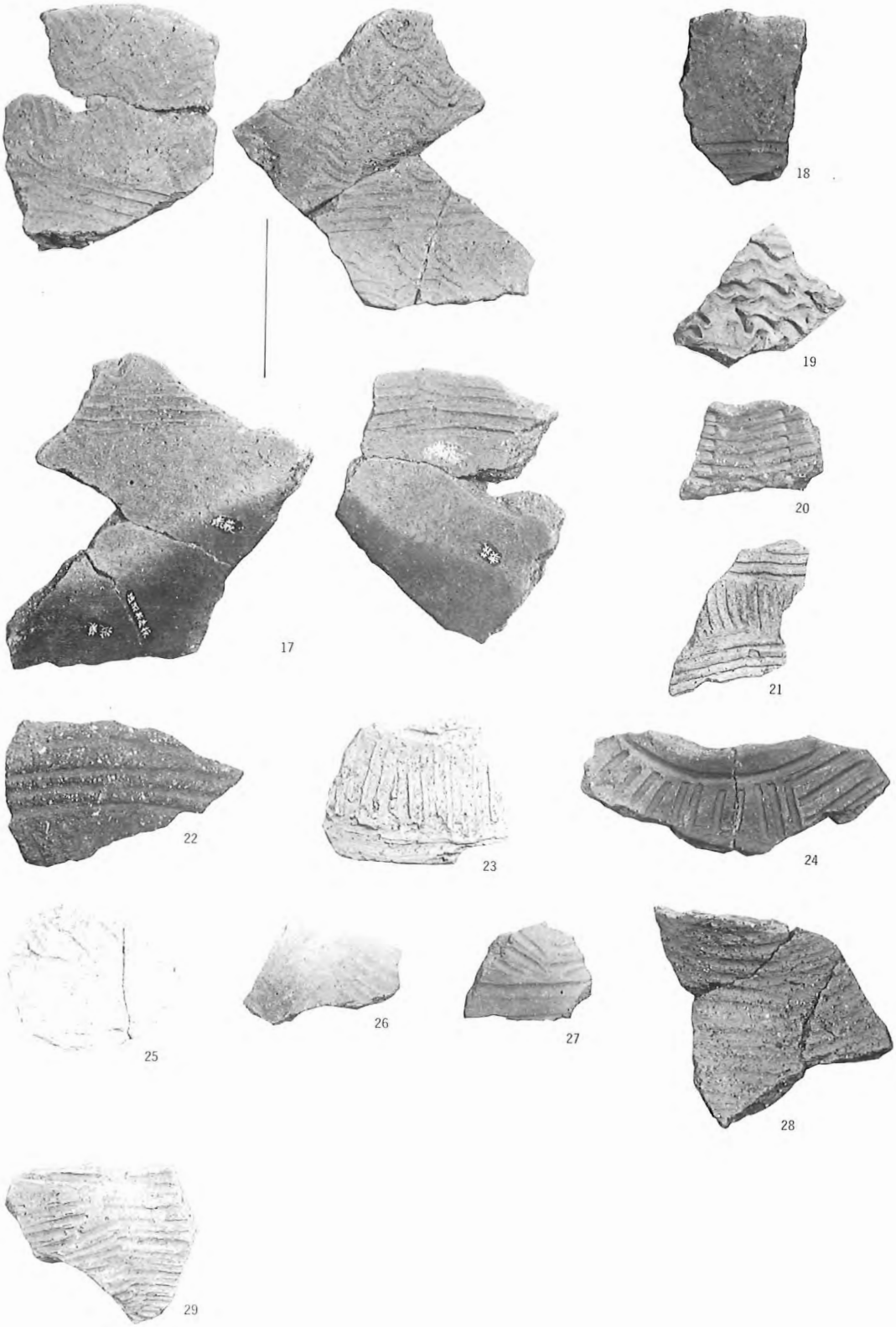

13

14

15

16

図版27　荻氏表採土器②



図版28　荻氏表採土器③

30

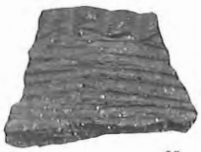
34

35

31

36

37

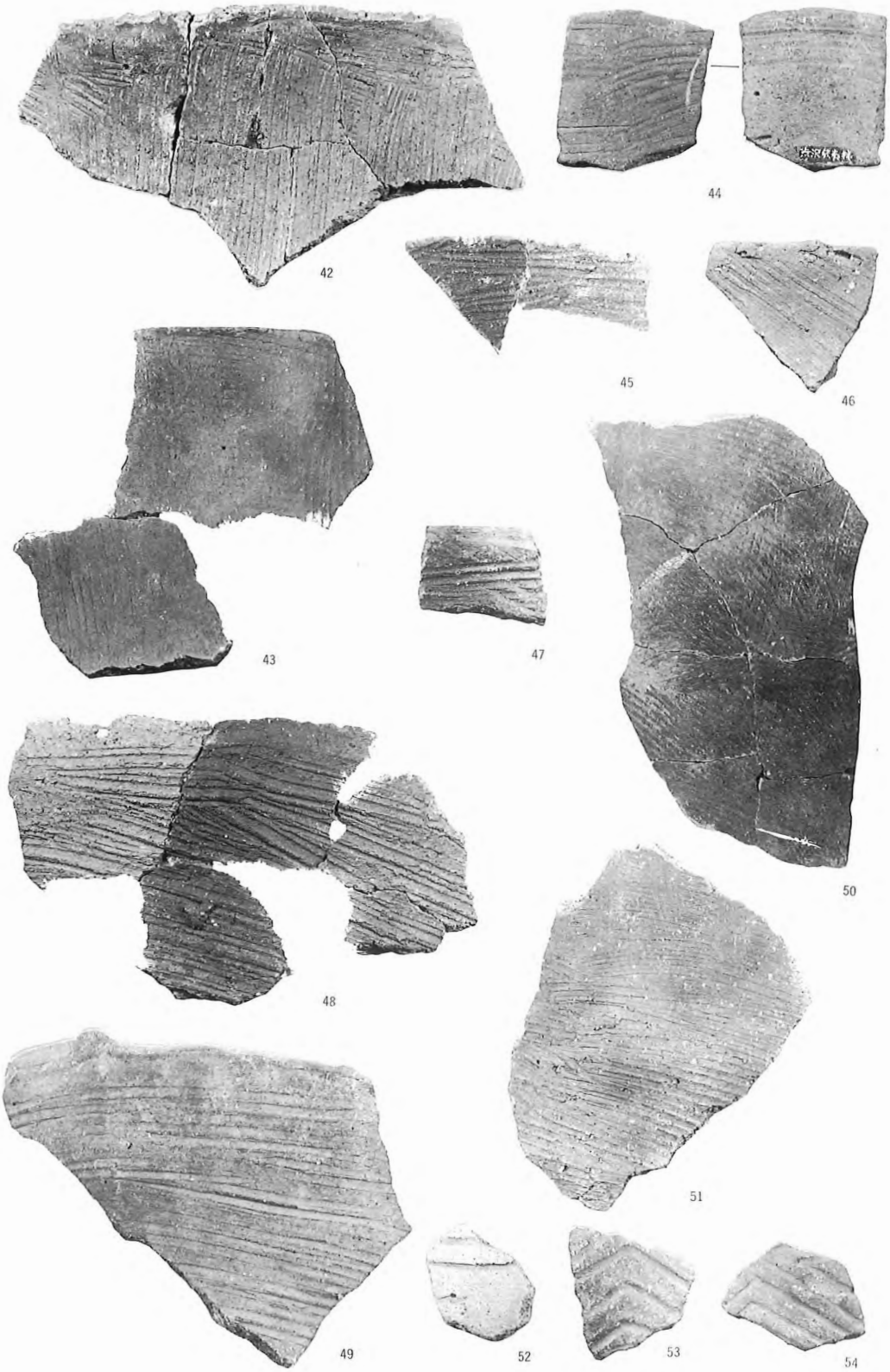

38

39

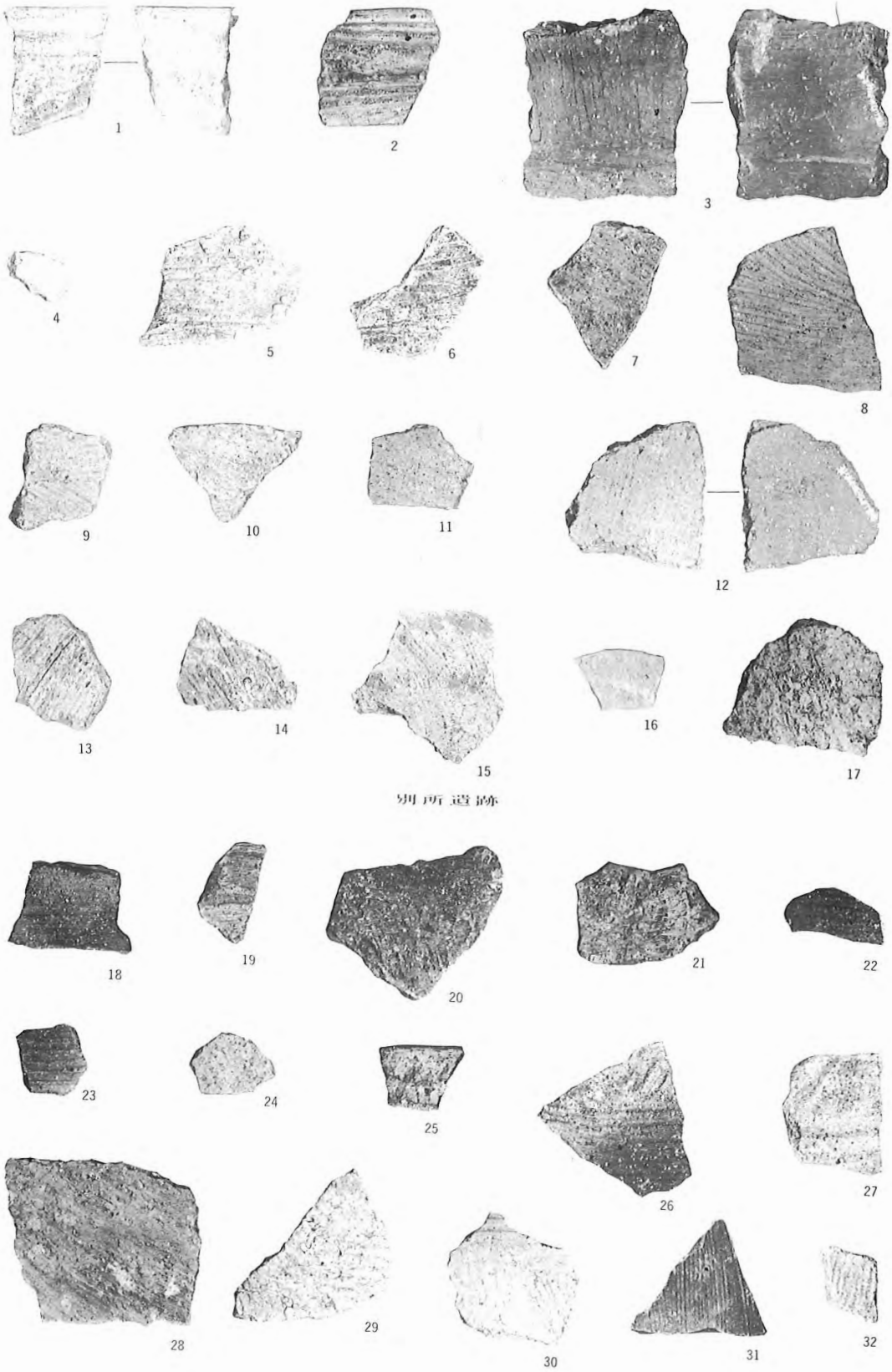
40

41

図版29　荻氏表採土器④



図版30　表採土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
別所遺跡
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

富士宮市文化財調査報告書第13集

渋　沢　遺　跡

平成元年３月１３日

編集　富士宮市教育委員会

発行　富士宮市教育委員会

〒418　富士宮市元城町１番１号

(0544) 27－３１１１㈹

印刷　㈱　緑　星　社